

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

アニュアルレポート2018



大学教育再生加速プログラム

山口大学

# YU-APアニュアルレポート2018

## 目次

### I. はじめに

巻頭言 .....	1
-----------	---

### II. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業実績概要

1. 中間評価の結果 .....	3
2. FD・SD・TAD・ODの枠組 .....	8
3. ALベストティーチャー表彰制度に基づくFD・SDワークショップの実施 .....	9
4. ディプロマ・ポリシーとポートフォリオによる学修評価のワークショップの実施 .....	11
5. 教育改善FD研修会の展開 .....	12
6. ラーニング・アドバイザー養成講座の実施 .....	13
7. 学生参画型FDの取組実績 .....	14
8. 高大接続関連取組と他機関訪問調査の受入 .....	15
9. チームAPによる活動 .....	16

### III. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の実績

1. ALポイント認定制度の全学的展開 .....	19
2. ALベストティーチャー表彰制度 .....	20
3. Teaching & Learning Catalog .....	21
4. 正課外教育プログラムの開発と実践 .....	23

### IV. テーマⅡ（学修成果の可視化）の実績

1. 学修到達度調査及び学修行動調査の実施状況 .....	25
2. 評価指標と分析対象データ .....	26
3. 代表的な直接評価指標と間接評価指標から見る学生の状況 .....	26
4. 直接評価指標と間接評価指標の相関 .....	31
5. 直接評価（成績）の規定要因分析 .....	32
6. 間接評価（資質・能力、コンピテンシー）の規定要因分析 .....	34
7. 縦断的調査による成長グループの学修・生活時間の分析 .....	37
8. 直接評価・間接評価の試行的分析のまとめ .....	40
9. YU CoB CuS の有効性の検証に関する調査 .....	40
【参考】学修行動調査2018質問紙 .....	43

### V. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業関連イベント報告

1. 第3回スチューデント・リーダー・プログラム（SLP）【キャリア開発】 『ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事～大学職員の先輩に聞いてみよう～』 .....	47
2. 第9回・第10回スチューデント・リーダー・プログラム（SLP）【ラーニング・スキル開発】 『ライティング入門講座～レポートの基本的な作法とコツをつかめ～』 .....	49



3. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 『アクティブ・ラーニング (AL) ベストティーチャー表彰記念FD・SDワークショップ～第2回ALベストティーチャーによる模擬授業～』	51
4. 第11回・第12回学生・リーダー・プログラム (SLP) 【ラーニング・スキル開発】 『プレゼンテーション入門講座～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ～』	55
5. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) FD・SDワークショップ『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは～今、改めて学修成果の可視化について考える～』	57
6. 大学マネジメントセミナー2018 in やまぐち『地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2～新しい時代における大学マネジメント～』	61
7. 2018ラーニング・アドバイザー養成講座 (第1～2回)	65
8. 山口大学 共有ワークショップ2019「多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは～高大接続・社会接続の観点から～」	69

## VI. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業成果報告

1. チームAP合宿 分科会A	71
2. 平成30年度大学教育再生加速プログラム テーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウム	74
3. 大学教育学会2018年度課題研究集会ポスターセッション	82
4. SRHE (Society for Research into Higher Education) Newer & Early Career Researchers Conference 2018	83

## VII. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アドバイス会議

1. 第13回アドバイス会議	87
2. 第14回アドバイス会議	88

## VIII. 各種セミナー等参加報告

1. 平成30年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議	89
2. 2018年度大分大学FD研修会 (学修ポートフォリオと教育の質保証) 「eポートフォリオシステムを活用した看護学教育システムの概要・教員体制づくりと今後の課題」	91
3. SRHE (Society for Research into Higher Education) Newer & Early Career Researchers Conference 2018 and SRHE Annual Research Conference 2018	93
4. 早稲田ボランティアプロジェクト (WAVOC) 成果報告シンポジウム「のめり込む学生の育て方～学生の情熱×現場×教員の専門性～」	95
5. 産業能率大学第4回公開FD研修会「高大連携・接続の現状課題と今後の展望」	100
6. 大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学AP合同フォーラム「今、あらためて学修成果とは何かを問う：第3期認証評価の先のFDを目指して」	102
7. テーマII・V採択校共催シンポジウム「社会が求める高等教育の質保証を考えるー学修成果の可視化・卒業時の質保証ー」	105

8. 金沢工業大学・京都市立京都工学院高等学校第2回高大連携教育改革シンポジウム 「学習者中心の教育への転換」 .....	108
9. 創価大学第9回学士課程教育機構FD・SDセミナー「2018年度AP事業報告会」、創価 大学ラーニングコモンズ“SPACe”開館5周年記念シンポジウム .....	110
10. 日本福祉大学（美浜キャンパス）訪問調査 .....	113
11. 大学コンソーシアム京都第24回FDフォーラム「大学におけるダイバーシティ」 .....	115
12. 千葉大学教育学部AP事業訪問調査 .....	119

## IX. 活動日誌・編集後記

1. 活動日誌 .....	121
2. 編集後記 .....	125



# I. はじめに





## 巻頭言

福田 隆眞（理事・副学長（教育学生担当））

山口大学では、文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択（2014 年度）を受け、積極的に大学教育改革を進めてまいりました。テーマ I 「アクティブ・ラーニング」、テーマ II 「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献することを目指しており、着実に成果を挙げています。

これらの成果が高く評価され、昨年度の中間評価では最高の「S 評価」を受けました。

2015 年度から導入した AL ポイント認定制度では、当該授業でどの程度アクティブ・ラーニングの活動をしているのか、シラバスに明示されることとなりました。昨年度までに、学士課程教育全体でのアクティブ・ラーニング型授業の割合が AP 事業の最終目標である 70%を超える広がりを見せています。

また、AL ポイントや学生の授業満足度をもとにアクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度も 3 年目を迎え、今年度は 5 科目・14 名を選定し表彰を行いました。また、昨年度に引き続き、AL ベストティーチャー表彰を受けた教員による模擬授業を通じた FD・SD ワークショップを開催し、大好評となりました。AL ベストティーチャーによる授業実践を広く共有することで、全学的な教育改善の議論や組織文化の醸成に資することを目指しています。

さらに、YU CoB CuS（Yamaguchi University Competency-Based Curricular System）、学修到達度調査、学修行動調査といった複数の指標を用いた直接評価・間接評価統合型の学修成果可視化モデルの構築に取り組んでいます。そのモデルの一部はすでに修学支援システムに取り入れられており、学生や教員が一目で今の到達度状況を把握できるような仕組みになっています。昨年度からは、学生に対する修学指導を強化するため、教職員を対象としたラーニング・アドバイザー養成講座の実施にも取り組み、学生の成長を支援する体制を一層充実していきたいと思っています。

山口大学・大学教育再生加速プログラムは、事業 5 年目となり、いよいよ本事業も終盤を迎えつつあります。着実に山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）を進めていくことで、組織的なアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化を通じた適切な学修支援を実施し、大学教育改革をより一層加速・推進して参りますので、ご理解ご支援を賜れば幸いです。



## Ⅱ. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業実績概要





## 1. 中間評価の結果

山口大学は、昨年度の末に文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）中間評価において S 評価（計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる）を受けた。本学では、2014 年度に文部科学省・大学教育再生加速プログラム（テーマ I・II 複合型）の採択を受け、テーマ I 「アクティブ・ラーニング」、テーマ II 「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献することを目指し、成果を挙げてきた。特に、2015 年度から導入した AL ポイント認定制度では、各授業シラバスにおいてアクティブ・ラーニングをどの程度行っているかという度合を明示し、2018 年度には、アクティブ・ラーニング型授業の割合が学士課程教育全体で 70%を超える広がりを見せている。S 評価を受けたのは、全体では 77 件中 14 件、テーマ I・II 複合型では 21 件中 4 件という狭き門であり、この結果を受けて更なる事業推進とともに、国内外に向けた成果発信を行うことが必要であると考えられる。

特に評価の高かったのは、以下の点についてである。

- ・事業以前からの大学教育改革をベースにした事業推進である「山口大学教育理念」「山口大学生に期待される汎用的能力」の整備
- ・新カリキュラムシステム YU Cob Cus による学びの好循環促進
- ・AL ポイントの広がりや修学支援システムの機能追加など、アクティブ・ラーニングの推進の取組と学外を含めたワークショップ等による改善
- ・テーマ別のタスクフォースによる実施体制
- ・各学部執行部との懇談会
- ・内部評価・外部評価に加えて、教職員、学生、外部アドバイザーまでを交えた PDCA サイクルの体制
- ・事業実施環境と専門人材の配置
- ・事業成果の公開と YU・AP による先駆的モデルの波及

本学の AP 事業は、既に進行していた「山口大学改革プラン」を加速させるものである。従来の「山口大学教育理念」を学修の評価に相応しい形に整え、学修成果の可視化を進めるため、YU・AP 事業推進委員会や教育研究評議会での議論を通して「山口大学教育理念」を整理し、「山口大学生に期待される汎用的能力（山口大学生コンピテンシー）」を明確化した。今年度は、学修到達度調査・学修行動調査を基にした学修成果のレーダーチャート化の内容を見直し、それに伴う修学支援システム改修を進め、最終年度に向けて、学修成果可視化の充実に取り組んでいる。

また、ディプロマ・ポリシーと授業科目を結びつけ、学生が授業を通して身につけた自身の能力を入学から卒業まで見通して確認できるカリキュラムシステムとして、国際総合科学部を先行学部、YU CoB CuS の導入を進めている。国際総合科学部での YU CoB CuS の具体的な運用を検証しながら、他学部での導入を進めている。この動きに関連して、各学部では、2016 年度に完了した 3 つのポリシーの見直しを受けて、カリキュラムマップ、カリキュラム・フローチャートの改訂作業を進めた。

そして、アクティブ・ラーニングを共通教育から学部専門教育に拡充しながら組織的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な力「山口大学生に期待される汎用的能力（山口大学生コンピテンシー）」の育成を保証するため、先導的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の「学びの好循環」の創出を目指している。「学びの好循環」とは、学習者中心の観点に立ち、学生の学びに焦点を当て、アクティブ・ラーニングの効果により、授業外学修時間の増加や学修成果の可視化を図り、学修履歴を集積するポートフォリオに基づき、適切なラーニングアドバイス、キャリアカウンセリングなどの学修支援を受けられるよう措置し、学生のさらなる成長を保証することである。

テーマ別のタスクフォースによる実施体制と各学部執行部との懇談会は今年度も継続して活用している。本学が掲げる事業目標を達成するため、本事業を円滑に実施できるよう、学長や副学長（教育学生担当）を中心とした実施体制を構築し、YU-AP 事業推進委員会、テーマ別タスクフォース及び自己点検・評価タスクフォースを定期的を開催し、事業ロードマップに基づいた課題整理及び実施検討を行ってきた。更に、ここでのフィードバックを活かすだけでなく、共育ワークショップ等に代表される、学生・外部講師・高校生まで巻き込んだ発表とフィードバックの場を設けることにより、今年度も順調な PDCA サイクルの体制を築いている。

また、事業実施環境として、事業推進スタッフである特任助教、事務補佐員、学生スタッフが相互連携しながら事業運営を行うことで、本事業専用のホームページの運用やニューズレター等の発刊による情報発信を積極的に行ってきた。学生の声を反映させながら、学生の主体的な学びを促進するための方向性を明確化してきた。

AP 事業の成果発信としては、『YU-AP ニュースレター』のほか、教員による優れた授業実践や学生による主体的な学修実践を集めたアクティブ・ラーニング実践集『Teaching & Learning Catalog』、年度報告書『YU-AP アニュアルレポート』などを発刊してきた。また、毎年度末には事業成果発表の場を設けており、今年度は、学生リーダーによる学びの祭典「学生 FD サミット 2019 春」（本学学生 5 名、教員 2 名参加）で発表を行い、新たな成果を得ることができた。これらの評価された実績を基礎に、今年度の成果による積み重ねと発展を続けてゆき、最終年度を意識した AP 事業目標達成に向けた取り組みを進めたい。

#### 【指標の公表】

AP 事業における必須指標及び本学の独自指標について、2014～2017 年度の実績、さらには、2016～2019 年度の目標値は下表のとおりであり、定量的な数値目標の達成状況について順調に推移している。特に、必須指標である「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」は最終目標値 70%に対して「72.4%」、同じく必須指標である「アクティブ・ラーニングを行う専任教員数」は最終目標値 68.4%に対して「83.0%」と、共通教育と専門教育の垣根を超えて、学士課程教育全体に広がり、2017 年度時点で最終目標値を既に上回っている。

2017 年度には、前年度に初めて表彰を行った AL ベストティーチャーの優れた授業実践について、AL 型授業実践集『Teaching & Learning Catalog』への記事掲載に留まらず、生（ライブ）の授業実践を体感してもらうことがより効果的と考え、模擬授業型 FD・SD ワorkshop を初めて企画実施したところ、学内の若手教員から好評であった。このよ

うに、AL ベストティーチャーをエンジンとした AL 推進の好循環が順調に進展している。このような全学的な AL 推進に伴い、学生 1 人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間（1 週間当たり）が 2014 年度と比較して、2017 年度には「10.42 時間」と大幅に増加している。

また、ルーブリック開発について、2017 年度には、ルーブリック活用による学修評価をテーマにした FD・SD ワークショップを、本学の医学教育センターと連携して企画実施し、医学部医学科におけるルーブリック活用事例紹介などを行った。本学では、2016 年度以降、医学教育や地域フィールド学習において、ルーブリックを活用する実践事例が増加傾向にあるほか、2017 年度には、スタディ・スキルに関するルーブリックを新たに 3 種類（ライティングスキル、プレゼンテーションスキル、情報探索スキル）開発した。このような状況から、ルーブリック活用の実績も伸びている。

さらに、AL 推進及び教学マネジメント強化に関する FD・SD 研修について、全学研修会のほか、各学部主催 FD・SD 研修を積極的に行い、年間計 27 回、1,376 名の参加者を数えた。2017 年度における新たな取組として、2017 年 12 月に、従来の SD セミナーに代えて新たに「大学マネジメントセミナー」を企画し、100 名を超える参加者を得て、教職協働における諸課題について議論を行い、大学マネジメント人材の専門性向上のための知識や能力について共有する機会となった。また、2017 年 11 月～2018 年 1 月にかけて、「ラーニング・アドバイザー養成講座」を新たに開講し、計 23 名の大学事務職員が受講し、学生の「学びの好循環」に貢献できる学修支援者としてのスキルや態度を学び、全 3 回の講座を受講・修了した 8 名には「ラーニング・アドバイザー認定証」が授与された。この実績により、ラーニング・アドバイザーの配置数が大幅に伸びた。

以上のとおり、本事業が目指しているアクティブ・ラーニングの組織的推進、それに伴う学生の授業外学修時間の増加、さらには、学修成果可視化や教職員が一体となった資質向上の取組が順調に進んでいると言える。

図表Ⅱ-1 定量的な数値目標の達成状況

	2014 年度	2015 年度	2016 年度		2017 年度		2018 年度	2019 年度
	実績	実績	目標	実績	目標	実績	目標	目標
<b>【テーマⅠ】◆学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングの実施</b>								
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合 【必須指標】	13.6%	52.1%	60.0%	65.1%	65.0%	72.4%	68.0%	70.0%
アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目の割合 【必須指標】	93.2%	79.3%	60.0%	71.3%	62.0%	66.8%	63.0%	65.0%

	2014年度	2015年度	2016年度		2017年度		2018年度	2019年度
	実績	実績	目標	実績	目標	実績	目標	目標
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合 【必須指標】	45.3%	81.9%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数 【必須指標】	2.4科目	10.8科目	11科目	13.5科目	12科目	15.5科目	12科目	13科目
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間(1週間当たり) 【必須指標】	1.69時間	7.19時間	5.00時間	9.10時間	5.00時間	10.42時間	6.00時間	6.00時間
アクティブ・ラーニング型の正課外教育プログラムの実施数(全学部生対象に限る) 【独自指標】	17プログラム	18プログラム	15プログラム	25プログラム	20プログラム	25プログラム	23プログラム	25プログラム
<b>【テーマI】◆アクティブ・ラーニング推進のための専門集団の形成</b>								
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数 【必須指標】	35.8%	73.1%	51.3%	76.2%	67.2%	83.0%	67.8%	68.4%
アクティブ・ラーニングに関するFD・SD研修実施数、参加者数 【独自指標】	15回 464人	25回 968人	15回 500人	22回 950人	18回 550人	18回 787人	20回 600人	20回 600人
アクティブ・ラーニング推進のためのAL推進チームの形成(FDコーディネータ養成) 【独自指標】	3人	10人	10人	21人	21人	22人	21人	21人
アクティブ・ラーニングにおける優秀な教育実践を表章するALベスト・ティーチャー賞授与数 【独自指標】	0科目	0科目	2科目	5科目	4科目	5科目	5科目	5科目

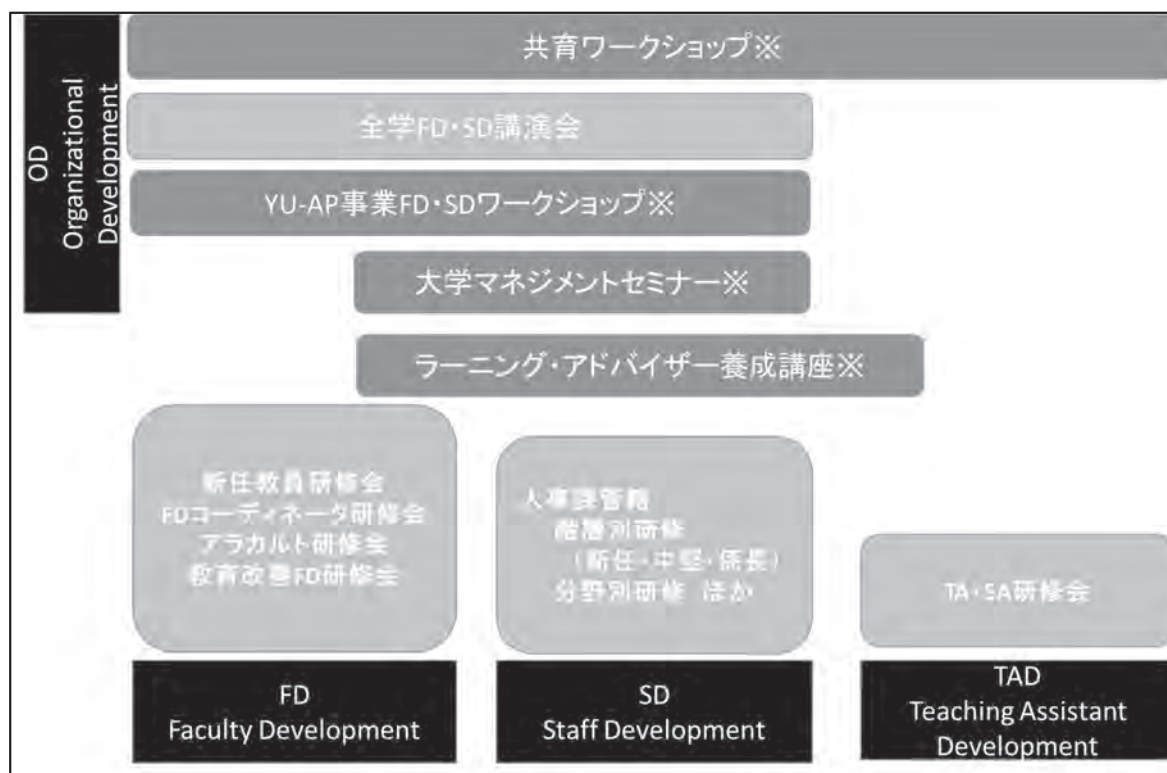
	2014 年度	2015 年度	2016 年度		2017 年度		2018 年度	2019 年度
	実績	実績	目標	実績	目標	実績	目標	目標
<b>【テーマⅡ】◆学修成果可視化モデル構築のための多角的取組の実施</b>								
授業満足度アンケートを実施している学生の割合【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
上記アンケートにおける授業満足率【必須指標】	4.21	4.25	4.2	4.26	4.3	4.30	4.3	4.3
学修行動調査の実施率【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
学修到達度調査の実施率【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
成績評価基準の平準化を目的としたルーブリック評価の導入実績数【独自指標】	9 件	12 件	15 件	17 件	25 件	28 件	30 件	30 件
学生の授業外学修時間(1週間当たり)【必須指標】	13.04 時間	13.58 時間	6.50 時間	13.71 時間	6.50 時間	16.40 時間	7.00 時間	7.00 時間
学生の主な就職先への調査【必須指標】	有	有	有	有	有	有	有	有
<b>【テーマⅡ】◆学修成果測定を支える教学マネジメントの強化</b>								
退学率【必須指標】	1.3%	1.1%	2.0%	1.3%	2.0%	1.4%	2.0%	2.0%
プレースメントテストの実施率【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
教学マネジメント強化のためのFD・SD研修実施数、参加者数【独自指標】	18 回 1,046 人	11 回 693 人	5 回 300 人	10 回 652 人	8 回 400 人	9 回 589 人	10 回 500 人	10 回 500 人
ラーニングアドバイザー及び高度専門職(UEA: University Education Administrator)の配置【独自指標】	3 人	3 人	3 人	3 人	4 人	11 人	5 人	5 人

## 2. FD・SD・TAD・ODの枠組

山口大学では、従来から、FD (Faculty Development)、SD (Staff Development)、TAD (Teaching Assistant Development)、OD (Organizational Development) を区分しながら、毎年度のFD・SD活動を計画・実施してきた。

具体的には、FD活動として、新任教員研修会（年2回）、FDコーディネータ研修会、全学FD・SD講演会、アラカルト研修会（各学部・研究科による選択制）、教育改善FD研修会（全学統一テーマによる各学部・研究科主催）といった既存のプログラムに加え、YU-AP事業においてアクティブ・ラーニング推進及び学修成果可視化を目的としたFD・SDワークショップを行い、強化している。SD活動として、人事課が管轄する階層別研修・分野別研修に加え、YU-AP事業において、大学マネジメントセミナーやラーニング・アドバイザー養成講座を行い、強化している。そのほか、TAD活動としてTA・SA研修会、OD活動として教職員・学生参加型の共有ワークショップを行っており、共有ワークショップはYU-AP事業の取組の一環として位置付けている。

2017年度YU-AP外部評価委員会の指導助言を踏まえ、本学におけるFD・SD・TAD・ODの取組の体系図を整理するとともに、2018年度のFD・SD活動では、受講者に到達目標を明示することに努めるとともに、参加者アンケート等に基づき改善充実に努めている。



図表Ⅱ-2 山口大学FD・SD・TAD・ODの体系図

(なお、※印がYU-AP事業において企画開発しているもの)



### 3. AL ベストティーチャー表彰制度に基づく FD・SD ワークショップの実施

2016 年度から、共通教育におけるアクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果を挙げた教員を表彰する「AL ベストティーチャー表彰制度」が新たに策定された。この表彰制度は本学教員の、教育へのさらなる意欲向上と、アクティブ・ラーニングの推進を目的に創設されたものである。AL ベストティーチャーの選定には、前年度（2017 年度）の授業実践の AL ポイントや、学生の授業評価アンケートにおける授業満足度・理解度・達成度、授業外学修時間、成績評価分布などの指標が用いられ、審査が行われた。その結果、第 3 回目の受賞者として 5 科目 14 名が選定された。

YU-AP 事業では表彰にとどまらず、AL ベストティーチャーの授業実践をアクティブ・ラーニングのグッドプラクティスとして蓄積することを進めている。それらを教員が手に取りやすい冊子 (Teaching & Learning Catalog) にまとめて配布することで、教員のアクティブ・ラーニングの実践に向けたヒントになるとともに、学生の主体的な学びについて改めて議論するきっかけになることを目指している。また、Moodle などを活用することにより、目的に合ったアクティブ・ラーニングの実践情報をタグで検索することができるような、他の教員のニーズに実質的に応えることができるようなシステムを構築することを目指している。



図表Ⅱ-3 アクティブ・ラーニング型授業の“好循環”モデル

そのため、AL ベストティーチャーの授業実践に関する情報収集は、単なる事例集にならないよう、あらかじめ設定した軸によって分類・整理できるように行っている。当該実践において特定のアクティブ・ラーニングがどのような目的で取り入れられたのか、実施するにあたり留意すべき点は何か、その評価はどのようにすべきか、結果として学生はどのような学びをしたのかなどの観点から、その実践の詳細を明らかにし、より多くの教員に授業実践に活かしていく工夫を施している。また、その情報をより広く共有するために、AL ベストティーチャーによる模擬授業型ワークショップも行っている。

2018 年 10 月 22 日 (月) に、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 『アクティブ・ラーニング (AL) ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第 2 回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』は、学内外から大学関係者だけでなく、高等



学校・専門学校関係者を多数集め、計 44 名（学内 22 名（教職員 19 名、学生 3 名）、学外 22 名（教職員 22 名））の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟 16 番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。

模擬授業 Part1 では、辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師より、「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり ～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の模擬授業を行っていただいた。具体的には、授業の初回で行っている自己紹介の模擬体験を通してグループ形成の要点を解説した後、大学の授業として必要な知識を教授しながら、学生によるグループ活動の内容が深まるように指導していることが説明された。最後に、配布資料に従い、グループ活動を通じた学生による自己評価、グループメンバーによる他者評価、さらには、担当教員による提言・コメントなどをきめ細かくフィードバックしながら、授業の達成度を向上する仕掛けについて説明があった。



模擬授業 Part2 では、仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部 助教より、「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング ～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『日本語IVB（読解・作文）』での演習内容の模擬授業を行っていただいた。冒頭、全体の授業のねらいや授業構成の意図について説明があった後、映写されたイラストを表現するアイスブレイクを経て、例題の文章を受講生に読ませて、作文課題につなげる授業パターンについて説明があった。さらに、『日本語Ⅲ（文法）』の授業内容も併せて紹介され、日本語の文章のルール探しを演習形式で行い、単に間違いを探すだけでなく、どうして間違っているのかを問いかけ、学生の主体性を引き出す重要性を説明された。小気味のよい仁平先生の語り口や演習課題を通して参加者同士が楽しみながらワークする中で、教室全体が活気ある雰囲気に包まれていった。各グループを巡回する中で、参加者からの質疑応答に教員が即座に答える自然な雰囲気が生まれていた。



全体的に参加者の満足度が高く、実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという熱い思いが伝わってくるセッションとなった。



参加者による記念写真

#### 4. ディプロマ・ポリシーとポートフォリオによる学修評価ワークショップの実施

2018年11月22日（木）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）FD・SDワークショップ『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは ～今、改めて学修成果の可視化について考える～』が、学内外から大学関係者だけでなく、高等学校関係者を多数集め、計37名（学内13名（教職員11名、学生2名）、学外24名（教職員24名））の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟15番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。

まず、江本 理恵 岩手大学教育推進機構准教授より、「ディプロマ・ポリシー達成度の可

視化と学修ポートフォリオの活用」と題して、岩手大学での先進事例について紹介があった。岩手大学では、教育の内部質保証システムの構築・充実を図る観点から、「アイフォリオ」と称するポートフォリオシステムを開発し、ディプロマ・ポリシー（DP）達成度の可視化、カリキュラムポリシーに基づくDPに関する自己評価チェックリストの運用のほか、学期ごとに学修状況（授業外の学修時間等）に関する自己評価調査



を行う環境を全学的に整備し、運用している状況について説明があった。さらに、このような環境整備のもと、教学データの蓄積を通して、DP達成度状況の経年変化や平成28年度以降のカリキュラム改善前後の学修状況の変容などを分析し、学部でのFD活動に活かしているとの説明があった。

次に、鷹岡 亮 山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授より、「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」と題して話題提供があり、教育学部での授業実践における省察活動の各種紹介を踏まえながら、省察における動画や写真を参照する



ことの有用性について説明があった。さらに、省察を行う際の観点の提示や省察活動の評価のあり方について説明があった。

後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を、記入していただいた後、ペアワークの形式で短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑

応答に展開し、岩手大学人文社会学部での学修ポートフォリオの運用の具体や学修ポートフォリオに基づく修学指導の主担当・副担当におけるシステム上の設定の仕方、さらには、

学修ポートフォリオを有効に活用した省察活動のあり方など、具体的な質問が多数あり、各機関において学修ポートフォリオの開発・運用が喫緊な課題となっていることが窺えた。このほか、学修状況調査のデータ分析に関する詳細を確認する質問もあり、教学データ分析の活用やその説明のあり方など、教学 IR に関して参考となる知見を得ることができた。

今回の FD・SD ワークショップでは、岩手大学 江本先生から多くの情報提供をいただいたことに改めて感謝申し上げたい。ディプロマ・ポリシー達成度の可視化の取組を進める山口大学にとって、大変有意義な機会となった。そして、学修成果の可視化の取組について、学生のため以前に、FD のために有効かつ必要であると力説された江本先生の言葉が印象的であった。

## 5. 教育改善 FD 研修会の展開

2018 年度の学部・研究科主催「教育改善 FD 研修会」のテーマは“教学 IR”であった。

2016 年度に、大学教育センターの下に「教育開発部」「教学 IR 部」を新たに改編・設置されて以降、教学 IR の環境整備や実質的運用が喫緊の課題となっている。「教学 IR とは何か」「教学 IR を通して何ができるのか」「教学 IR を活用するとどのような効果があるのか」といった点について、学部・研究科教員に分かりやすく説明し、理解を深める機会提供を行うのが今回の教育改善 FD 研修会の趣旨目的である。



教育改善 FD 研修会では、担当の大学教育センター専任教員が「教学 IR とは」と題し、教学 IR の目的や手法等について、島根大学の事例を交えながら概要説明した後、本学の教学 IR の事例として、林寛子 アドミッションセンター准教授より「入学者のデータを用いた検証・改善例」を紹介した。具体的には、特別選抜による入学者が大学教育に適応できたかという問いについて、①学業成績 (GPA・TOEIC)、②在籍状況、③大学卒業後の状況、④大学教育における自己意識の分析を行い、平成 28 年度入試からの AO 入試改善に結び付けたことを説明しているほか、平成 28 年度 AO 入試改善後の A 学部での AO 入試入学者 1 年次の TOEIC 成績の改善事例を紹介した。



各学部・研究科からは教学 IR の今後の取組への期待が寄せられ、ビックデータを活用した探索的なアプローチや学位プログラムを通じた学生の学修成果の達成度測定を進めていくことが求められている。

## 6. ラーニング・アドバイザー養成講座の実施

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を昨年度（2017年度）より企画実施しており、昨年度の好評を受け、今年度は対象を山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関に広げ、研修内容を改善充実して実施した。今年度は、2回シリーズとして、山口大学吉田キャンパス共通教育棟2階会議室を会場に、1月25日（金）に開催された第1回（知識理解編）では17名（職員14名、教員3名）、2月15日（金）に開催された第2回（スキル修得編）では14名（職員10名、教員3名、学生1名）、延べ31名の参加があり、山口県立大学、徳山大学からの参加者があった。また、昨年度を超える13名の受講生が修了要件を満たし、「ラーニング・アドバイザー認定証」を授与された。

第1回（知識理解編）では、千葉大学アカデミックリンクセンター 我妻鉄也 特任助教、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授から学習支援の専門職化やラーニングcommonsにおける学習支援の実際や効果について事例紹介をいただき、先進情報を学んだ。後半のグループワークセッション「みんなの学習支援の課題について話し合ってみよう！」では、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授によるファシリテーションのもと、4グループに分かれて、学習支援者としての「今」を見つめ、学習支援者としての「未来」を思い描き、学習支援の「今」と「未来」を比較して組織レベル・個人レベルで足りないもの、必要なものをリストアップして模造紙にまとめる（見える化する）ワークを行い、全体共有・発表を行った。学習支援の専門職の必要性や学生の自主性を引き出すようなコミュニケーションの工夫、学習支援に関わる組織間の連携などの共通的課題が浮き彫りとなった。

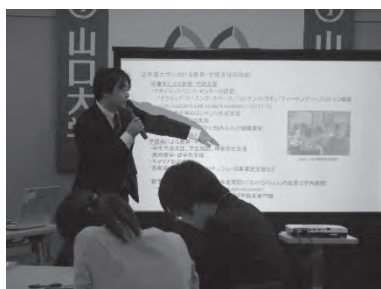
第2回（スキル修得編）では、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授のファシリテーションにより、学習支援のために必要なコミュニケーションスキルとして、「リフレーミング」「オープンクエスション」「アサーション」の意義を理解しながら、ペアによるロールプレイングを行って、実践的スキルを体得した。特に、最後の「アサーション」の演習では、受講生全体の前でロールプレイングする機会を設けて、良かった点・改善点を確認し合った。

今回のラーニング・アドバイザー養成講座では、新たにレポート課題を課すことで、受講生個々人が学習支援に対してどのように取り組み、どのような課題を抱えているかを自分自身で振り返るとともに、受講生全員で見直す機会を設けることができたことは大きな収穫であった。また、2回それぞれに行った受講者アンケートにおいても満足度が高く、有意義な機会設定ができたように思われる。今年度の実績を踏まえながら、来年度以降の研修内容を更に充実させていきたい。





第1回オリエンテーション  
山口大学 林



第1回事例紹介  
千葉大学 我妻先生



第1回事例紹介  
同志社大学 浜島先生



第1回グループワーク



第1回グループ発表



第1回講師を囲んでの集合写真



第2回講師  
同志社大学 浜島先生



第2回 アサーショントレーニングの一コマ



福田副学長から認定証授与

## 7. 学生参画型FDの取組実績

山口大学では、本学の取組が文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択を受ける以前から、学生参画型FD（学生の参画を得ながら大学教育のよりよい発展を目指す活動）に取り組んでおり、学生FDサミットに継続的に参加している。

学生FDサミットとは、学生の声を教育改善や学修環境改善に活かす学生参画型のFDを行う全国各地の大学生団体が集結して意見交換や情報交流を行う全国イベントであり、年2回（春と夏）開催されている。本学からは毎年、YU-AP学生スタッフや教職員が参加しており、2017年3月には、山口大学主催で



『学生 FD サミット 2017 春』を開催し、全国から約 260 名の学生・教職員の参加者を集めた。2018 年 3 月 8 日（木）・9 日（金）、法政大学で開催された『学生 FD サミット 2018 春』、ポスターセッションにおいては、大学教育センターの支援を受けて活動する YU・AP 学生スタッフが作成したポスターが最優秀賞「ポスター大賞」を受賞した。2017 年度に取り組んできた YU・AP 学生スタッフの活動内容が高く評価されるとともに、切り絵などの工夫を凝らしたポスター展示の成果であり、参加学生・教員一同、大きな喜びに包まれた。

2018 年度の学生参画型 FD 活動は、『学生 FD サミット 2018 春』で掲げたテーマを実現すべく、学生メンバーが地域活動を通して自分のアイデアをカタチにする活動を展開した。具体的には、山口七夕ちょうちんまつりにおける短冊&イルミネーション企画（家族連れや若者約 100 名参加）など、教職員・地域が協働して学習者の学びの充実を図る Learning Development の取組を行った。



この他、2016 年度から取り組み始めた学生の学びのプロセスを Learning Catalog としてまとめる活動については、今年度はより多くの学生の声を教育改善に活かすために、第 1 回・第 2 回合わせて 9 名の学生の参加する座談会形式で行われた。学生による学生のための取材・カタログ作成は、学生同士の忌憚ない意見を交わしながら、より良い教育の場・学びの場を描き出す、貴重な学び合いの機会となっている。

## 8. 高大接続関連取組と他機関訪問調査の受入

YU・AP 事業では、学内の教育改革だけでなく、AP 事業採択校間の情報交流、さらには、我が国の高等教育全体における質保証、高大接続改革に貢献すべく、積極的な情報発信に努めることを重要な使命と考えている。本学の取組に関心を示し、訪問調査を受ける機会も多く、2014 年度以降、国立大学 3 機関、公立大学 3 機関、私立大学 7 機関、さらには日本私立学校振興・共済事業団からの訪問調査を受けている。また、2018 年度には、熊本保健科学大学、福岡医療短期大学、テーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウムでの基調講演・事例報告の依頼を受けたほか、山口県内の下関西高等学校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の運営指導委員、萩高等学校の探究学習及びブルーブリックによる学修評価に関する研修会講師を務めた。

さらには、京都大学・大学教育研究フォーラム、日本高等教育学会での口頭発表や大学教育学会課題研究集会でのポスター発表に加え、イギリスの権威ある学会 SRHE（Society for Research into Higher Education）の Newer & Early Career Researchers Conference では、我が国の高等教育事情として、山口大学・大学教育再生加速プログラムにおける学修成果可視化の取組を口頭発表し、意見交換を行った。

AP 事業最終年度に向け、国内外や学校種を超えた、YU・AP 事業の取組の成果発信と情報交流を益々進めていきたい。



**アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化**

開催日時 平成30年11月24日(土) 13:00～17:00(受付 12:30～)  
開催場所 キャンパスプラザ広島(〒730-8516 広島県下野田町西宮町南1-1-10 第3号館3階)

テーマ I 及び テーマ II の複合型共同開催シンポジウム

時間	内容	担当
13:00～13:05	開会挨拶	代田ゆかり(広島大学 教職学部)
13:05～13:10	企画挨拶	岡田義より(福岡大学)
13:10～13:40	有事校をめぐって	福岡大学 担当 岡田 義(学長) 二宮 浩二(副学長) 広島大学 担当 山崎 光悦(学長) 山崎 真也(副学長) 山崎 真也(広島大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長) 山崎 真也(広島大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長) 山崎 真也(広島大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長)
13:40～14:30	講演と事例紹介	山口大学 担当 山崎 光悦(学長) 山崎 真也(副学長) 山崎 真也(山口大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長) 山崎 真也(山口大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長) 山崎 真也(山口大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長)
14:30～14:45	休憩	
14:45～15:35	講演と事例紹介	山口大学 担当 山崎 光悦(学長) 山崎 真也(副学長) 山崎 真也(山口大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長) 山崎 真也(山口大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長) 山崎 真也(山口大学 現代文化学部 学部長 兼 学務長)
15:35～15:50	休憩	
15:50～16:50	パネルディスカッション	フロアの議論
16:50～17:00	閉会挨拶	代田ゆかり(広島大学 教職学部) 岡田義(福岡大学)

主催 広島大学 学長 二宮浩二 副学長 二宮浩二

## 9. チーム AP による活動

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) では、2018 年度において、テーマ I・II 複合型幹事校である京都光華女子大学短期大学部と連携し、「チーム AP」を盛り上げる各種企画に参画・貢献するとともに、本学の取組を積極的に成果発信してきた。

まず、9 月 10 日 (月)～11 日 (火) の 2 日間、広島県神石高原町・神石高原ホテルで開催された「チーム AP 合宿」では、チーム AP 合宿準備委員会に、大学教育機構大学教育センター 林 透 准教授が参画し、1 日目の基調講演&学長対談「2020 年以降の大学教育の行方」を企画するとともに、当日のファシリテーター役を務めた。この企画のねらいは、オリンピックイヤーである 2020 年が、AP 事業にとって事業終了の年であるとともに、新学習指導要領が小学校から完全実施される新たな教育革新幕開けの年でもあることから、AP 事業にとどまらずアグレッシブに教育改革を進める大学のトップリーダーが、今、何を考え、将来に向けて、何を見据えようとしているのかについて、「2020 年以降の大学教育の行方」をテーマに、大学教育の将来像について語っていただくことが有意義であろうと考えた。登壇者として、文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業 (SGU) や文部科学省大学教育再生加速プログラム (AP) などに採択され、教育改革を断行する金沢大学 山崎光悦 学長、芝浦工業大学 村上雅人 学長を招へい出来たことが大きな成果であった。このほか、2 日目の分科会では、山口大学が世話役となって「ステークホルダー協働による大学教育のカタチ ～これからの大学教育、どのカードを使ってカタチにしていきますか?～」を企画し、宇都宮大学、関西国際大学、阿南工業高等専門学校、長崎短期大学の AP 選定校に加え、地元の広島県立油木高等学校との連携により、ショートトークによる話題提供とゲーム方式のミニワークを繰り広げた。

次に、11 月 24 日 (土) には、テーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウムに



において、大学教育機構大学教育センター 林 透 准教授が「総合的な大学教育改革のためのエンジン～山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の使命～」と題して成果発表を行うとともに、後半のパネルディスカッションに登壇し、アクティブ・ラーニング推進を通じた学修成果を発信していくことがテーマⅠ・Ⅱ複合型には強く求められていることを力説した。なお、同日には、「テーマⅠ・Ⅱ複合型」選定校意見交換会が開催された。

今後も、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、AP 選定校同士の交流を進め、意見交換や成果発信を積極的に取り組んでいきたい。



「チーム AP 合宿」基調講演&学長対談風景



金沢大学 山崎学長 & 芝浦工業大学 村上学長を囲んでの集合写真



「チーム AP 合宿」2日目の分科会風景





### Ⅲ. テーマ I (アクティブ・ラーニング)の実績



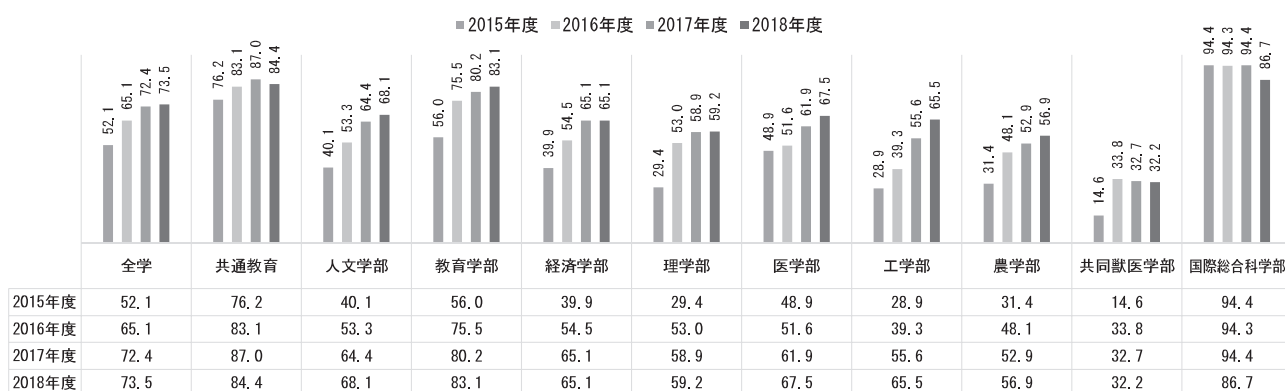
## 1. AL ポイント認定制度の全学的展開

正課及び正課外教育プログラムにおける各科目のアクティブ・ラーニングの度合いを認定する仕組「AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度」が導入されて4年目となった。ALポイントとは、担当教員がシラバス入力時にアクティブ・ラーニングの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」に関して、当該科目の授業各回についてそれぞれの程度行うのか、「多（3点）」「中（2点）」「少（1点）」（ただし「振り返り」「宿題」に関しては「ある」場合に1点）から選択することでポイント化されるものである。なお、授業各回のポイントの総和を授業回数で除すことによって、授業回数に依存しない指標（最大が14点）となっている。なお、ALポイントは学生にも確認可能なようにシラバスに明示される。これにより、教員に対しては授業のアクティブ・ラーニング化を促すとともに、学生に対しては履修の参考にすることで、アクティブ・ラーニングを通した主体的な学びを促すことを趣旨としている。

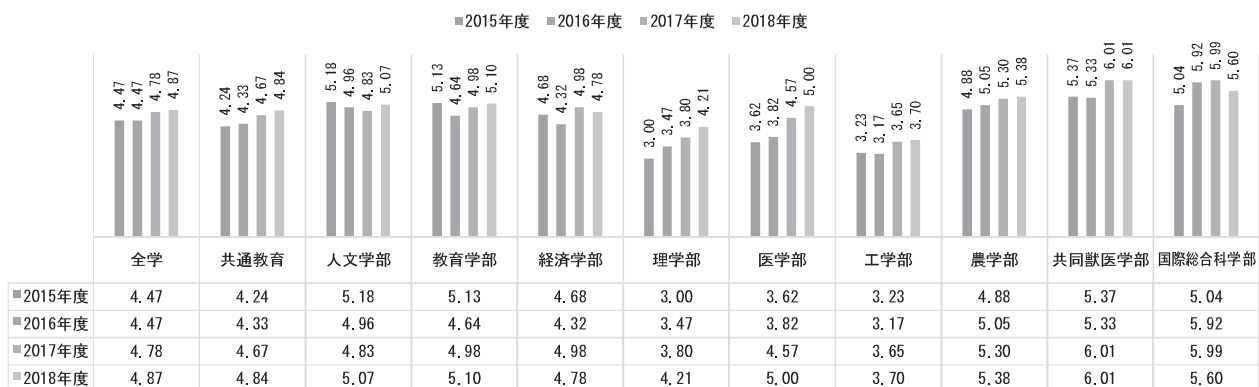
これまで4年間の「ALポイント設定科目の割合」の経年変化を授業開講部門別に見てみると（図表Ⅲ-1）、初年度に30%を切っていた理系学部の伸びが著しい。学部に対する教育改善FDの実施などを通して、もともと実験や演習が多くALが組み込まれていた科目について、シラバスを用いて設計する必要性についての理解が深まっていることが考えられる。また、国際総合科学部・共通教育・教育学部は80%以上を保持しており、全学的には増加傾向にあることがグラフから見てとれる。

また、「ALポイント設定科目における平均ALポイント」の経年変化を授業開講部門別に見てみると（図表Ⅲ-2）、昨年に続き伸びた学部がほとんどであり、全学ではこれまでで最高の4.84という値になった。微減した経済学部と国際総合科学部のうち、国際総合科学部についてはALポイント設定科目が増加したことが影響していると考えられるため、今年度の取り組みについては、全学的にALの実践が進んだことが伺える。

以上のように、本学におけるALの定義が少しずつ浸透し、AL型授業が着実に増加していることがうかがえる。



図表Ⅲ-1 「ALポイント設定科目の割合」の経年変化



図表Ⅲ-2 「AL ポイント設定科目における平均 AL ポイント」の経年変化

## 2. AL ベストティーチャー表彰制度

共通教育におけるアクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果を挙げた教員を表彰する「AL ベストティーチャー」の第3回受賞者14名が選出された。AL ベストティーチャー表彰制度は、本学が2014年度に採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として2016年度に制定された制度で、シラバスのAL ポイント、学生授業評価、成績評価分布などを指標に審査し、受賞者を決定している。その第3回受賞者の表彰式が2019年1月8日（火）の部局長会議の冒頭で行われた。

表彰式では、岡 正朗学長より、「AL の重要性を益々感じる。座学以外の経験の少ない学生のために、これからも現場での工夫を続けていただき、フィードバックをもらうことを大切にしたい。」との言葉が贈られ、出席した9名の教員に1人ずつ表彰状が手渡された。

なお、表彰式に先立ち、岡学長と表彰者との間で懇談会が開催された。近年の学生の授業を受ける態度の変化に応じた、実際に生き物に触れる経験、地域でのフィールド学習や学校現場での実践を通じた活動の工夫が共有された。さらに、反転授業の工夫と、それに伴う教材作成の重要性や教室設備についてなど、具体的な現場の声も含め、教育活動の改善に向けて様々な視点から意見交換がなされた。



2018年度 AL ベストティーチャー表彰の様子



懇談の様子

図表Ⅲ-3 2018年度 AL ベストティーチャー受賞者一覧

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
教養コア系列	キャリア教育	教育学部・教授	霜川 正幸
英語系列	英語会話Ⅱb	非常勤講師	Classic Brian Jeffrey
一般教養系列	文化の継承と創造 1・2	大学教育機構・准教授	林 透
		非常勤講師	山浦 晴男
		創成科学研究科・准教授	鈴木 春菜
専門基礎系列 (理系基礎分野)	生物学実験	共同獣医学部・教授	佐藤 晃一
		共同獣医学部・教授	木村 透
		共同獣医学部・准教授	大濱 剛
		共同獣医学部・准教授	柳田 哲矢
		共同獣医学部・准教授	角川 博哉
		共同獣医学部・助教	日暮 泰男
		共同獣医学部・助教	三宅 在子
		共同獣医学部・助教	渡邊 健太
専門基礎系列 (日本語分野ほか)	日本語ⅣA (文法)	大学教育機構・教授	中溝 朋子

### 3. Teaching & Learning Catalog

2016・2017年度に引き続き、「Teaching & Learning Catalog」の第3号を刊行した。前半の「Part1: Teaching Catalog」では、2018年度のALベストティーチャー賞を受賞した5科目・5名に対する半構造化インタビューをまとめた。具体的な質問については、昨年度

と同様の到達目標、授業におけるアクティブ・ラーニングの技法や使用教材、アクティブ・ラーニングの推進にあたり心がけていること、学生の深い学び（ディープ・ラーニング）を促すために心がけていることといった項目に加え、授業の全体構成、評価の方法と工夫、山口大学の学生の印象と反応、この先の改善点についての項目を尋ねるインタビュープロトコルを作成した。さらに、事前の2018年度開講の関連授業の見学時に気づいた点や授業中における学生の様子等も踏まえてインタビューを行った。全てのインタビューは録音され、逐語録を作成した。カタログ誌面では今後授業を行う教員が参考に出来るよう、特に授業の組み立て方と工夫点、今後の展開を中心にアクティブ・ラーニングのための方策をまとめた。

また、「Part2: Learning Catalog」では、アクティブ・ラーナーである学生達9名を座談会形式で集め、大学での学びについて、特に共通教育におけるアクティブ・ラーニングや正課外学修に関してフォーカスグループインタビューを行った。昨年度と同様に学生スタッフがインタビューを行い、カタログに載せる誌面を作成したが、今年度からは座談会形式にしたことで、より多くの意見をとり入れることができた。なお、こちらのインタビューも録音を行い、逐語録を作成した。大学教育センターの学生スタッフという限定された中ではあるが、学部及び学年を超えて様々な声を集めることができた。これまでの「Teaching & Learning Catalog」と合わせて、学生から見たアクティブ・ラーニングの実施に関する貴重な質的データのひとつとして、AP最終年度における活用を予定している。

「Teaching & Learning Catalog」の発刊により、アクティブ・ラーニングの実践に向けたヒントとして活用されるとともに、学生の主体的な学びについて改めて議論するきっかけとなることが期待される。現在までの3年分のカタログより示唆されるのは、アクティブ・ラーニング型授業で、学生満足度や学修成果を伸ばすためには、「アクティブ・ラーニングのためのアクティブ・ラーニング」ではなく、「学修目標を達成するために設計された教授方法の1つとしてのアクティブ・ラーニング」が重要であると言う点である。授業の中で自然に導入され、活動目的が教員と学生の間で共有されるとき、学生が主体的に授業に参加し、深い学びに向かう姿勢が築かれるようになる。その他、山口大学の学生の特性に応じたアクティブ・ラーニングの方法を模索し、かつ教員同士でグッドプラクティスの共有が可能になるよう、これまで蓄積されている授業の工夫についてまとめることを継続したい。



Teaching & Learning Catalog Vol.3 の抜粋

#### 4. 正課外教育プログラムの開発と実践

YU-AP 事業では、学生参画による事業推進を行っており、『共育ワークショップ』等の企画・運営を行っている。それは学生と教職員の連携を強化するとともに、学生自身の学びの機会となっている。

また、学生の参画を得て新しい正課外教育プログラムであるスチューデント・リーダー・プログラム（SLP）も開発と実践が進んでいる。AL を前提として 2014 年度から始まった SLP は、【キャリア開発】【ラーニング・スキル開発】【学生企画】の 3 つの大きな区分を設け、これまで計 20 回以上開催されてきた。2018 年度は【キャリア開発】計 1 回、【ラーニング・スキル開発】計 4 回開催された（図表Ⅲ-4 参照）。全ての開催時期で前年度を超える参加者数となり、全体で 160 名が参加した。能動型の学びを取り入れたことにより、アンケートでも高い満足度が確認された。SLP のシラバスの例は図表Ⅲ-5 に示した。

具体的に【キャリア開発】では、学生のキャリア意識を醸成することを目的として、大学職員の仕事の魅力について、山口大学出身の職員 2 名が話題提供した。その後のダイアログセッションでは、4 つのグループに分かれ、参加学生が先輩職員を囲みながら、大学の職場環境、採用試験のことなどを質問し、大学職員の仕事について更なる理解を深めた。本講座は毎年好評で、満足度も非常に高く、来年度以降も同内容の講座を企画している。

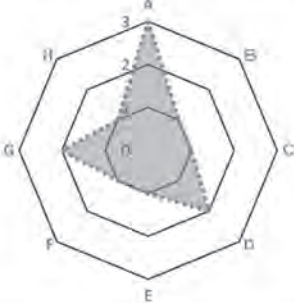
【ラーニング・スキル開発】では、学生が主体的かつ能動的に学ぶための学びの手法を習得することを目的に、ライティングやプレゼンテーションに関する基礎スキルをレクチャーし、ミニワークを行った。9・10 回のライティング・スキル養成講座は、講師である金沢大学附属図書館 守本瞬 中央図書館係長より、レポートの意味・型、さらにはレポート作成の手順など、知っておくべき重要な項目について、学生に分かりやすい説明が行われた。続く 11・12 回のプレゼンテーション・スキル養成講座では、講師である株式会社ジブンノオト代表取締役 大野圭司 氏より、プレゼンテーションの意味・型、さらにはプレゼンテーションのポイントとして知っておくべき重要な項目について説明のあと、学生が提案したテーマに従って、45 秒（第 11 回）または 30 秒（第 12 回）のプレゼンを行い、プレゼンテーションのコツや注意点について理解を深める機会を設けた。

図表Ⅲ-4 スチューデント・リーダー・プログラム（SLP）開催時期等一覧

開催時期	分類	メインテーマ	参加者数
2018 年 5 月	第 3 回 SLP 【キャリア開発】	『ぶち教えちやる！大学職員の仕事— 大学職員の先輩に聞いてみよう—』	52
2018 年 7 月	第 9・10 回 SLP 【ラーニング・スキル 開発】	『ライティング入門講座 ～レポート の書き方の基本的な作法とコツをつか め！～』	73
2018 年 11 月	第 11・12 回 SLP 【ラーニング・スキル 開発】	『プレゼンテーション入門講座 ～プ レゼンテーションの基本的な作法とコ ツをつかめ！～』	35



正課外教育プログラム実施概要（シラバス）

プログラム名	第11回・第12回 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 【ラーニングスキル開発】		
実施日	2018年 10月31日(水) 11月5日(月)		
実施場所と定員	総合図書館アカデミック・フォレスト (定員) 各20名程度		
担当	(部署) 株式会社シアンソフト代表取締役 大学教育機構 大学教育センター (YU-UP) 推進室	(担当者) 大野 圭司 林 透	
プログラム概要	2016年度に実施した「初年次学生の学習意識調査」の結果を踏まえ、好評であったライティングスキルに加え、プレゼンテーションスキルを養成する講座を昨年度に引き続き開催することとしました。 後期を迎え、グループワークやフィールド学習で、プレゼンテーションを行う機会が増えてきたことでしょう。基本的な作法やちょっとしたコツをつかめば、あなたのプレゼンテーションの出来はグーンと良くなるでしょう。 さあ、プレゼンテーション入門講座に気軽に参加してみよう！		
到達目標に関する各項目の重要度  ◎：非常に重要 ○：重要 無印：考慮する (丸印は計4つまで)	【A】驚きを大切にし、「自ら」が考え・判断・表現・行動・発言する能力	◎	
	【B】あらたな問題や困難にチャレンジし、解決する力		
	【C】個性を大切にし、心身ともに豊かな人間性とく美をを発見するところ		
	【D】専門家としての知識や能力を身につけ、自分を活かす力	○	
	【E】出会いと交流の中で、歴史と伝統を重んじつつ、異文化を受け入れるところを養い、地域社会と国際社会への責任感や義務感		
	【F】専門性を活かし、さらに分野を超えて、人々の幸せや社会・環境全体のあるべき姿について、考え行動する力		
	【G】夢を描き続け、自らが生涯を通じての「知の探求者」になる「礎」を築く	○	
	【H】国を超えた多くの人々と出会い、世界にはばたいて活躍する力		
	ALポイント認定制度【80ポイント】	グループワーク	中
		ディスカッション・ディベート	中
	フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）		
	プレゼンテーション	多	
	振り返り	有	
	宿題		
プログラム詳細 (スケジュール等)	第11回：10月31日(水) 16:30～18:00 第12回：11月5日(月) 16:30～18:00  内容：（※第11回・第12回ともに内容は同じです） ①プレゼンテーションの基本的な作法 ②プレゼンテーションのコツの伝授 ③プレゼンテーション実践ミニワーク		
到達目標（汎用的能力）	このプログラムのALの特徴		
	このプログラムは、大学生として必ず知っておいてほしいスタディスキルである、プレゼンテーションの基礎を学ぶことを狙いとしています。このため、講師によるプレゼンテーションの基本的な作法やコツに関する説明を受けるほか、実際の事例等を参照しながら、プレゼンテーションの実践力を養っていきます。今回のプログラムでは、講師の説明をしっかり聴いて、理解するほか、ALとしては、プレゼンテーション実践ミニワークを取り入れています。プレゼンテーションの基礎を習得して、「驚きを大切にし、「自ら」が考え・判断・表現・行動・発言する能力」の基礎を鍛えることを重要視しています。		

図表Ⅲ-5 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) シラバス例

#### IV. テーマⅡ (学修成果の可視化)の実績



## 1. 学修到達度調査及び学修行動調査の実施状況

2015・2016年度の2年間にわたり、学部1年生と学部3年生の一部を対象として、学修到達度調査（PROGテスト）と全国大学共通型学生調査（JSAAP）を行ってきた。2017年度以降は、調査対象者に変更はないが、調査の構成を見直した。学修到達度調査は継続して実施することとしたが、参加機関が少なくベンチマークが不十分であること、また、回答に必要な項目数が多く、学生の負担が大きく、かつ回答時間の確保が困難であるといった理由から、JSAAPの実施を見送り、山口大学オリジナルの学修行動調査を実施することとなった。2018年度からは、学修行動調査に1週間当たりの学修時間等に関する設問を新たに設けた。

なお、2018年度のPROGテストと学修行動調査実施状況は図表Ⅳ－1のとおりである。

図表Ⅳ－1 2018年度 学修到達度調査（PROGテスト）・学修行動調査 実施状況

### 1年

1年生所属学部	学生数	学修到達度調査（PROGテスト）		学修行動調査	
		受験者数	受験率	受験者数	受験率
人文学部	208	205	98.6%	205	98.6%
教育学部	192	0	0.0%	0	0.0%
経済学部	349	339	97.1%	339	97.1%
理学部	229	217	94.8%	217	94.8%
医学部	229	229	100%	229	100.0%
工学部	575	541	94.1%	540	93.9%
農学部	100	96	96.0%	96	96.0%
共同獣医学部	33	29	87.9%	29	87.9%
国際総合科学部	105	105	100%	105	100.0%
合計	2020	1761	87.2%	1760	87.1%

### 3年

1年生所属学部	学生数	学修到達度調査（PROGテスト）		学修行動調査	
		受験者数	受験率	受験者数	受験率
人文学部	173	171	98.8%	171	98.8%
教育学部	191	2	1.0%	2	1.0%
経済学部	361	356	98.6%	354	98.1%
理学部	279	230	82.4%	229	82.1%
医学部	247	122	49%	122	49.4%
工学部	755	483	64.0%	484	64.1%
農学部	101	100	99.0%	100	99.0%
共同獣医学部	32	28	87.5%	28	87.5%
国際総合科学部	103	93	90%	93	90.3%
合計	2242	1585	70.7%	1583	70.6%

※教育学部については、1年生向けの共通教育科目「知の広場」及び3年生向けの共通教育科目「キャリア教育」を学部独自に開講している関係で、回答数が少ない。

※医学部3年生については、保健学科（学生数124名、回答者122名、受験率98.4%）のみが調査可能であった関係で、回答数が少ない。

## 2. 評価指標と分析対象データ

本学の AP 事業では、「直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの発信」をテーマⅡの目標として掲げている。はじめの 3 年間はデータの収集を中心としており、昨年度が本格的な分析の初年度となった。今年度は昨年度の分析を踏襲しつつ精緻化を試みる。

昨年度の指摘により、学修到達度調査 (PROG) のテスト結果の全てを直接評価とは捉えず、直接評価指標を「成績に関連するデータ」と「PROG のリテラシーテスト結果」、間接評価指標は「学修行動調査」と「PROG のコンピテンシーテスト結果」として分析を進める。昨年度も指摘されていたとおり、合成変数としての GPA の信頼性の課題などから、直接評価とするための「成績に関連するデータ」には議論が必要であるが、本学の収集してきたデータの種類及び他の大学の事例などに鑑みて、GPA を利用して分析を進めていくこととする。評価指標の妥当性については引き続きデータの傾向を見ながら議論してゆく。

具体的には、今年度実施したⅣ-1 に示す 2 つの調査の結果に加えて、成績を示す GPA を用いて本学学生の学修成果の状況を可視化し、考察を行う。特に現在の 3 年生は「成績データ」・「PROG」・「学修行動調査」の結果を追跡して紐付けることができるため、成長も含めて学修成果を見ることが可能である。直接評価指標と間接評価指標を統合しながら学生の状況の確認を進めたい。ただし、現在の 3 年生の成績が最終的に確定するのは来年度となるため、成績データには 2 年次のものを利用する。なお、昨年度分析を行った現 4 年生のデータについては、確定した成績や卒業時調査も含めて、最終年度に向けて分析を進める予定である。

## 3. 代表的な直接評価指標と間接評価指標から見る学生の状況

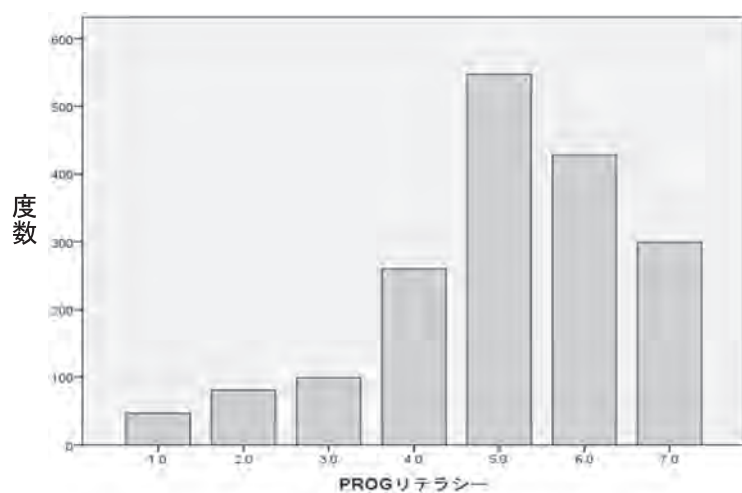
まず、直接評価と間接評価の代表的な指標から、現在の山口大学の学生の学修到達度や学習習慣の状況を確認する。

1 年生については、Ⅳ-1 で述べた 2 つの調査による直接評価、間接評価の指標が確認できる。今年度の成績も確定していないため、学生の状況は「2018 年度の PROG テストのリテラシー総合評価」を直接評価指標、「学修行動調査の問い 9 (大学での学習習慣に関する質問、12 項目、6 件法)」の合計値、「学修行動調査の問い 10 (身についている資質・能力に関する質問、22 項目、6 件法)」の合計値、「2018 年度の PROG テストのコンピテンシー総合評価」を間接評価指標として確認する。それぞれの分布と基本統計量は図表Ⅳ-2 から図表Ⅳ-6 の通りである。図表Ⅳ-3 の通り、1 年生のリテラシーは高く、平均値は 5.08 である。これは今年度 PROG テストを受験した国公立大学 33 校の 1 年生の平均点 5.4 を上回っている。図表Ⅳ-4 に示したコンピテンシーはやや低めの学生が多いが、本学学生が低いのではなく、平均点は国公立平均 (76 校受験、平均点 3.1) と同程度である。図表Ⅳ-5,6 にある大学における学習習慣や、大学生としての資質・能力は 6 件法でいう 4 の位置を中心に分布しており、「授業には意欲的に取り組む」などの習慣や、「自分の考えを他人に分かりやすく話すことができる」などの資質がある程度身についていることが伺える。

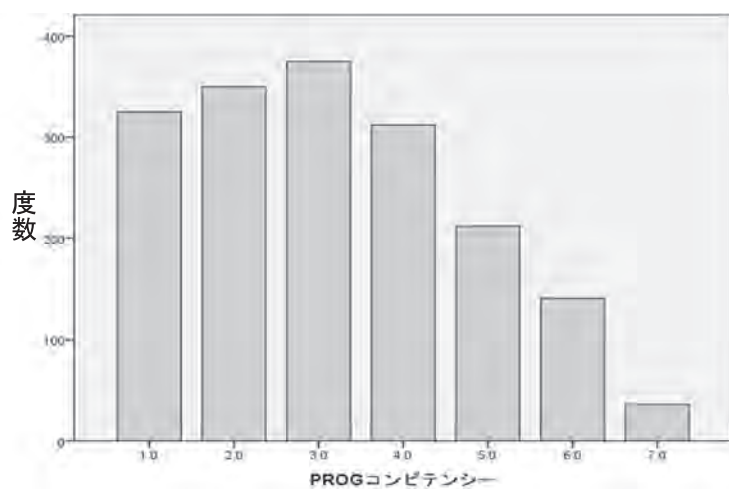
図表Ⅳ-2 直接評価指標・間接評価指標の基本統計量（現1年生）

		1年次 (2016)PROGリテ ラシー	1年次 (2016)PROG コンピテンシー	1年次(2018) 調査Q9-大学 学習習慣	1年次(2018) 調査Q10- 資質・能力
度数	有効数	1761.00	1751.00	1681.00	1629.00
	欠損値	0.00	10.00	79.00	131.00
平均値		5.08	3.17	49.43	88.83
中央値		5.00	3.00	49.00	88.00
最頻値		5.00	3.00	47.00	88.00
標準偏差		1.46	1.62	8.85	15.04
最小値		1.00	1.00	12.00	22.00
最大値		7.00	7.00	72.00	132.00

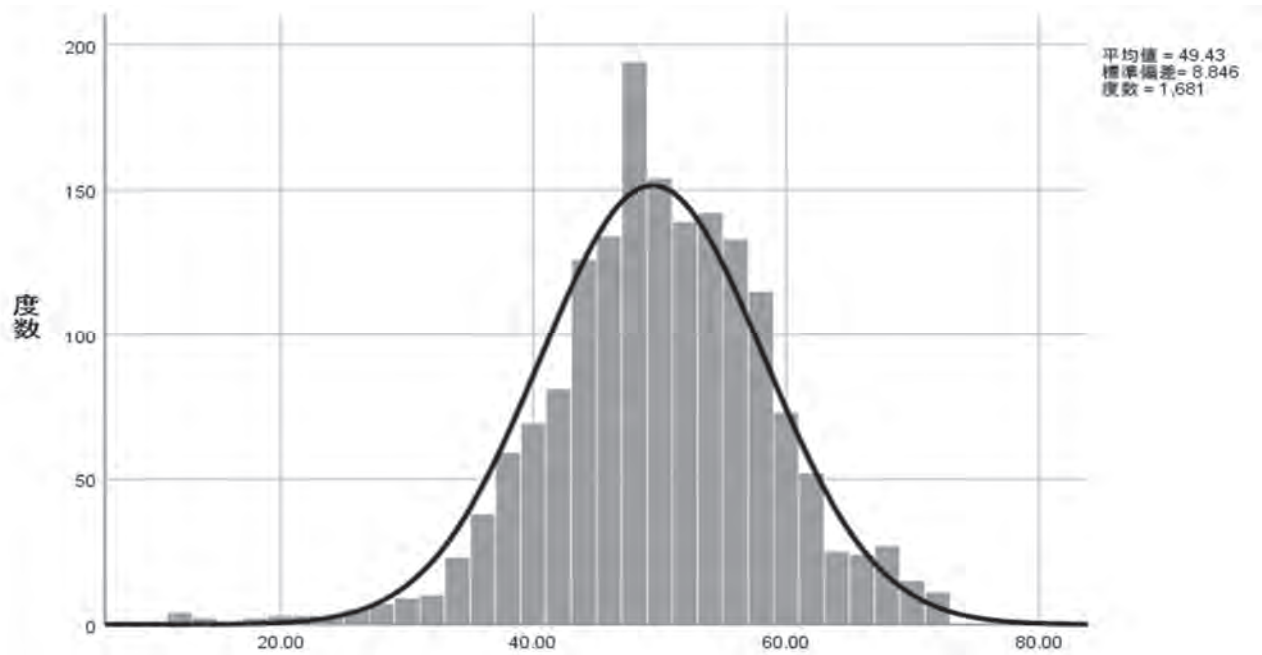
※網掛けの項目が直接評価指標、白地の項目が間接評価指標を示す。



図表Ⅳ-3 学修到達度調査 (PROG) のリテラシー総合評価 (現1年生)

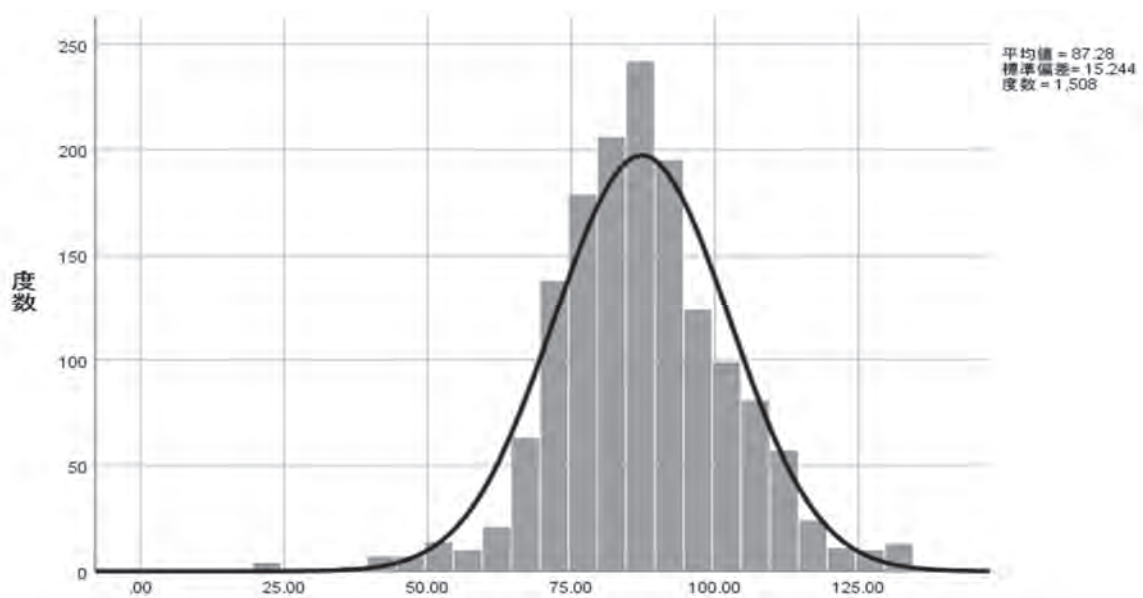


図表Ⅳ-4 学修到達度調査 (PROG) のコンピテンシー総合評価 (現1年生)



Q9・大学学習習慣

図表IV-5 学修行動調査 Q9・大学学習習慣の合計値（現1年生）



Q10・身につけている資質・能力

図表IV-6 学修行動調査 Q10・身につけている資質・能力の合計値（現1年生）

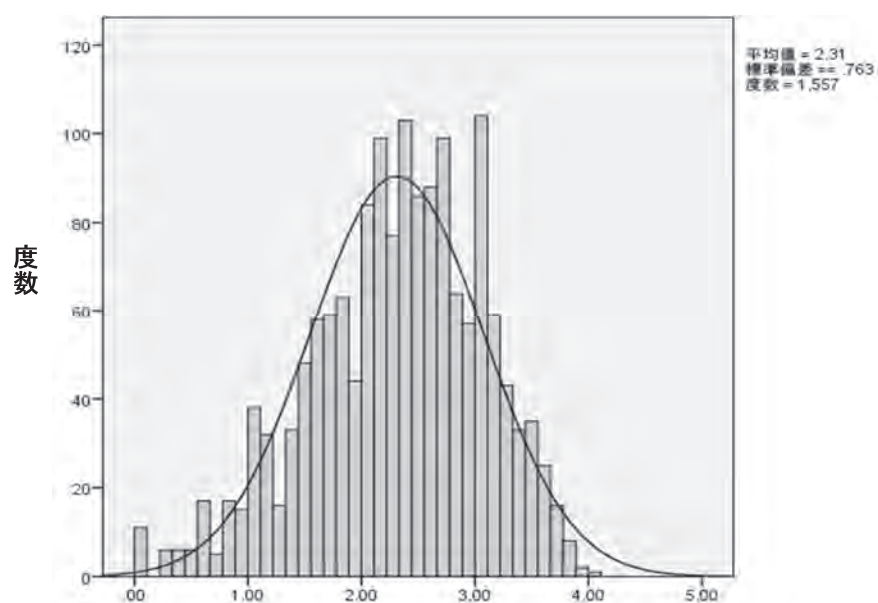


また、現在の3年生については、過去の蓄積データがあるため「成績（2017年度確定GPA）」「2016年度のPROGのリテラシー総合評価」「2018年度のPROGのリテラシー総合評価」の3つを直接評価指標、「2016年度のPROGのコンピテンシー総合評価」「2018年度のPROGのコンピテンシー総合評価」「学修行動調査の問い9（大学での学習習慣に関する質問、12項目、6件法）」の合計値、「学修行動調査の問い10（身につけている資質・能力に関する質問、22項目、6件法）」の合計値、の4つを間接評価指標とした。それぞれの分布と基本統計量は図表IV-7から図表IV-12のとおりである。2年の時点でのGPAは、図表IV-8のとおり、正規分布に近い形に分布しており、絶対評価の授業もある山口大学のGPAではあるが、分析に耐える変数であることが分かる。また、本年度の調査（PROGと学修行動調査）で収集した情報については、特に学習習慣及び資質能力の平均値に言及したい。どちらも平均は尺度の中央の値よりも高く、多くの学生が3年生時点で大学生としての望ましい学習習慣と資質能力をある程度身に付けている。図表IV-11,12を見ても、中央値が高い分布である。ただし、前述の2018年度の1年生の平均と変わるものではなく、来年度以降こちらの成長分析についても検討することが期待される。

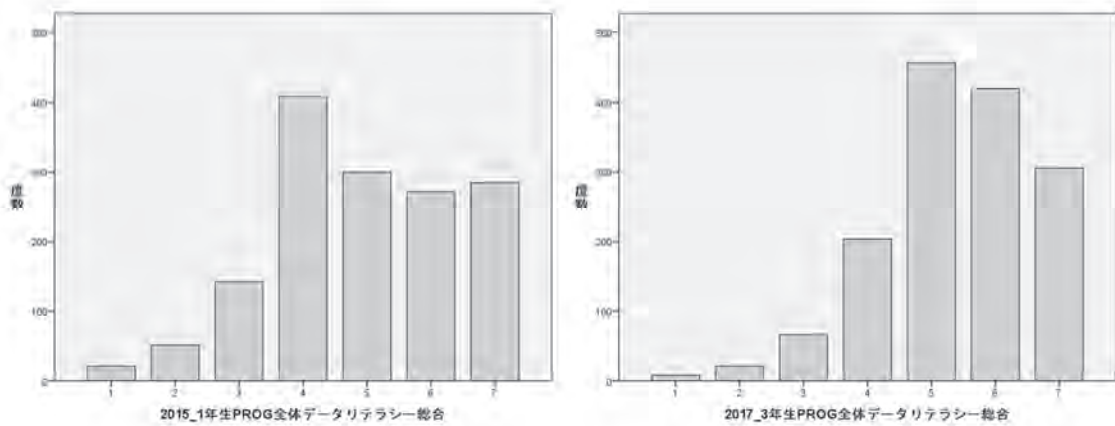
図表IV-7 直接評価指標・間接評価指標の基本統計量（現3年生）

		2年次(2017) GPA	1年次 (2016)PROGリテ ラシー	3年次 (2018)PROGリテ ラシー	1年次 (2016)PROG コンピテンシー	3年次 (2018)PROG コンピテンシー	3年次(2018) 学修行動調査 大学学習習慣	3年次(2018) 学修行動調査 資質・能力
度数	有効数	1557	1486	1585	1477	1575	1532	1508
	欠損値	28	99	0	108	10	52	76
平均値		2.31	5.36	5.36	2.98	3.20	49.00	87.28
中央値		2.38	6.00	5.00	3.00	3.00	49.00	87.00
最頻値		3.00	6.00	5.00	1.00	3.00	47.00	88
標準偏差		0.76	1.34	1.29	1.57	1.64	8.45	15.244
最小値		0.00	1.00	1.00	1.00	1.00	12.00	22
最大値		4.00	7.00	7.00	7.00	7.00	72.00	132

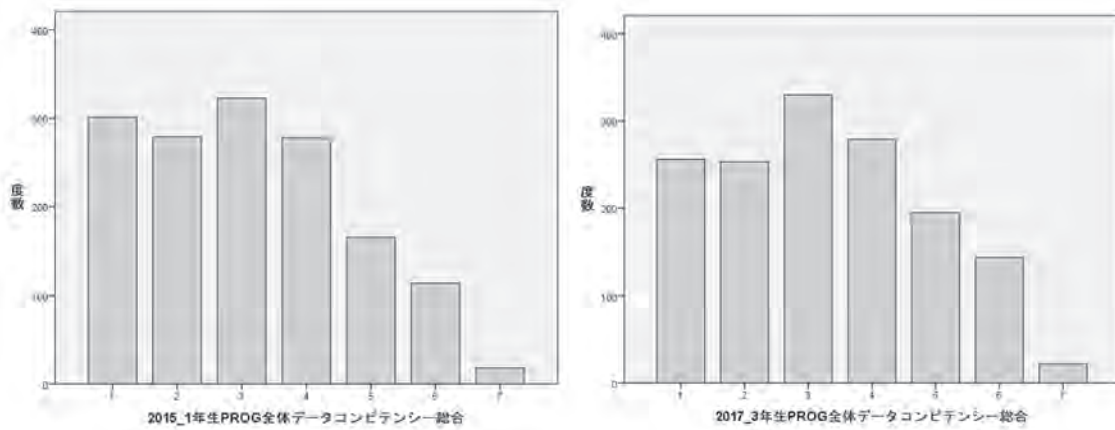
※網掛けの項目が直接評価指標、白地の項目が間接評価指標を示す。



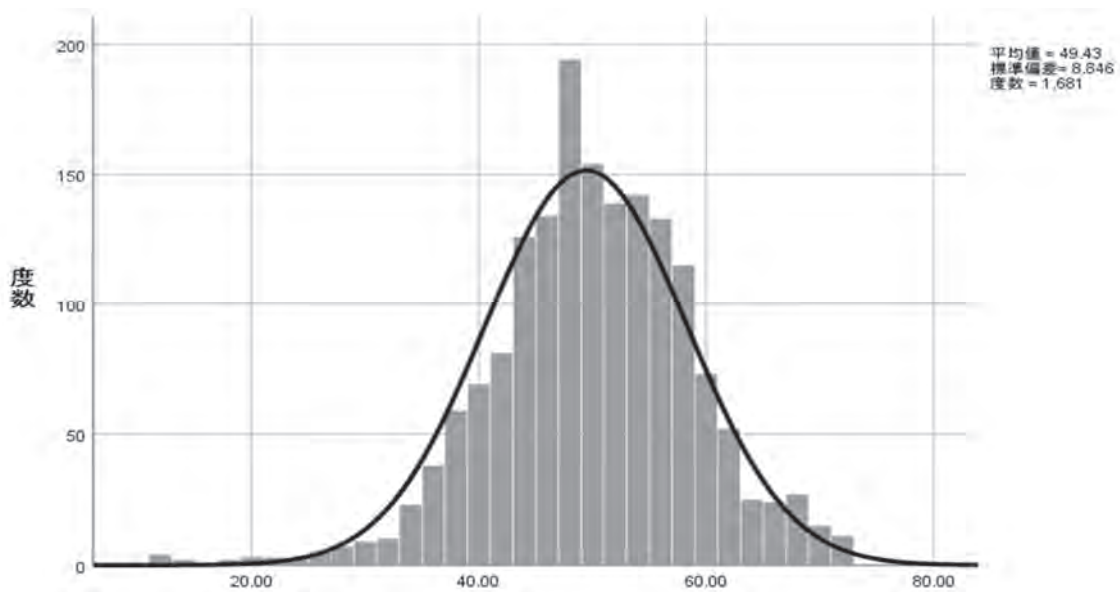
図表IV-8 2年次(2017)GPAの分布（現3年生）



図表IV-9 学修到達度調査 (PROG) のリテラシー総合評価 (現3年生)

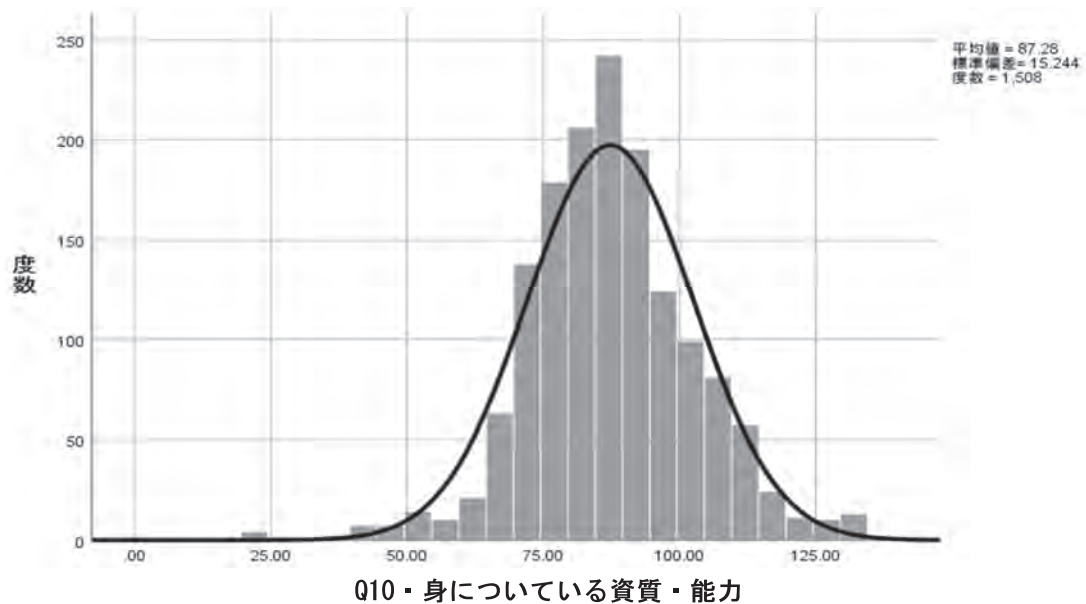


図表IV-10 学修到達度調査 (PROG) のコンピテンシー総合評価 (現3年生)



Q9・大学学習習慣

図表IV-11 学修行動調査 Q9・大学学習習慣の合計値 (現3年生)



図表IV-12 学修行動調査 Q10・身についている資質・能力の合計値（現3年生）

1年次と3年次のPROG結果を比較してみると、得点が伸びていることが分かる。図表IV-9,10からも全体的な上昇傾向が見て取れる。この差は統計的にも確認できるものであり、リテラシーは有意傾向 ( $t(1485)=1.64, p<.10$ )、コンピテンシーは1%水準で有意に ( $t(1476)=5.75, p<.01$ ) 3年次の結果の平均の方が高い。次々節では、こうした学生の成長についてより詳しく分析し、学修成果の様子を明らかにする。

#### 4. 直接評価指標と間接評価指標の相関

直接評価指標を「成績」と「学修到達度調査（PROG）のリテラシーテスト結果」、間接評価指標を「学修行動調査」と「PROGのコンピテンシーテスト結果」としたのは前節で述べたとおりである。昨年度同様、経年比較できる現3年生のデータについて、直接評価指標・間接評価指標の代表的な変数の関係性を確かめる。

直接評価指標である「2017年度GPA」と「2016・2018年度のPROGのリテラシー総合評価」、間接評価指標である「2016・2018年度のPROGのコンピテンシー総合評価」「学修行動調査の問い9（大学での学習習慣に関する質問、12項目、6件法）」の合計値、「学修行動調査の問い10（身についている資質・能力に関する質問、22項目、6件法）」の合計値の相関を確認する（図表IV-13）。

この結果から、PROGのコンピテンシー、大学での学習習慣、獲得している資質・能力の間については、それぞれ中程度の相関が認められ、昨年度の傾向と同様である。今年度は経年についても相関を確認し、PROGテストは前回高い得点だった学生が、今年度も高い得点を取る傾向にあることが分かった。これを前節のt検定の結果と合わせると、本学の現3年生は、PROGで測定可能な能力の成長が見られ、その傾向は1年次の得点である程

度予想できると言える。

また、成績（評点合計）と大学での学習習慣の間には弱い相関が認められるが、成績（評点合計）と1年・3年次 PROG のリテラシーはほぼ無相関であった。よって、直接評価指標を予測するような他の指標は、現在使っているものにはないことが分かった。次節の成長の分析においては、特に大学内で重要である指標の1つである GPA について、現在集められているデータによる説明が可能であるかについてデータを検証し、考察する。

図表Ⅳ－13 直接評価指標と間接評価指標の相関

	2年次(2017) GPA	1年次(2016)PROG リテラシー	3年次(2018)PROG リテラシー	1年次(2016)PROG コンピテンシー	3年次(2018)PROG コンピテンシー	3年次(2018) 学修行動調査 大学学習習慣	3年次(2018) 学修行動調査 資質・能力
2年次(2017)GPA	1	.094**	.108**	-.008	-.013	.226**	.063*
1年次(2016)PROG リテラシー	.094**	1	.446**	-.086**	-.087**	.072**	-.048
3年次(2018)PROG リテラシー	.108**	.446**	1	-.113**	-.099**	.041	-.034
1年次(2016)PROG コンピテンシー	-.008	-.086**	-.113**	1	.714**	.415**	.579**
3年次(2018)PROG コンピテンシー	-.013	-.087**	-.099**	.714**	1	.362**	.517**
3年次(2018) 学修行動調査 大学学習習慣	.226**	.072**	.041	.415**	.362**	1	.658**
3年次(2018) 学修行動調査 資質・能力	.063*	-.048	-.034	.579**	.517**	.658**	1

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$  網掛けは相関係数 0.4 以上を示す

## 5. 直接評価（成績）の規定要因分析

本節では、直接評価指標「成績データ（GPA）」について、現3年生である本学学生の高校生から現在までの複数のデータに基づいて分析し、その成長の鍵となる規定要因分析を行う。昨年度行った評点の規定要因分析を参考に、新しく集めたデータも含めて投入変数の検討を行い、どのような要因によって GPA が高くなるのかを検討する。

今回の分析では、高校から大学の活動、生活・学習習慣だけでなく、授業外学修時間や学生の探求活動の習熟レベルについての間接評価の量的データを説明変数として投入を試みた。投入候補としたのは以下の変数である。

- ・性別（男性=1、PROG 回答）
- ・大学志望度（間接評価：学修行動調査 Q2）
- ・希望最終学歴（間接評価：学修行動調査 Q3）
- ・高校の成績（間接評価：学修行動調査 Q4）
- ・高校での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q5\_1～Q5\_7）
- ・高校での生活・学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q6\_1～Q6\_12）
- ・大学での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q7\_1～Q7\_6）
- ・授業外学修時間（間接評価：学修行動調査 Q8\_2）
- ・大学での学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q9 合計）
- ・探究活動の自己評価（間接評価：学修行動調査 Q11～Q14）
- ・PROG（間接評価 2016・2018 コンピテンシー、直接評価 2016・2018 リテラシー）

「成績データ（2017年度 GPA）」を従属変数とした重回帰分析を行う過程で、ステップワイズ法による13モデルに加え、多くの投入変数を検討するため変数減少法による35モデルについて、モデル自体のF値の有意確率、自由度調整済み決定係数、及び変数の標準化偏回帰係数の値と有意確率を考慮し、変数選択を行った。多重共線性についてはVIFを算出し、変数の除去を行った。その後、昨年度の強制投入法による結果を参照しながら、モデルの改良を行い、最終的に図表IV-14に示した2つのモデルを採用した。

図表IV-14 成績（GPA）の規定要因分析

	モデル1		モデル2	
	B	$\beta$	B	$\beta$
(定数)	1.310		1.217	
男性ダミー	-0.300	-0.200 **	-0.264	-0.171 **
希望最終学歴(逆転)	-0.100	-0.100 **	-0.101	-0.068 **
高校活動熱心度__委員会活動	0.060	0.070 *	0.057	0.068 **
高校活動熱心度__研究活動	0.000	-0.100 **	-0.056	-0.058 **
高校生活習慣__授業でわからないところを調べる	0.050	0.060 **	0.050	0.055 **
高校生活習慣__授業以外の興味を勉強する	-0.100	-0.100 **	-0.050	-0.058 **
高校生活習慣__規則正しい生活をする	0.060	0.080 **	0.065	0.079 **
高校生活習慣__本を読む	-0.100	-0.200 **	-0.137	-0.180 **
大学活動熱心度__専門分野の学習	0.110	0.110 **	0.115	0.114 **
大学活動熱心度__課外活動	0.000	-0.100 **	-0.040	-0.056 **
大学活動熱心度__就職につながる学習・活動	0.050	0.050 **	0.047	0.048 **
リテラシー情報収集力	0.080	0.090 **	0.090	0.101 **
コンピテンシー対人基礎力	-0.100	-0.200 **	-0.071	-0.163 **
コンピテンシー對自己基礎力	0.020	0.050 †	0.023	0.049
コンピテンシー対課題基礎力	0.060	0.120 **	0.055	0.121 **
大学学習習慣	0.020	0.170 **	0.014	0.155 **
探究活動レベル__テーマ設定			0.039	0.039
探究活動レベル__成果物			0.037	0.035
探究活動レベル__発表			-0.014	-0.014
探究活動レベル__振り返り			-0.009	-0.008
調整済みR <sup>2</sup> 乗		0.188		0.202
F値		22.484 **		17.911 ***

従属変数 GPA

\*\*p<.01 \*p<.05 †p<.10

モデル1はほぼ全ての変数について有意である。標準化係数 $\beta$ の特に高い変数を挙げると、負の影響を持つのが男性ダミー、高校時代の本を読む習慣、PROG コンピテンシーの対人基礎力であり、高い正の影響を持つのが大学学習習慣とPROG コンピテンシーの対課題基礎力である。解釈すると、まず大学学習習慣は前節でも成績と低い相関が見られていた通り、成績に寄与することが分かる。「課題やレポートは満足がいくように仕上げる」「授業には意欲的に取り組む」など、学修に対する姿勢が学修成果を高めるために重要である。また、コンピテンシーの中でも課題発見や計画立案などの力を測定する「対課題基礎力」が学修成果に対して重要な役割を果たしている。これは社会人になっても役立つ力であり、今後も対課題基礎力を意識した教育が必要であると言える。

一方同じコンピテンシーでも、「対人基礎力」は単体で見ると負の影響を持っている。これは、分析者による同様の研究でも指摘されている通り、対人積極性など他者とのコミュニケーションの能力は、知った内容を吟味したり、自身で振り返ったりする内化のプロセスを伴わない場合、すぐに人に頼ってしまうなど、学修成果に悪い影響を及ぼす可能性がある。本学学生の対人基礎力修得については、他の能力とのバランスが重要であると考え



られる。また、高校時代の読書の負の作用については、大学における幅広い教養の学びへの熱心度がモデルから除外されたのと同様に、広い興味は必ずしも直ぐに正課の学修成果に結びつくとは言えないことを示していると考えられる。また、設問が本の内容を限定していないため、回答者それぞれの解釈により読書の定義が曖昧であった可能性もあるため、今後の課題として検討を続ける必要がある。同様に性差についても検討を要する。女子学生の GPA 平均が高くなりがちであるのは多くの大学において観測されているが、その理由については性差自体ではなく性に関連する別の特徴の影響の可能性が大きく、本学においてもその要因について質的データなどを中心に検討する必要がある。

モデル 2 は探究活動に関する自己評価を加えたものである。投入した変数自体は  $p$  値が大きいため、有意な説明変数とはいえない。これは、もし探究活動のレベルが 0 だとしても、17%の確率で GPA は良い場合があるということに等しい。しかし、投入する変数の数から想定される以上にモデルの決定係数が上昇することを踏まえると、探究活動の評価は成績の説明に寄与する部分があるということだろう。この理由は、山口大学においてアクティブ・ラーニング型授業が増加していることも一因であると考えられるものの、探究活動の習熟による学修成果の向上も示唆しているだろう。すなわち、テーマ設定、成果物作成、プレゼンテーション、そして振り返りの活動を行い、上達することによって学生は成長していると考えられる。

モデルを全体的に見てみると、高校時代の学習習慣が重要であることが分かる。大学における学修成果の規定要因として今後の教育における意識を喚起し、かつ入学時点で高校時代の学習習慣に欠けている学生に対するフォローアップを行うことが、今後必要になると考えられる。また、その高校での学習習慣の延長線上に、GPA に対して大きな影響を及ぼす大学学習習慣がある。高校での良い学習習慣を保ち、かつ大学に対応した学びの方法を得られるよう、共通教育の時など早い段階において、大学で求められる学習姿勢などを丁寧に教え、身に付けさせることが重要である。

## 6. 間接評価（資質・能力、コンピテンシー）の規定要因分析

間接評価の指標の中でも、特に学修成果を示していると考えられる資質・能力（学修行動調査 Q10）とコンピテンシー（PROG テスト）の規定要因についても、新しく収集したデータを加えて昨年度のモデルの精緻化を試みる。

資質・能力とコンピテンシーについては、昨年度も複数モデルによる比較が行われている。ここに本年度新しく集めた授業外学修時間についての間接評価の量的指標を加えて、山口大生の資質・能力及びコンピテンシーがどのようにして説明できるかを考察する。

まずは、従属変数を「身につけている資質・能力（間接評価：学修行動調査 Q9 の合計値）」とし、以下の前回モデル 2 において選択された説明変数を投入する重回帰分析を行う。

- ・性別（男性=1、PROG 回答）
- ・大学志望度（間接評価：学修行動調査 Q2 逆転）
- ・希望最終学歴（間接評価：学修行動調査 Q3 逆転）

- ・高校の成績（間接評価：学修行動調査 Q4 逆転）
- ・高校での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q5\_1～Q5\_8）
- ・高校までの学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q6\_1～Q6\_4・Q6\_11・Q6\_12）
- ・高校までの生活習慣（間接評価：学修行動調査 Q6\_5～Q6\_10・Q6\_13）
- ・大学での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q7\_1～Q7\_7）
- ・AL ポイント（履修情報：グループワーク、ディスカッション・ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り、宿題）

これらを投入したものが図表Ⅳ－15 に示したモデル 1、モデル 1 に「大学での学習習慣（学修行動調査 Q9 合計）」を加えた分析がモデル 2、そして更に新しく「授業外学修時間（学修行動調査 Q8・2）」を加えた分析がモデル 3 である。

図表Ⅳ－15 学修行動調査における資質・能力（Q10）の規定要因分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
(定数)	28.346	**	11.332	**	10.588	**
性別=男	3.091	0.100 **	0.993	0.032	0.952	0.031
大学志望度	-1.290	-0.076 **	-1.267	-0.075 **	-1.226	-0.073 **
希望最終学歴	-0.931	-0.032	0.522	0.018	0.434	0.015
高校時代の成績	0.018	0.031	-0.005	-0.010	-0.005	-0.008
高校活動熱心度__学校行事	2.839	0.162 **	1.722	0.098 **	1.702	0.097 **
高校活動熱心度__委員会活動	0.248	0.015	-0.207	-0.012	-0.225	-0.013
高校活動熱心度__体育会系部活動	1.152	0.099 **	1.091	0.093 **	1.089	0.093 **
高校活動熱心度__文化系部活動	0.183	0.014	0.174	0.013	0.201	0.015
高校活動熱心度__ボランティア	0.467	0.026	0.179	0.010	0.293	0.016
高校活動熱心度__国際交流	1.688	0.089 **	0.994	0.052 *	0.869	0.046 †
高校活動熱心度__研究活動	0.345	0.018	0.124	0.006	0.185	0.010
高校活動熱心度__アルバイト	2.583	0.096 **	2.392	0.089 **	2.315	0.086 **
高校生活習慣__受験勉強をする	1.232	0.067 *	0.839	0.046 †	0.815	0.044 †
高校生活習慣__予習復習をする	-0.574	-0.032	-0.841	-0.047 †	-0.832	-0.046 †
高校生活習慣__授業でわからないところを調べる	1.848	0.101 **	0.667	0.037	0.641	0.035
高校生活習慣__授業以外の興味を勉強する	1.871	0.108 **	0.593	0.034	0.509	0.029
高校生活習慣__新聞を読む	0.376	0.020	0.224	0.012	0.322	0.017
高校生活習慣__本を読む	0.134	0.009	0.173	0.011	0.251	0.016
大学活動熱心度__専門分野の学習	2.623	0.130 **	0.051	0.003	0.206	0.010
大学活動熱心度__幅広い教養の学習	1.958	0.097 **	0.113	0.006	0.199	0.010
大学活動熱心度__就職につながる学習・活動	-0.120	-0.006	0.065	0.003	0.073	0.004
大学活動熱心度__課外活動	0.892	0.062 *	1.157	0.080 **	1.115	0.077 **
大学活動熱心度__スキル修得	2.223	0.100 **	1.144	0.051 *	1.168	0.052 **
大学活動熱心度__将来像設計	0.969	0.044	0.172	0.008	0.185	0.008
ALポイント累計__グループワーク	0.006	0.055	0.004	0.034	0.004	0.042
ALポイント累計__ディスカッション	-0.001	-0.006	-0.005	-0.058	-0.006	-0.068
ALポイント累計__フィールドワーク・実験・演習	0.003	0.040	0.006	0.073 *	0.006	0.075 **
ALポイント累計__プレゼンテーション	-0.007	-0.052	-0.007	-0.052	-0.005	-0.039
ALポイント累計__振り返り	0.016	0.105 **	0.012	0.079 **	0.010	0.069 **
ALポイント累計__宿題	-0.011	-0.052 †	-0.009	-0.044 †	-0.008	-0.040 †
大学学習習慣			1.038	0.573 **	1.045	0.578 **
授業外学修時間					-0.113	-0.054 **
調整済みR2乗		0.288		0.506		0.522
F値		19.895 **		46.794 **		45.915 **

従属変数 資質・能力合計(学修行動調査Q10)

\*\*p<.01 \*p<.05 †p<.10

モデル 3 の結果における統計的に有意な変数を見てゆくことで考察を進める。資質・能力に対して正の影響をもたらすと考えられるものは、高校時代の熱心な「学校行事」「体育会系部活動」「アルバイト」が挙げられる。いずれも標準化係数  $\beta$  の値が小さいが、高校時代の課外活動への力の入れ方が大学での資質・能力育成のための基礎力を育てていると考えられる。同様に、大学における熱心な「課外活動」「スキル修得」も正の影響を持っているようである。しかし、正課の授業も無関係ではない。AL ポイントを見ると「フィールドワ



ーク」「振り返り」をより多く授業で行うことで資質・能力が上昇することが伺える。

モデル3において負の影響が考えられる変数については検討が必要である。「大学志望度」と「授業外学修時間」は、わずかな $\beta$ であるが、値が低いほど資質・能力が高いと言う結果になった。大学3年次においては、大学志望度はむしろ燃え尽きの原因になりやすく、志望していなかった学生の方が、課外活動などに勤しみ資質・能力を高めている可能性がある。また、その課外活動の時間を確保するためにも、授業外学修時間はある程度の時間に修める必要があり、長時間行うことで逆に資質・能力が下降するのかもしれない。ただし、授業外学修時間は授業アンケートとの乖離や欠損値の多さに鑑み、今後のデータ収集方法にも配慮が必要な検討課題であるだろう。

3モデルの検討において、「大学での学習習慣（学修行動調査 Q9 の計）」の標準化係数 $\beta$ の値の高さと、この変数を投入したことによる決定係数の上昇は今年度も特筆に価する。この変数は前節のGPAにも高く寄与しており、山口大学の教育における学習習慣の涵養の重要性が際立つ結果となった。授業外学修時間については、上記の通りの結果ではあったものの、モデル自体の決定係数は微増しているため、今後の検討によっては学習習慣同様に、更にモデルを詳しくするために役立つだろう。

次に、従属変数を「2018年度のPROGのコンピテンシー総合評価」とし、資質・能力と同じ説明変数を投入した重回帰分析を行った。前年度モデル2で確認された変数を投入したものが図表IV-16に示したモデル1、モデル1に「大学での学習習慣（学修行動調査 Q8 合計）」を加えた分析がモデル2、更に新しい間接指標である「授業外学修時間（学修行動調査 Q8-2）」を加えた分析がモデル3である。

図表IV-16 学修到達度調査（PROG）におけるコンピテンシーの規定要因分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
(定数)	0.420		-0.770		-0.833	†
性別=男	0.473	0.140 **	0.320	0.095 **	0.325	0.096 **
大学志望度	-0.180	-0.099 **	-0.175	-0.096 **	-0.171	-0.094 **
希望最終学歴	-0.172	-0.054 †	-0.069	-0.022	-0.072	-0.023
高校時代の成績	-0.001	-0.010	-0.002	-0.037	-0.002	-0.036
高校活動熱心度_学校行事	0.299	0.157 **	0.218	0.115 **	0.228	0.119 **
高校活動熱心度_委員会活動	0.028	0.015	0.003	0.002	-0.010	-0.006
高校活動熱心度_体育会系部活動	0.079	0.063 *	0.071	0.056 *	0.064	0.051 †
高校活動熱心度_文化系部活動	0.031	0.021	0.029	0.020	0.024	0.016
高校活動熱心度_ボランティア	0.049	0.025	0.047	0.024	0.053	0.027
高校活動熱心度_国際交流	0.201	0.099 **	0.152	0.074 *	0.157	0.077 **
高校活動熱心度_研究活動	-0.033	-0.016	-0.066	-0.032	-0.068	-0.033
高校活動熱心度_アルバイト	0.121	0.042	0.109	0.038	0.105	0.037
高校生活習慣_受験勉強をする	-0.030	-0.015	-0.059	-0.030	-0.052	-0.026
高校生活習慣_予習復習をする	-0.122	-0.064 †	-0.143	-0.074 *	-0.141	-0.073 *
高校生活習慣_授業でわからないところを調べる	0.129	0.066 *	0.035	0.018	0.036	0.018
高校生活習慣_授業以外の興味を勉強する	0.207	0.111 **	0.126	0.068 *	0.130	0.070 *
高校生活習慣_新聞を読む	0.046	0.023	0.028	0.014	0.033	0.017
高校生活習慣_本を読む	-0.109	-0.066 *	-0.101	-0.061 *	-0.095	-0.057 *
大学活動熱心度_専門分野の学習	0.043	0.020	-0.139	-0.064 *	-0.143	-0.066 *
大学活動熱心度_幅広い教養の学習	0.168	0.078 **	0.023	0.011	0.022	0.010
大学活動熱心度_就職につながる学習・活動	-0.060	-0.029	-0.060	-0.029	-0.076	-0.036
大学活動熱心度_課外活動	0.128	0.081 **	0.150	0.096 **	0.141	0.090 **
大学活動熱心度_スキル修得	0.259	0.107 **	0.184	0.076 **	0.201	0.083 **
大学活動熱心度_将来像設計	-0.059	-0.025	-0.112	-0.047 †	-0.104	-0.044
ALポイント累計_グループワーク	0.001	0.075	0.001	0.058	0.001	0.059
ALポイント累計_ディスカッション	-0.002	-0.174 *	-0.002	-0.219 **	-0.002	-0.217 *
ALポイント累計_フィールドワーク・実験・演習	0.000	-0.054	0.000	-0.037	0.000	-0.035
ALポイント累計_プレゼンテーション	0.002	0.144 †	0.002	0.160 *	0.002	0.165 *
ALポイント累計_振り返り	0.001	0.044	0.000	0.028	0.000	0.024
ALポイント累計_宿題	-0.001	-0.030	-0.001	-0.026	-0.001	-0.026
大学学習習慣			0.074	0.381 **	0.075	0.387 **
授業外学修時間					-0.009	-0.041 †
調整済みR2乗		0.157		0.270		0.258
F値		9.982 **		18.599 **		16.345 **

従属変数 3年次PROGコンピテンシー

\*\*p<.01 \*p<.05 †p<.10

このモデル3は、資質・能力のモデルほど決定係数が高くないが、有意にコンピテンシーを説明しており、有意な説明変数も多い。5%水準で有意な変数を確認すると、まず男性ダミーが正の標準化係数を持っており、男子学生のほうが高いコンピテンシーを得ていることが分かる。これは今までにない傾向ではあるが、コンピテンシーで測定する社会人を理想としたコミュニケーションや課題解決力について、性差に関係ある要因があることを考慮する必要がある。高校時代の活動では「学校行事」「国際交流」「授業以外の興味を勉強する」という項目が有意に正の影響を及ぼしている。資質・能力にも影響が考えられた「学校行事」の持つ教育効果は重要であり、今後の入試などの参考になるだろう。大学における熱心な「課外活動」「スキル修得」も資質・能力で挙げられていた項目であり、正課外学修のコンピテンシーに対する影響は重要であるが、大学学習習慣が大きな影響を持つことも同じであり、バランスを踏まえた指導が求められる。資質・能力と異なり、ALポイントについては「プレゼンテーション」が正の影響を持っているため、授業内のAL活動もまた、様々な指導法を導入し、バランスが必要とされる。

一方で、高校時代の「予習復習」「読書」、大学における「専門分野の学び」「ディスカッション経験の累積」「授業外学修時間」などがマイナスの影響を与えているという点は慎重な解釈が必要である。資質・能力の規定要因分析と似ているが、コンピテンシーを育てるためには正課外学修の時間の確保が重要であるために、上記の変数が示すような真面目な学習単体では、必ずしもコンピテンシーを培うことには繋がらない可能性が指摘できる。

よって、資質・能力と同様に正課外の学修と大学における学習習慣がコンピテンシーの大きな規定要因と言える。中でも大学学習習慣の効果は大きく、正課外で様々な経験を積みつつ、大学において大人としての基本的な学修姿勢を身に付けることが、社会において役立つコンピテンシーの育成に重要であることが分かった。

## 7. 縦断的調査による成長グループの学修・生活時間の分析

今年度新しく収集したデータのひとつである学修・生活時間（学修行動調査 Q8）について、5,6 節で示した重回帰分析だけでなく、縦断的に得られた PROG テスト結果を用いて分析しておく。今回は、リテラシーとコンピテンシーの総合評価について、平均以上と以下のグループに受験年度別に 4 グループに分けて、それぞれのグループの 3 年次の時間の使い方に違いが見られるか分散分析で確かめた。グループの分け方は図表Ⅳ-17 に示すとおりである。ただし、初めて行った時間についてのアンケートは、1 週間あたりの活動時間の合計を自ら数値記入するものであり、自己申告の大まかな指標である。明らかな誤記は欠損値としたものの、正確な時間についてデータ収集できたとは言えず、アンケートの質問方法についての課題は残る分析であることを先に述べておく。

図表Ⅳ-17 縦断的調査による成長グループの分け方と人数

グループ	2016年度受験 1年次PROGテスト	2018年度受験 3年次PROGテスト	リテラシー人数 (総和の%)	コンピテンシー人数 (総和の%)
①低→低	受験時学内平均以下	受験時学内平均以下	453(30.5%)	561(38.1%)
②低→高	受験時学内平均以下	受験時学内平均以上	231(15.5%)	69(4.7%)
③高→低	受験時学内平均以上	受験時学内平均以下	304(20.5%)	316(21.5%)
④高→高	受験時学内平均以上	受験時学内平均以上	498(33.5%)	526(35.7%)

リテラシーの成長に関して、時間の使い方に違いが見られたのは「履修授業時間」( $F(3,1425)=3.14, p<.05$ )と、「授業以外の学習（資格・検定試験のための学習を含む）時間」( $F(3,1453)=4.35, p<.01$ )である。最小二乗差法によるその後の検定により、図表Ⅳ－18に示したグループ間に有意差が見られることが分かった。

図表Ⅳ－18 リテラシーの成長グループ別の時間の使い方（グループ平均値）

※その後の検定は最小二乗差法により 1%水準で有意な差を示す

リテラシー×授業に出席している時間			
グループ	平均値	平日1日換算	その後の検定
①低→低	18.11時間	約3時間37分	①<③
②低→高	18.06時間	約3時間37分	②<③
③高→低	20.37時間	約4時間4分	③>①、②
④高→高	19.40時間	約3時間53分	－
リテラシー×授業以外の学習時間 (資格・検定のための学習を含む)			
グループ	平均値	1日換算	その後の検定
①低→低	3.83時間	約33分	①<②
②低→高	5.59時間	約48分	②>①、③
③高→低	3.44時間	約29分	③<②、④
④高→高	4.79時間	約41分	④>③

分散分析で 5%水準の有意な差が見られる「履修授業に出席している時間」については、高→低グループが有意に他のグループ（低→高、高→低）よりも多く授業に時間をかけていることが分かった。これは、一つの可能性として、授業にばかり時間を費やしているとリテラシーは低下してしまうことを表している。ただし、リテラシーの高さを保ったグループは、高→低グループと変わらない時間を授業に割いており、この結果は必ずしも授業の負の影響を示すものではない。また、今回のアンケートの分析は学部による違いまでは見ることが出来ていないため、カリキュラムの違いによる影響の可能性も否定できない。

「授業以外の学習時間」については、分散分析の結果 1%水準で有意な差があることが分かった。その後の検定によると、低→高グループは他のグループ（低→低、高→低）よりも多く授業以外の学びを行っており、高→低グループは他のグループ（低→高、高→高）よりも授業以外の学びにかかる時間が有意に少ない。よって、資格・検定のための学習を含めた授業以外の学習時間がリテラシーを高めることが考えられる。大学の授業に時間をかけているよりも、資格試験の勉強をする方がリテラシーの点数は伸びる。これは、リテラシーテストの一部に就職活動などで用いられる SPI が含まれることなどからも、妥当だと考えられる。今後、よりリテラシーの成長を促すためには、授業でも資格対策などを行っていく必要があるが、この結果を含めて、リテラシーが大学において育てるべき能力であるかについても再考する必要があるだろう。

コンピテンシーの成長に関しては、複数の項目において有意な差が見られた。それらは「授業以外の学習（資格・検定試験のための学習を含む）」( $F(3,1439)=3.76, p<.05$ )、「部活動・サークル活動・ボランティア活動」( $F(3,1442)=7.63, p<.01$ )、「アルバイト」( $F(3,1443)=7.86, p<.01$ )、「インターネット」( $F(3,1441)=3.84, p<.05$ )、「睡眠時間」( $F(3,1439)=4.25, p<.01$ )の 5 項目であり、全てその後の検定を行った（図表Ⅳ－19）。

図表Ⅳ-19 コンピテンシーの成長グループ別の成長グループ別の時間の使い方

コンピテンシー×授業以外の学習時間 (資格・検定のための学習を含む)			
グループ	平均値	1日換算	その後の検定
①低→低	4.23時間	約36分	①<④
②低→高	3.67時間	約31分	-
③高→低	3.41時間	約29分	③<④
④高→高	5.22時間	約45分	④>①、③
コンピテンシー×部活動・サークル・ボランティア時間			
グループ	平均値	1日換算	その後の検定
①低→低	4.22時間	約36分	①<④
②低→高	3.77時間	約32分	②<④
③高→低	4.38時間	約38分	③<④
④高→高	6.07時間	約52分	④>①、②、③
コンピテンシー×アルバイト時間			
グループ	平均値	1日換算	その後の検定
①低→低	9.95時間	約1時間25分	①<②、③、④
②低→高	13.19時間	約1時間53分	②>①
③高→低	11.60時間	約1時間39分	③>①
④高→高	12.64時間	約1時間48分	④>①
コンピテンシー×インターネット利用時間			
グループ	平均値	1日換算	その後の検定
①低→低	14.42時間	約2時間4分	①>④
②低→高	14.63時間	約2時間5分	-
③高→低	14.09時間	約2時間1分	③>④
④高→高	12.03時間	約1時間43分	④<①、③
コンピテンシー×睡眠時間			
グループ	平均値	1日換算	その後の検定
①低→低	44.95時間	約6時間25分	①>②、④
②低→高	40.17時間	約5時間44分	②<①、③
③高→低	43.77時間	約6時間15分	③>②、④
④高→高	42.67時間	約6時間6分	④<①

コンピテンシーの成長グループの分散分析とその後の検定の結果をまとめると、社会人基礎力に通じるコンピテンシーの成長については、大学の授業の受講や、(読点) 授業外学修にかかる時間は関係がない。正課外の活動として資格や検定試験の勉強、部活などの活動、アルバイトを多く行い、インターネットや睡眠の時間を取り過ぎないことで、コンピテンシーの点数を伸ばすことができる、ということが分かった。

今回の分析により、より成長した学生だけでなく、成績が落ちた学生・低迷している学生についても学習状況を捉えることができた。ただし今回は大学全体の傾向しか見られていない上、平均点によるグループ化は分析の上では問題がなくても、今後の運用上は課題を残している。本学において育成したい能力を再度精査し、目標値を定めた上で、その目標値を下回る・上回る成長をした学生についての考察が必要になるだろう。



## 8. 直接評価・間接評価の試行的分析のまとめ

本節では、分析を通して分かったことと、結果による今後の示唆についてまとめる。

山口大学では、多くの学生が大学生として求められる学習習慣を身に付けている。また、1年次と3年次のPROGテストを見ても、成長が明らかである。学生達の成長の要因を知るために、直接・間接指標の説明をするモデルを考察したところ、大学における学修成果のためには、第一に学習習慣が重要であること、そしてそれに加えて高校・大学時代の正課外学修を行うことが必要であることが分かった。ただし、GPAに関しては探求活動に関する能力が高ければ挽回も可能である。資質・能力やコンピテンシーに関しては正課外の影響が強く、授業外学修時間や予習復習はマイナスの影響を与えうる。そして、特に成長の顕著である学生について考える分析に基づき、学習時間はもちろん、課外活動、インターネット使用時間や睡眠時間などについても、より適切な時間配分をするよう指導することで山口大学の学生の力を更に伸ばすことが出来るだろう。

本分析は、昨年度の初めての本格的な分析を基盤として、多面的に学修成果を考察した。蓄積されたデータを基に、学修成果の要因となるものについても分析が進んだ。これはPDCAサイクルで言うところのCとしては十分に意味のある結果を示したが、次の改善に繋げなければ意味をなさない。最終年度に向けて、必要な施策を吟味し、かつAP事業で明らかにされてきた内容について広く公開することが喫緊の責務であると考えている。その際留意すべきこととして、今回の分析は、特定の学年のデータを使用しているため、これだけ大人数のデータは貴重であるものの、山口大学の中でも限定されたサンプルによる分析であることは否めない。こうした限界を踏まえつつ、測定すべき資質能力に応じて、数値のみの指標だけでない、これまで蓄積されてきた質的なデータの分析も急がれる。最終的なまとめの公開に向けて、これまでの学修成果の可視化の取組や、ようやく得られる1年次から4年次までの追跡データ等を全て合わせて今後の考察を進める必要があるだろう。

## 9. YU CoB CuSの有効性の検証に関する調査

2017年度から、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU・AP）事業の一環として、学生の学修成果可視化の充実を図るために、YU CoB CuSの有効性の検証の調査に着手した。具体的には、① YU CoB CuSで測定している能力の信頼性・妥当性は担保されているか、② YU CoB CuSを利用した学生のリフレクションや教員によるアドバイジングが学生の学修改善を促すことに有用かどうかや、教員の教育実践にどのような影響を与えるのかということを検討することを目的としている。先行学部である国際総合科学部を対象に、YU CoB CuSを利用してどのように学生のリフレクションを促したり、アドバイジングをしているのかや、各科目の成績評価とYU CoB CuSのDP得点との対応についての考えを伺うため、質問紙調査を行うこととした。調査の概要は以下のとおりである。

2018年度においては、2017年度に引き続き、国際総合科学部2～4年生に対する学生調査を実施するとともに、当該調査の暫定結果について、2018年8月に開催された理系学部を対象としたYU CoB CuS勉強会において概要報告及び資料提供を行った。

## 〔調査概要〕

### 1. YU CoB CuS の有効性の検証について

- 学生の学修成果可視化の充実と意味付けを図るために、YU CoB CuS の有効性を検証する必要がある。
- 国際総合科学部をフィールドに、教員調査・学生調査を行うことを通して、具体的な検証を行う。
- YU CoB CuS の有効性について、「YU CoB CuS を利用することが教育・学習において有用か」と「YU CoB CuS で測定している能力の信頼性・妥当性は担保されているか」という 2 軸から検討することとするが、まずは、「YU CoB CuS を利用することが教育・学習において有用か」から着手していく。

### 2. 「YU CoB CuS を利用することが教育・学習において有用かどうかの検討」

#### 【教員調査】

- YU CoB CuS が授業改善や学生指導の役に立っているかどうかについて、教員を対象とした質問紙調査とインタビュー調査によって検討する。

#### 【教員調査・質問紙（自由記述形式）】

《YU CoB CuS をどのように活用して学生のリフレクション（省察）を促しているか》

Q1) YU CoB CuS の結果を学生に提示しながら、どのような指導をしていますか。YU CoB CuS の結果から、これからの学習のアドバイスをどのようにしているか、学生自身にどのように考えさせているかなど、差し支えない範囲でその詳細をお書きください。なお、学生によって対応が異なる点もあるかと思いますが、どの学生にも共通して行っていることをお書きください。[基礎セミナー担当教員（担任教員）のみ回答]

Q2) 学修が順調でない学生に対して、YU CoB CuS を用いて、どのような指導をしていますか。こちらも差し支えない範囲でその詳細をお書きください。

[基礎セミナー担当教員（担任教員）のみ回答]

Q3) YU CoB CuS の活用方法において、実際には行っていないが、このようにしたら教育的指導に役立つのではないかなどのアイデアはございますか。もしございましたらお書きください。[全教員回答]

《妥当性へのイメージ》

Q4) YU CoB CuS で割り当てられた基準スコアは、DP（ディプロマ・ポリシー）に求められている資質・能力をしっかりと反映していると思いますか。もし反映していないとお考えでしたら、どの資質・能力が反映していないのかとその理由を挙げてください。また、反映するためにどのように改善すればよいのか、アイデアがあればお書きください。[全教員回答]

《自身の教育活動への活用》

Q5) YU CoB CuS が、担当学生への指導以外に、自身の授業や教育活動に役に立っているところがございましたらお書きください。[全教員回答]

【学生調査】

➤ 学生が実際に YU CoB CuS によってどのようにリフレクションをしているのかや、それを次の学習にどのように活かしたかなどを問う、学生調査を別途実施し、それらが YU CoB CuS の個人スコアの基準スコアに対する比の変化にどの程度影響を与えていたのかを統計的に検討し、その後の学生へのアドバイジングに有用な情報に関する示唆を得る。

【学生調査・質問紙（4 択式）】

Q1) YU CoB CuS の結果をしっかりと確認している。

①かなりあてはまる ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q2) 授業を受講する際やテスト勉強をする際は、DP（ディプロマ・ポリシー）で求められている資質・能力や授業科目に割り当てられた基準スコアを意識している。

①かなりあてはまる ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q3) 担任教員による YU CoB CuS に基づいた学習指導（アドバイス）をその後の学習の参考にしている。

①かなりあてはまる ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q4) YU CoB CuS の基準スコアや自分が獲得した個人スコアに疑問があれば、授業担当教員や担任教員に質問するようにしている。

①かなりあてはまる ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q5) YU CoB CuS の結果をもとに、自分の学習がうまくいっているかどうかを確認し、改善が必要であれば改善しようとしている。

①かなりあてはまる ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q6) YU CoB CuS について、意見や要望があれば自由にご記入ください。



# 学修行動調査2018（山口大学版）

大学教育センター（YU-AP推進室）

このアンケート調査は、山口大学生の学修行動・学修成果を測定し、今後の改善充実のために実施するものです。結果は統計的に処理し、他の目的に使用することはありません。

【回答にあたってのお願い】

★ 回答にあたっては、あなたの学籍番号を該当欄に記入してください。

★ 各設問では、該当する番号を一つ選び○で囲む、又は、数字を記入してください。

Q1 あなたの学籍番号を記入してください。

		-					-				-	
--	--	---	--	--	--	--	---	--	--	--	---	--

Q2 あなたが現在所属する山口大学の学部を受験した際、その学部をどのくらい志望していましたか。 **あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。**

- 1) 強く志望していた    2) 少し志望していた    3) あまり志望していなかった    4) 全く志望していなかった

Q3 あなたは最終学歴としてどこまでいくことを希望していますか。 **あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。**

- 1) 大卒（学士号の取得）    2) 大学院卒（修士号や専門職学位の取得）    3) 大学院卒（博士号の取得）    4) その他

Q4 あなたの高校での成績は同じ集団の中でどのくらいに位置していましたか。時期や科目によって異なると思いますが、平均的にこのくらいの位置であった、という思いで、 **あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。**

- 1) 上位（偏差値66以上が目安）    2) 中の上（偏差値56～65が目安）    3) 中くらい（偏差値46～55が目安）  
4) 中の下（偏差値36～45が目安）    5) 下位（偏差値35以下が目安）

Q5 あなたは高校時代（大学入学前）、次の活動について、どのくらい力を入れていましたか。それぞれの活動について、 **もっともあてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。** 時期や場合によって異なると思いますが、平均的にそうであった、という思いでお答えください。

次の1～8項目について「かなり力を入れていた、少し力を入れていた、あまり力を入れていなかった、全く力を入れていなかった」の4段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。

	あ	ま	全
	り	り	く
か	力	力	力
な	少	を	を
り	し	入	入
力	力	れ	れ
を	を	て	て
入	入	い	い
れ	れ	な	な
て	て	か	か
い	い	っ	っ
た	た	た	た

1 学校の行事（体育祭や学園祭等）	4	3	2	1
2 委員会活動（生徒会・学級委員等）	4	3	2	1
3 部活・クラブ・サークル・同好会活動（体育会系）	4	3	2	1
4 部活・クラブ・サークル・同好会活動（文化系）	4	3	2	1
5 ボランティア活動	4	3	2	1
6 国際交流活動	4	3	2	1
7 研究活動	4	3	2	1
8 アルバイト活動	4	3	2	1

Q6	<p>あなたは高校時代（大学入学前）、次のことがらについて、どのくらい力を入れていましたか。それぞれのことがらについて、<b>もっともあてはまるものを一つ</b>選び、○で囲んでください。時期や場合によって異なると思いますが、平均的にそうであった、という思いでお答えください。</p> <p>次の1～13項目について「かなりあてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、全くあてはまらない」の4段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。</p>	あ	ま	全
		か	少	く
		な	あ	あ
		り	て	て
		あ	は	は
		て	ま	ま
		は	ら	ら
		ま	な	な
		る	い	い

1 大学入試対策をしっかりとやること	4	3	2	1
2 授業の予習・復習をすること	4	3	2	1
3 授業でわからないところを自分で調べること	4	3	2	1
4 授業以外に興味のあることを自分で勉強すること	4	3	2	1
5 日々の生活を規則正しくすること	4	3	2	1
6 目標を立てて、その達成のために努力すること	4	3	2	1
7 PC・携帯電話等で知人とコミュニケーションをとること	4	3	2	1
8 PC・携帯電話等で顔の知らない誰かとコミュニケーションをとること	4	3	2	1
9 PC・携帯電話等でwebサイトの閲覧をすること	4	3	2	1
10 テレビを見ること	4	3	2	1
11 新聞を読むこと	4	3	2	1
12 読書をすること	4	3	2	1
13 趣味に打ち込むこと	4	3	2	1

Q7	<p>あなたの山口大学における学生生活において、次のことがらはどの程度あてはまりますか。それぞれのことがらについて、<b>もっともあてはまるものを一つ</b>選び、○で囲んでください。</p> <p>次の1～7項目について「かなりあてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、全くあてはまらない」の4段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。</p>	あ	ま	全
		か	少	く
		な	あ	あ
		り	て	て
		あ	は	は
		て	ま	ま
		は	ら	ら
		ま	な	な
		る	い	い

1 専門分野について深く学びたい	4	3	2	1
2 専門に限らず幅広い知識や教養を身につけたい	4	3	2	1
3 就職につながる学習や活動をしたい	4	3	2	1
4 課外活動（部活・サークル・同好会など）に力を入れたい	4	3	2	1
5 将来の仕事に役立つような能力やスキルを身につけたい	4	3	2	1
6 自分の将来の方向性を見つけない	4	3	2	1
7 卒業までの自由な時間を満喫したい	4	3	2	1

Q8 あなたは、次のことがらについて、大学の授業期間中、1週間あたりでどれくらいの時間を使っていますか。□の欄に**具体的な時間数を数字で記入**してください。  
 なお、下記の時間数の合計は、**1週間（168時間）を超えない範囲内で記入**してください。

1 大学の授業の受講	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
2 授業に関する授業時間外の学習（予習・復習・課題学習など）	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
3 授業以外の学習（資格・検定試験のための学習を含む）	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
4 授業以外の読書	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
5 部活動・サークル活動・ボランティア活動	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
6 就職活動	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
7 アルバイト・仕事	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
8 交友・趣味・娯楽	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
9 インターネットの閲覧	1週間あたり	<input type="text"/>	時間
10 睡眠	1週間あたり	<input type="text"/>	時間

Q9 大学での授業や学習における次の態度や取り組み方について、あなたはどの程度あてはまりますか。それぞれのことがらについて、 <b>もっともあてはまるもの</b> を一つ選び、○で囲んでください。時期や場合によって異なると思いますが、平均的にそうである、という思いでお答えください。		かなりあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
次の1～12項目について「かなりあてはまる、あてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない、全くあてはまらない」の6段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。							
1	課題やレポートは満足がいくように仕上げる	6	5	4	3	2	1
2	課題やレポートはただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い	6	5	4	3	2	1
3	授業には意欲的に取り組む	6	5	4	3	2	1
4	グループワークの際、グループにおける自分の役割をしっかりと果たす	6	5	4	3	2	1
5	グループワークの際、グループの活動を前進させるような提案や行動をする	6	5	4	3	2	1
6	グループワークの際、グループのメンバーの提案に対して、積極的に言葉や行動で反応する	6	5	4	3	2	1
7	議論や発表の中で自分の考えをはっきり示す	6	5	4	3	2	1
8	議論や発表の中で根拠を持って自分の意見を言う	6	5	4	3	2	1
9	議論や発表の中で自分の考えをうまく伝えられる方法を考える	6	5	4	3	2	1
10	授業では、新しい概念を理解しようとするときにはよく、それを実際の状況や日常の出来事に関連させる	6	5	4	3	2	1
11	授業では、学んでいるものに対して自分なりの結論を導くために、そのエビデンス(証拠・根拠)を注意深く検討する	6	5	4	3	2	1
12	授業では、議論を理解したり、ものごとの背後にある理由や理屈を理解することが、自分にとっては重要である	6	5	4	3	2	1
Q10 次の資質や能力について、あなたはどの程度身につけていると思いますか。それぞれのことがらについて、 <b>もっともあてはまるもの</b> を一つ選び、○で囲んでください。		かなりあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
次の1～22項目について「かなりあてはまる、あてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない、全くあてはまらない」の6段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。							
1	社会生活を営む上で求められるマナーが身についている	6	5	4	3	2	1
2	社会問題への関心が高く、幅広い知識・教養を身につけている	6	5	4	3	2	1
3	自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる	6	5	4	3	2	1
4	自分の考えや論理を他人にわかりやすくプレゼンテーションすることができる	6	5	4	3	2	1
5	他人の発言や発表内容を素早く的確に理解することができる	6	5	4	3	2	1
6	物事を筋道立てて論理的に考察することができる	6	5	4	3	2	1
7	細かいことにとらわれず、的確に全体的な判断を下すことができる	6	5	4	3	2	1
8	成果をあせらずに、地道な努力を積み重ねることができる	6	5	4	3	2	1
9	周囲の雑音を気にせずに、研究や仕事に長時間取り組むことができる	6	5	4	3	2	1
10	不明なこと、理解できないことは納得できるまで追求する	6	5	4	3	2	1
11	既存の概念にとらわれず、新しいものを生み出そうとする意識が高い	6	5	4	3	2	1
12	何事にもチャレンジ精神が旺盛である	6	5	4	3	2	1
13	自分の欠点を自覚し、常に改善の努力を続けている	6	5	4	3	2	1
14	他人と努力しながら研究や作業を進めることができる	6	5	4	3	2	1
15	周囲の意見や風評に流されることなく、善悪の判断ができる	6	5	4	3	2	1
16	交友関係が豊かである	6	5	4	3	2	1
17	指示されなくても、自分で判断して行動ができる	6	5	4	3	2	1
18	新しい機器類の操作を学んだり、率先して新しい技術を覚え、必要に応じた活用が十分できる	6	5	4	3	2	1
19	必要とする情報や未知の知識を得るための手段や方法をよく知っている	6	5	4	3	2	1
20	他人の意見・行動に根拠ある批判ができる	6	5	4	3	2	1
21	与えられた前提、条件から結論を推論することができる	6	5	4	3	2	1
22	リーダーになって集団をまとめることができる	6	5	4	3	2	1

---

**Q11** あなたは、大学においてどのようなテーマを設定して探究するのかということに関して、以下のどれにあてはまりますか。 **もっともあてはまるもの**を一つ選び、○で囲んでください。

---

- 4) 自分の探究したい内容に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定ができる。
  - 3) 自分の探究したい内容に応じて、下調べをした上でテーマ設定ができる。
  - 2) 自分の探究したい内容に関連したテーマ設定ができる。
  - 1) そのようなテーマ設定自体できない。
- 

---

**Q12** あなたは、探究したテーマの成果を、他人に見せる形で成果物にする際、以下のどれにあてはまりますか。 **もっともあてはまるもの**を一つ選び、○で囲んでください。なお、成果物とは、レポートや論文、プレゼンテーション資料、作品などを指します。

---

- 4) 収集した情報の分析・考察にもとづき、必要であれば他者との協働作業も通しながら、学術的あるいは社会的に独創性かつ意義があり、その説得力がある成果物を作成できる。
  - 3) 収集した情報の分析・考察にもとづき、必要であれば他者との協働作業も通しながら、学術的あるいは社会的に意義があり、その説得力がある成果物を作成できる。
  - 2) 収集した情報の分析・考察にもとづいて成果物を作成できる。
  - 1) そのような成果物の作成自体できない。
- 

---

**Q13** あなたは、探究したテーマの成果物を他者と共有したり発表したりする際、以下のどれにあてはまりますか。 **もっともあてはまるもの**を一つ選び、○で囲んでください。なお、成果物とは、レポートや論文、プレゼンテーション資料、作品などを指します。

---

- 4) 成果物を説得力のある形で効率的・効果的に他者と共有したり発表したりするために、適切な共有方法や発表方法を選び、必要であればチームワークを発揮して展開し、評価を得ることができる。
  - 3) 成果物を効率的・効果的に他者と共有したり発表したりするために、適切な共有方法や発表方法を選び、必要であればチームワークを発揮して展開し、評価を得ることができる。
  - 2) 成果物を他者と共有したり発表したりすることができる。
  - 1) そのような、他者との共有や発表自体できない。
- 

---

**Q14** 設定したテーマに関して探究した成果物やその作成プロセスを自分で評価する際、以下のどれにあてはまりますか。 **もっともあてはまるもの**を一つ選び、○で囲んでください。なお、成果物とは、レポートや論文、プレゼンテーション資料、作品などを指します。

---

- 4) 自分（たち）の成果物やその作成プロセスを適切に評価し、限界点を見極めて次に探究すべきより深いテーマを設定したり、反省点や改善が必要な点を浮き彫りにしてそれを克服したりするように評価を活かすことができる。
  - 3) 自分（たち）の成果物やその作成プロセスを適切に評価し、反省点や改善が必要な点を浮き彫りにしてそれを克服するように評価を活かすことができる。
  - 2) 自分（たち）の成果物やその作成プロセスを評価し、反省点や改善が必要な点を浮き彫りにすることができる。
  - 1) そのような評価自体できない。
- 

---

これで質問は終わりです。お手数ですが、記入漏れがないかどうかすべての欄を確認してください。  
ご協力ありがとうございました。

---

## V. 事業関連イベント報告



## 1. 第3回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 【キャリア開発】 『ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事～大学職員の先輩に聞いてみよう～』

2018年5月15日(火)、吉田キャンパス総合図書館アカデミック・フォレスト(ラーニングコモンズ)において、第3回スチューデント・リーダープログラム(SLP)【キャリア開発】「ぶち教えちゃる！大学職員の仕事～大学職員の先輩に聞いてみよう～」を開催し、学生・教職員52名が参加した。

大学は、学生、教員及び職員の皆で構成されているが、大学運営における大学職員の役割が高まってきていることから、仕事上のチャンスも広がっていると考えられている。そのことから、大学生の人気職種の一つに数えられるほどになっており、このプログラムは、大学職員の仕事の魅力について、本学出身の職員が話題を提供するとともに、大学で働くことについて学生と語り合う場として開催された。



第一部の話題提供では、総務企画部地域連携課地域連携係 江口貴理氏(山口大学工学部卒)から、学生時代に抱いていた大学職員志望動機、採用後に見えてきた大学職員の仕事の魅力や規模の大きさを紹介しながら、これまで経験してきた複数の部署での業務内容の詳細や研修制度の種類などについて説明があった。最後には、山口大学について知っておいてほしい知識をクイズ形式で学生に問いかけた。続いて、情報環境部学術情報課情報サービス係 松原花梨氏(山口大学人文学部卒)は、小学生から大学生までの自分を振り返りながら、公務員講座を受講する中で大学職員採用試験の存在を知ったこと、採用試験対策をどのように行ったかなど、受講生にとって身近な話題を提供いただくとともに、採用後の大学職員として必要なスキルや将来の夢などについて話があった。2人とも、大学職員という職種において、多種多様な経験ができるとともに、ワークライフバランスを確保しやすい職場環境であるという魅力を学生へ向けて語った。



第二部のダイアログセッションでは、4つのグループに分かれ、参加学生が先輩職員を囲みながら、大学の職場環境、採用試験のことなどを質問し、大学職員の仕事について更なる理解を深めた。学生からは、「大学職員に対する理解が深まる良い機会となった」「現場で働く方から直接、話が聴ける機会は有難いです」との感想が寄せられ、大学職員という仕事について、真剣に考える良い機会を提供することができた。

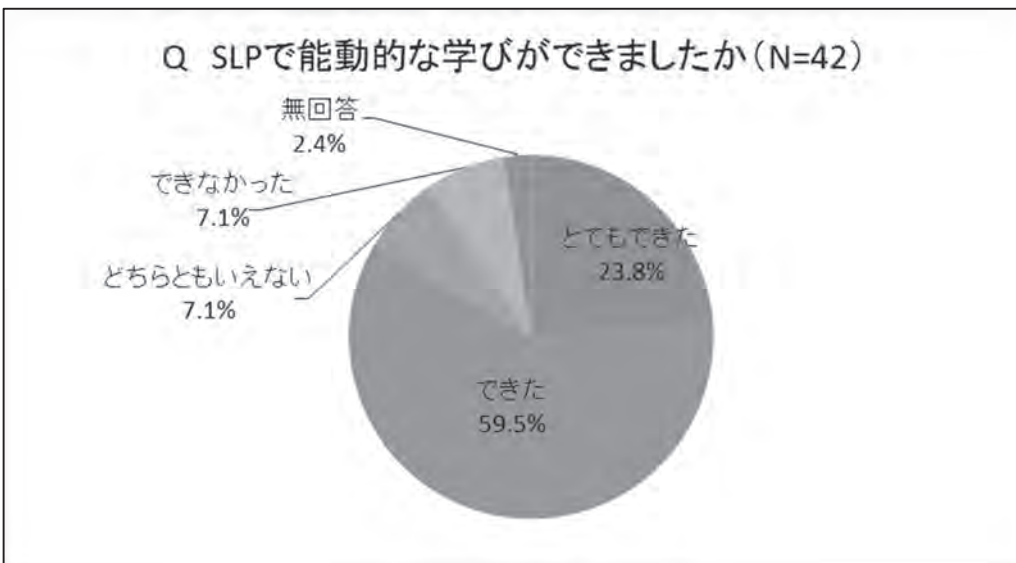
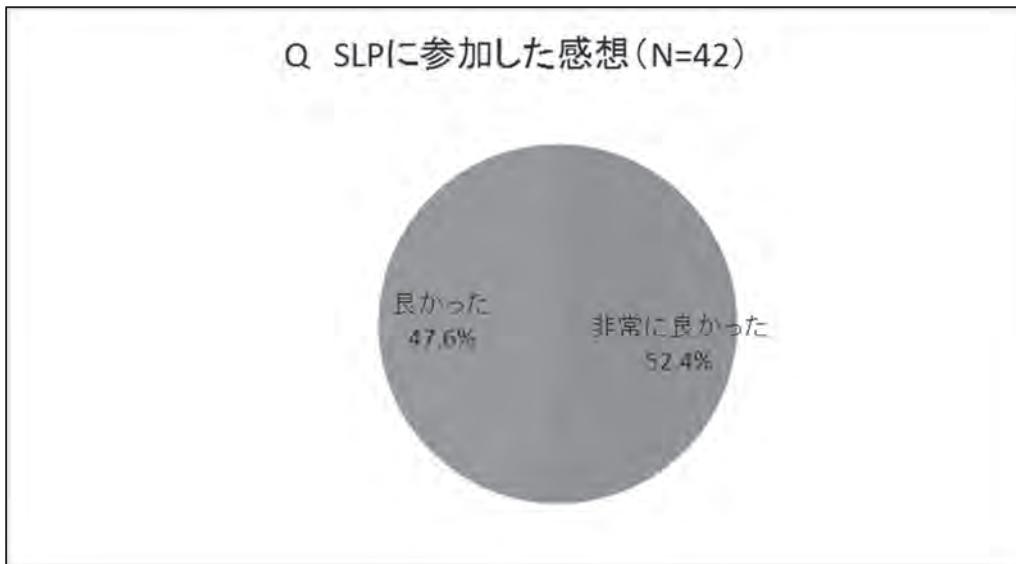




江口さん



松原さん



図表V-1 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 第3回参加者アンケート結果

## 2. 第9回・第10回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP)

### 【ラーニング・スキル開発】『ライティング入門講座～レポートの基本的な作法とコツをつかめ～』

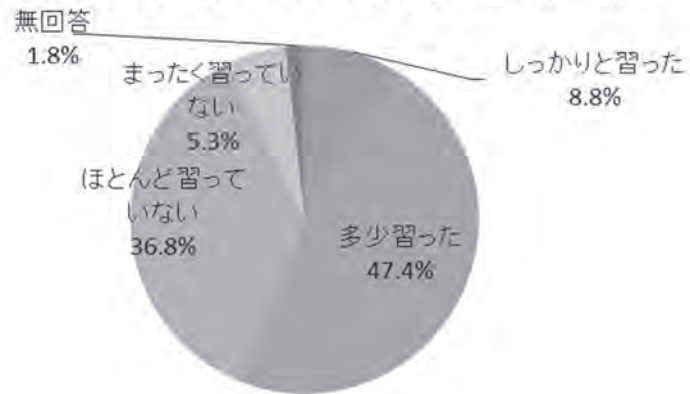
2018年7月4日(水)・5日(木)の2日間にわたって、第9回・第10回スチューデント・リーダープログラム (SLP) 【ラーニング・スキル開発】『ライティング入門講座～レポートの書き方の基本的な作法とコツをつかめ!～』を開催し、学生・教職員 計73名が参加した。初日の7月4日(水)には、「放課後編」と称して夕方の時間帯に開催し、翌5日(木)には、「ランチョン編」と称して昼休みの時間帯を利用して開催され、両日とも同じ内容で行われた。今回のプログラムは、2016年度に実施した「初年次学生の学習意識調査」の結果を踏まえ、学生から要望が強かったライティングスキル養成に関する講座を昨年度から実施し、今年度は昨年度以上の参加者となった。本講座は、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) が進める正課外教育プログラムの一環として開催した。

当日は、冒頭、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授より、今回の講座の目的として、実例を示しながら、レポートの書き方には、ルールとして覚えておくべき「作法」と書く経験を積み重ねることで体得する「コツ」の二種類があることを趣旨説明した。その後、今回の講師である金沢大学附属図書館 守本 瞬 中央図書館係長より、レポートの意味・型、さらにはレポート作成の手順など、知っておくべき重要な項目について、丁寧に分かりやすく説明があった。また、レポートのふさわしい文体、引用や参考文献の記載の作法などについて説明があり、最後には、提出期限を意識しながら、推敲と校正をしっかりと行うよう指導があった。

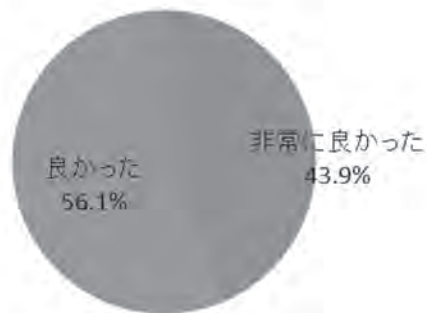
「初年次学生の学習意識調査」の結果を反映したように、この2日間において、1年生を中心に大勢の学生が参加し、真剣に聴講・質問する姿が印象的であった。学生の参加動機として、「レポートの書き方をきちんと学びたかったから。」「大学生になってからレポート提出が多くなってきたが、私はレポート作成にいつもすごい時間がかかって苦労したから。」という声が聴かれ、これらの学生のニーズに応え、参加学生から満足度の高い講座となった。今後は、前期だけでなく、後期での実施を含め、継続的に実施していく予定である。



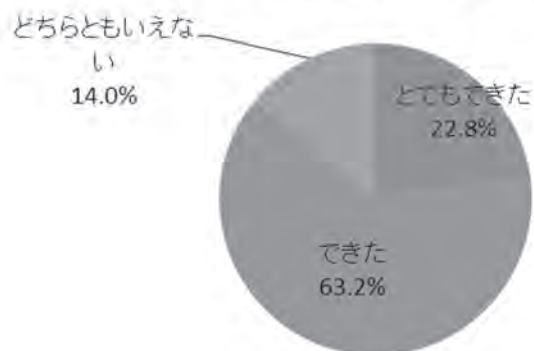
Q 大学の授業で、レポートの書き方など、  
ライティングについて習ったことがあるか(N=57)



Q SLPに参加した感想(N=57)



Q SLPで能動的な学びはできたか(N=57)



図表V-2 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP)  
第9・10回参加者アンケート結果

3. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 『アクティブ・ラーニング(AL) ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第2回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』

日 時：2018年10月22日(月) 16:10～18:00

場 所：山口大学共通教育棟 16 番教室 (アクティブ・ラーニング教室)

参加者：44名 (学内 22名 (教職員 19名、学生 3名)、学外 22名 (教職員 22名))

概 要：

16:10～16:15 開会挨拶・趣旨説明

福田 隆真 山口大学 理事・副学長 (教育学生担当)

16:15～16:55《模擬授業 Part1》

「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり

～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～

辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師

16:55～17:35《模擬授業 Par2》

「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング

～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～

仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部助教

17:35～17:55 質疑応答・対話

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)

**アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰記念  
FD・SDワークショップ  
～第2回ALベストティーチャーによる模擬授業～**

【趣 旨】  
山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)は、卒業5年目を迎え、共通教育・専門教育を通じたアクティブ・ラーニング型授業が確実に広がっております。しかし、一方において、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングを通して、学生の深い学びに結びついているのか」といった疑問や「自分の授業をアクティブ・ラーニング型授業として認識していない」といった実態が依然として見受けられます。  
本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を讃える「アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度」を2016年度に創設し、2017年度に第2回の受賞者(5科目・14名)を表彰しました。今回のワークショップでは、第2回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体験し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいと思います。

共通教育棟  
正門

日時：	2018年10月22日(月) 16:10～18:00
場所：	山口大学吉田キャンパス 共通教育棟16番教室 (アクティブ・ラーニング教室)
対象：	学内外の教職員 (定員 30名)

【申込方法・問合せ先】  
件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属(学年)、③E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(宛先: YU-AP推進室)までに、10月19日(金)まで一送付願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。  
山口大学 大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)  
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

Active Learning

Active Learning

【概 要】  
16:10～16:15 開会挨拶・趣旨説明  
16:15～16:55《模擬授業 Part1》  
「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり  
～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～」  
辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師  
(※振り返りを含む)  
16:55～17:35《模擬授業 Par2》  
「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング  
～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～」  
仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部助教  
(※振り返りを含む)  
17:35～17:55 質疑応答・対話  
17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰とは、山口大学の共通教育におけるアクティブ・ラーニング(AL)実践に顕著な成果をあげた教員について、その功績を表彰するとともに広く周知し、併せて本学教員の意欲向上とALの推進に資することを目的としています。さらに、ALによる教育効果の共通理解やAL授業実践のグッド・プラクティスを共有できる機会(FD・SDワークショップ)や事例集(Teaching & Learning Catalog)を提供することで、学内におけるAL実践の向上に資することが期待されています。



## 内 容：

2018年10月22日（月）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ ～第2回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』は、学内外から大学関係者だけでなく、高等学校・専門学校関係者を多数集め、計44名（学内22名（教職員19名、学生3名）、学外22名（教職員22名））の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟16番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。この模擬授業型ワークショップは昨年度初めて開催し好評であったことを受けて、今年度引き続き開催した。

冒頭、福田 隆真 山口大学 理事・副学長（教育学生担当）より開会挨拶があり、本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を表彰する「アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度」を平成28年度に創設し、平成29年度に第2回の受賞者（5科目・14名）を表彰し、今回のワークショップでは、第2回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいとの趣旨説明があった。



まず、模擬授業 Part1 では、辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師より、「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり ～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の模擬授業を行っていただいた。具体的には、授業の初回で行っている自己紹介の模擬体験を通してグループ形成の要点を解説した後、大学の授業として必要な知識を教授しながら、学生によるグループ活動の内容が深まるように指導していることが説明された。最後に、配布資料に従い、グループ活動を通じた学生による自己評価、グループメンバーによる他者評価、さらには、担当教員による提言・コメントなどをきめ細かくフィードバックしながら、授業の達成度を向上する仕掛けについて説明があった。



次に、模擬授業 Part2 では、仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部 助教より、「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング ～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『日本語IVB（読解・作文）』での演習内容の模擬授業を行っていただいた。冒頭、全体の授業のねらいや授業構成の意図について説明があった後、映写されたイラストを表現するアイスブレイクを経て、例題の文章を受講生に読ませて、作文課題につなげる授業パターンについて説明があった。

さらに、『日本語Ⅲ（文法）』の授業内容も併せて紹介され、日本語の文章のルール探しを演習形式で行い、単に間違いを探すだけでなく、どうして間違っているのかを問いかけ、学生の主体性を引き出す重要性を説明された。小気味の良い仁平先生の語り口や演習課題を通して参加者同士が楽しみながらワークする中で、教室全体が活気ある雰囲気に包まれていった。各グループを巡回する中で、参加者からの質疑応答に教員が即座に答える自然な雰囲気が生まれていた。



後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を記入していただいた後、グループごとに、短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、「学生のレベルによっては主体性をうまく引き出すことが難しい場合があるのではないか」、「自己評価・他者評価を行う場合にどうしても評点が甘くなるのではないか」「評価シートの運用における効率化ができないか」といった質問があり、各参加者が日々のアクティブ・ラーニング型授業での実践や学修評価の参考にすべく、実際に役立つ意見交換が行われた。実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという参加者からの真剣な思いが伝わってくるセッションとなった。



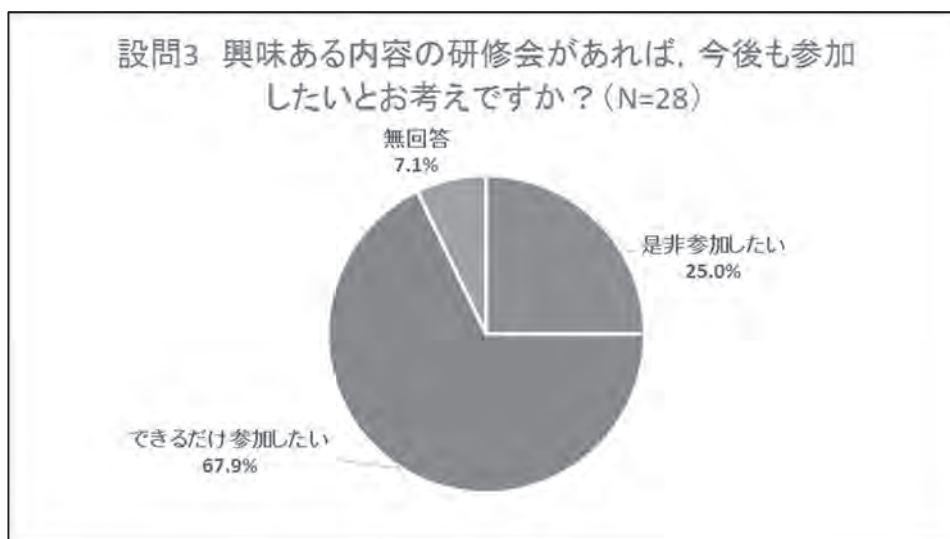
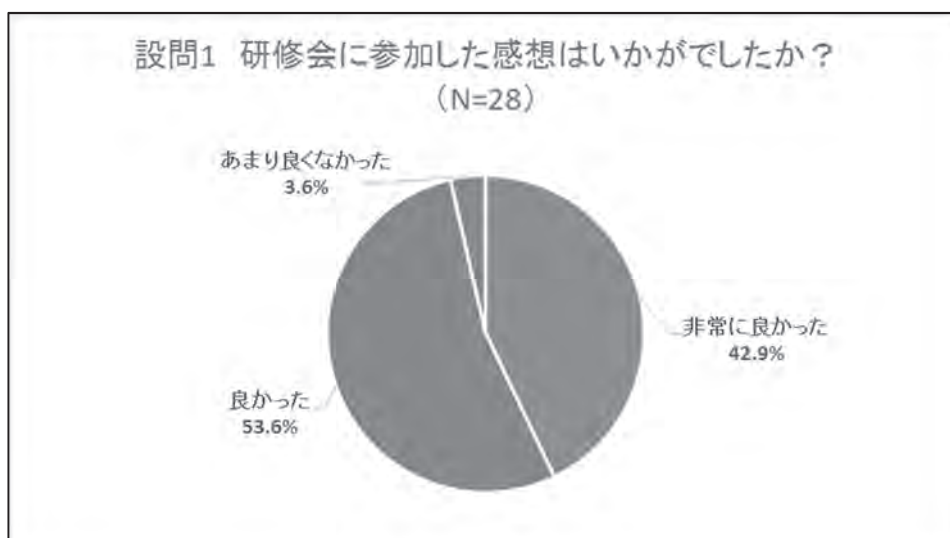
#### まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、従来、アクティブ・ラーニング型授業に関する事例紹介を行ってきたが、事例紹介だけでは伝えられないコツや秘訣を伝える機会を提供したいという思いで、昨年度から模擬授業型 FD・SD ワークショップに取り組んでいる。AL 型授業実践集及びアクティブ・ラーナー記録集である『Teaching & Learning Catalog』作成取材において、AL ベストティーチャーの先生方からお聞きした授業実践の話のインパクトは大きく、その素晴らしく、きめ細かい授業実践を、より多くの教職員の方々に体感していただき、大学全体の共有の財産としたいという思いで、今回の FD・SD ワークショップが行われた。

今回の FD・SD ワークショップでも、昨年度に引き続き、模擬授業を通して、実際の授



業設計や学修評価のコツを学びたいという大学教員だけでなく、高校教員や専門学校教員の参加が見られ、当初の定員を大きく上回る参加者となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、来年度以降も、AL ベストティーチャーによる模擬授業型 FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。



図表V-3 AL ベストティーチャーワークショップ参加者アンケート結果



#### 4. 第11回・第12回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)

##### 【ラーニング・スキル開発】『プレゼンテーション入門講座～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ～』

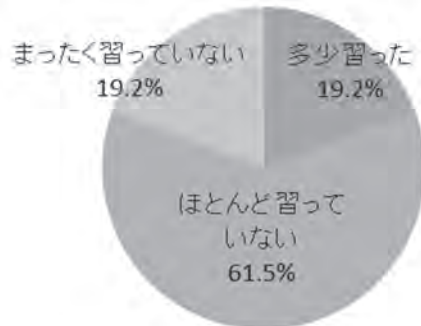
2018年10月31日(水)・11月5日(月)の2日間にわたって、第11回・第12回スチューデント・リーダープログラム(SLP)【ラーニング・スキル開発】『プレゼンテーション入門講座～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ!～』を開催し、学生・教職員計35名が参加した。両日とも、「放課後編」と称して夕方の時間帯に開催し、同じ内容で講習が行われた。今回のプログラムは、2016年度に実施した「初年次学生の学習意識調査」の結果を踏まえ、昨年度に引き続き、プレゼンテーションスキル養成に関する講座を企画し、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)が進める正課外教育プログラムの一環として開催された。

当日は、冒頭、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授より、今回の講座の到達目標とともに、新たに作成したプレゼンテーションスキルに関するループリックを示しながら、プレゼンテーションスキルにおいて重要な五つの観点について、趣旨説明を行った。その後、今回の講師である株式会社ジブンノオト代表取締役 大野 圭司氏より、プレゼンテーションの意味・型、さらにはプレゼンテーションのポイントとして知っておくべき重要な項目について、丁寧に分かりやすく説明があった。また、学生が提案したテーマに従って、45秒(第11回)または30秒(第12回)のプレゼンを行いながら、個々人のプレゼンテーションの良い点や改善点の指摘を受けたほか、少し長めのプレゼンテーションサンプルを通して、プレゼンテーションのコツや注意点について理解を深めた。

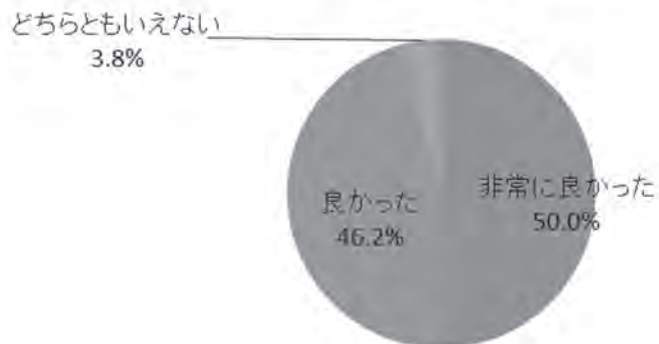
今回のプレゼンテーション入門講座では、1年生から3年生まで、多様な学部からの参加があったことが特徴として挙げられる。参加者が一様に、プレゼンテーションを通して、相手の心に語りかけることや自分自身が表れてくることを学びながら、プレゼンテーションスキルを磨くヒントを得ているように感じられた。参加者アンケートからは、日頃の授業でプレゼンテーションの基本的作法等をほとんど習っていないと回答する学生が目立ち、本講座の受講を通して「今までにない観点を知れて良かった」「能動的な学びができました」という声が聴かれ、満足度の高い内容となった。来年度以降も、開催時間等を考慮しながら、継続的に実施していく予定である。



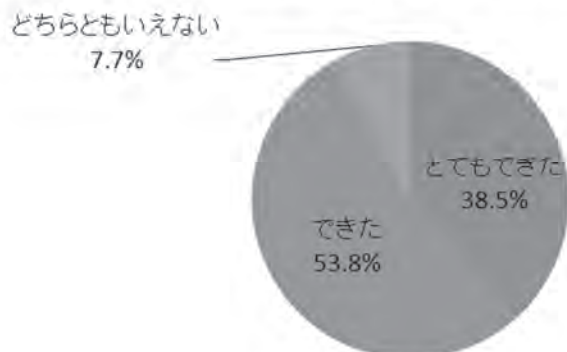
Q 大学の授業で、プレゼンテーションの基本的作法などについて習ったことがあるか(N=26)



Q SLPに参加した感想(N=26)



Q5 SLPで能動的な学びはできたか(N=26)



図表V-4 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP)  
第11・12回参加者アンケート結果

5. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) FD・SD ワークショップ『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは ～今、改めて学修成果の可視化について考える～』

日 時：2018年11月22日(木) 16:20～18:00

場 所：山口大学共通教育棟 15 番教室 (アクティブ・ラーニング教室)

参加者：37名 (学内13名 (教職員11名、学生2名)、学外24名 (教職員24名))

概 要：

16:20～16:25 開会挨拶・趣旨説明

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

16:25～17:35《事例紹介 & 話題提供》

「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」

江本 理恵 岩手大学 教育推進機構 准教授

「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」

鷹岡 亮 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター 教授

17:35～17:55 質疑応答・全体共有

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)  
FD・SDワークショップ

学生の学びを促す学修ポートフォリオとは  
～今、改めて学修成果の可視化について考える～

【趣 旨】  
山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) では、アクティブ・ラーニングの組織的推進とともに、汎用的能力に関する学修成果の可視化に取り組んでいます。また、近年、3つのポリシーの公表義務化や内部質保証の厳格化に伴い、学位プログラムにおけるディプロマ・ポリシーの達成度を測定・可視化する取組が各大学において進められています。  
これらの学修成果の可視化を通して、学生は自分自身の学びを振り返り、次なる学びに繋げて行くため、学修ポートフォリオの重要性が一層増えています。しかし、一方において、学修ポートフォリオの組織的な運用において、幾つかの課題を抱えているのが現状ではないでしょうか。  
今回のワークショップでは、学生の学びを促す学修ポートフォリオの活用方針に焦点を当て、実際の実践事例を紹介しながら、学修ポートフォリオの意義と価値を改めて考えてみたいと思います。

共通教育棟  
正門

日時	2018年11月22日(木) 16:20～18:00
場所	山口大学吉田キャンパス 共通教育棟1階・15番教室 (アクティブ・ラーニング教室)
対象	学内外の教職員 (定員 40名)

【申込方法】問合せ先  
件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属、職名(学年)、③E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (担当: YU-AP推進室)宛にて、11月20日(火)までご連絡ください。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)  
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

Portfolio

【概 要】

16:20～16:25 開会挨拶・趣旨説明

16:25～17:35《事例紹介 & 話題提供》

「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」  
江本 理恵 岩手大学 教育推進機構 准教授

「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」  
鷹岡 亮 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター 教授

17:35～17:55 質疑応答・全体共有

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

「学修ポートフォリオ」とは・・・学生が、学修過程ならびに各種の学修成果(例えば、学修目標・学修計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や進行状況、レポート、成績単位取得表など)を長期にわたって収集し、記録したもの、それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけて、ステップアップを図るという学生自身の自己省察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させることを目的とします。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用されます【文科省2012】。

## 内 容：

2018年11月22日（木）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）FD・SDワークショップ『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは ～今、改めて学修成果の可視化について考える～』が、学内外から大学関係者だけでなく、高等学校関係者を多数集め、計37名（学内13名（教職員11名、学生2名）、学外24名（教職員24名））の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟15番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。

冒頭、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より開会挨拶があり、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、汎用的能力に関する学修成果の可視化に取り組むとともに、3つのポリシーの公表義務化や内部質保証の厳格化に伴い、学位プログラムにおけるディプロマ・ポリシーの達成度を測定・可視化の取組を進めている。これらの学修成果の可視化を通して、学生は自分自身の学びを振り返り、次なる学びに繋げて行くため、学修ポートフォリオの重要性が一層増しているが、学修ポートフォリオの組織的な運用において、幾つかの課題を抱えており、先進事例紹介等を通して、学修ポートフォリオの意義や価値について改めて考えてみたいとの趣旨説明があった。

まず、江本 理恵 岩手大学教育推進機構 准教授より、「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」と題して、岩手大学での先進事例について紹介があった。岩手大学では、教育の内部質保証システムの構築・充実を図る観点から、「アイフォリオ」と称するポートフォリオシステムを開発し、ディプロマ・ポリシー（DP）達成度の可視化、カリキュラムポリシーに基づくDPに関する自己評価チェックリストの運用のほか、学期ごとに学修状況（授業外の学修時間等）に関する自己評価調査を行う環境を全学的に整備し、運用している状況について説明があった。さらに、このような環境整備のもと、教学データの蓄積を通して、DP達成度状況の経年変化や平成28年度以降のカリキュラム改善前後の学修状況の変容などを分析し、学部でのFD活動に活かしているとの説明があった。



次に、鷹岡 亮 山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授より、「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」と題して話題提供があり、教育学部での授業実践における省察活動の各種紹介を踏まえながら、省察における動画や写真を参照することの有用性について説明があった。さらに、省察を行う際の観点の提示や省察活動の評価のあり方について説明があった。





後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を記入していただいた後、ペアワークの形式で短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、岩手大学人文社会学部での学修ポートフォリオの運用の具体や学修ポートフォリオに基づく修学指導の主担当・副担当におけるシステム上の設定の仕方、さらには、学修ポートフォリオを有効に活用した省察活動のあり方など、具体的な質問が多数あり、各機関において学修ポートフォリオの開発・運用が喫緊な課題となっていることが窺えた。このほか、学修状況調査のデータ分析に関する詳細を確認する質問もあり、教学データ分析の活用やその説明のあり方など、教学 IR に関して参考となる知見を得ることができた。

今回の FD・SD ワークショップでは、岩手大学 江本先生から多くの情報提供をいただいたことに改めて感謝申し上げたい。ディプロマ・ポリシー達成度の可視化の取組を進める山口大学にとって、大変有意義な機会となった。そして、学修成果の可視化の取組について、学生のため以前に、FD のために有効かつ必要であると力説された江本先生の言葉が印象的であった。

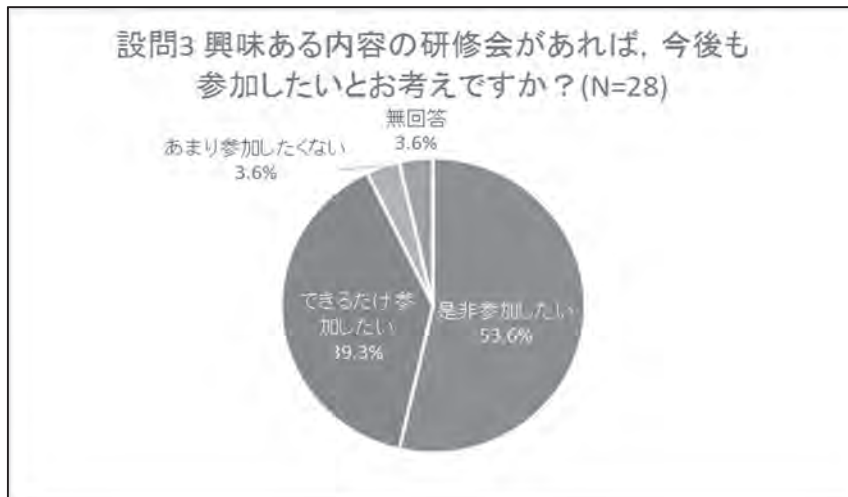
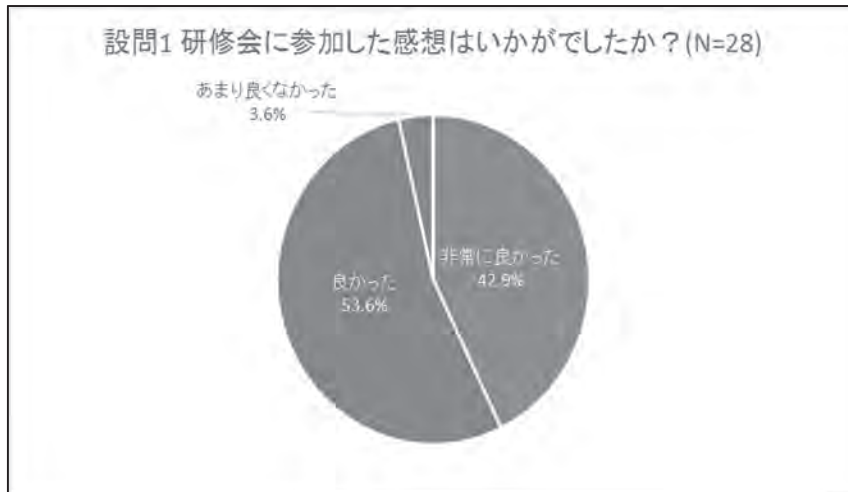
#### まとめ：

山口大学では、学修到達度調査・学修行動調査の 1 年次・3 年次によるパネル調査実施、DP 達成度を可視化する YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) の全学展開など、学修成果の可視化に取り組んでいる。今回、事例紹介いただいた岩手大学の事例は、そのような本学の取組に大きく資するものであり、今後の取組に最大限活かしていきたい。また、教学 IR の取組にも目を見張るものがあった。

さらに、学修成果の可視化の先にある学習者自身の省察活動の大事さについても話題提供を通して多くの示唆を得ることができた。今後の FD 活動において重視していきたい観点である。

今回の FD・SD ワークショップでは、学内教員はもとより、大学リーグ加盟機関の高等教育機関や高等学校からの参加が多く、関心の高さを示す結果となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、「他大学の良い事例にふれることができた」「本学でも使える具体的な例を得ることができた」というコメントがあった。今後とも、学修成果可視化をテーマとした FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。





図表V-5 FD・SDワークショップ参加者アンケート結果



## 6. 大学マネジメントセミナー2018 in やまぐち『地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2 ～新しい時代における大学マネジメント～』

日 時：2018年12月17日（月）14:30～16:30

場 所：吉田キャンパス・大学会館2階会議室

参加者：91名（うち、学内67名、学外24名）

主 催：大学リーグやまぐち、山口大学

共 催：大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会

概 要：14:30～14:40 開会挨拶・趣旨説明

山口大学長 岡 正朗

14:40～15:15 基調講演（1）

「輝け大学、輝け！大学人」

沖縄科学技術大学院大学副学長（財務担当） 高梨 桂治 氏  
（元・福井大学理事・副学長）

15:15～15:50 基調講演（2）

「大学人としての『生きがい』『やりがい』とは」

梅光学院大学副学長（教学担当） 各務 正 氏  
（元・順天堂大学・部長）

15:50～16:25 シンク・ペア・シェア（意見交換・全体共有）

16:25～16:30 クロージング & 閉会挨拶

山口大学理事・副学長 田中 和広

[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

### 内 容：

2018年12月17日（月）に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2018 in やまぐち『地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2 ～新しい時代における大学マネジメント～』を、学内外から91名の参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、大学リーグやまぐち、山口大学の共同主催、大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会の共催で、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、岡 正朗 山口大学長より開会挨拶があり、2017年度からSD（スタッフ・ディベロップメント）の義務化に加え、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、従来のSDセミナーを大学マネジメントセミナーと改称して開催する趣旨が述べられ、例年同様、所属大学を超えた大学関係者の議論や情報交流に期待が寄せられた。

基調講演では、まず、高梨桂治 沖縄科学技術大学院大学副学長（財務担当）より、「輝け大学、輝け！大学人」と題して講演があった。世界大競争時代である21世紀における日本の大学の役割について経済学の視点を交えながら説明があり、これからの時代は新たな価値を創造する人材が必要であり、そのために、大学は新たな価値を創造する「成長エンジン」製造工場にならないといけないと力説された。さらに、データから見る日本の大学の現状として、大学に投じられている国家予算の少なさや海外との研究資金規模の格差など

を紹介しながら、今日の大学が国家や社会から信頼を得られない悪循環を引き起こしており、今後の大学にとっては、如何に学生をもっと知的に鍛えるかが信頼性獲得のカギになると指摘された。大学は従来の「コストセンター」から「バリューセンター」に転換する必要があると指摘された。最後に、これからの大学職員の果たすべき役割と大学職員への期待として、大学教員と切磋琢磨しながら、大学経営や大学教育の本質を見極め、質を高めることに貢献できる人材になってほしいとエールを送られた。国内外の情勢を踏まえながら、大学が、大学職員が何をすべきかを明確に指摘され、参加者にとって示唆に富む講演であった。

次に、各務 正 梅光学院大学副学長（教学担当）より、「大学人としての『生きがい』『やりがい』とは」と題して講演があった。冒頭、『生きがい』『やりがい』というと、個々人の自己満足と表裏一体のところがあり、その点を踏まえながら、自分自身のこれまでの大学人としてのポートフォリオを披露するようにお話したいとの前置きがあった。順天堂大学時代に、医学部教員から医学教育改革をせよとの指令があり、当該学部のミッションづくりをした経験が披露された。この経験を経て、入学定員増や国家試験合格率アップ、さらには大学院教育改革の施策に携わるようになった。授業風景が荒んでいる時代に、そこで学んでいる学生のモチベーションは大学マターなのか、学生個人マターなのかを考えるようになったという話があった。大学人として、それぞれの役割があり、その枠を自覚しながら、一人一人のガバナンスをできることが大切だと力説された。最後に、“Ability to Inspire Others”という言葉を示し、如何に人を動かすことができるかが大事であり、その中でアウトカムを生み出す人材になってほしいとエールを送られた。長年のキャリアを踏まえながら、大学人としてあるべき生き方や考え方を参加者に訴えかける講演となった。

後半では、林 透 大学教育センター准教授の全体進行のもと、シンク・ペア・シェアという手法で、講師 2 名の基調講演について、まずは個人での振り返りを踏まえながら、ペアワークで対話した後、講師との質疑応答を通して全体共有を行った。参加者からは、「知的に鍛えるとは、どのような力を身に付けさせたらよいのか」「これからの時代の研究支援や学生支援のあり方、その際の大学職員の対応の仕方はどのようにあるべきか」「大学職員の理想の姿とはどんなものか」といった質問があった。講師 2 名からは、大学教育では単位制を担保した授業運営が基本であること、旧来のフンボルト型の大学観を脱却して新しい価値観でもって大学経営や大学教育に当たることが大切とのコメントがあった。

最後に、田中和広 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学関係者が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



基調講演①（沖縄科学技術大学院大学 高梨氏）

基調講演②（梅光学院大学 各務氏）



シンク・ペア・シェア風景



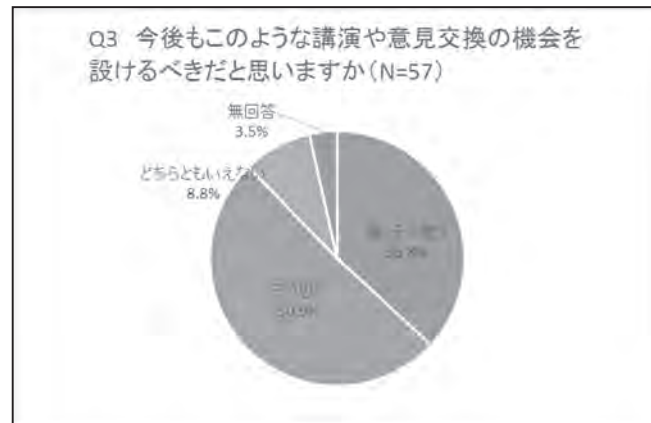
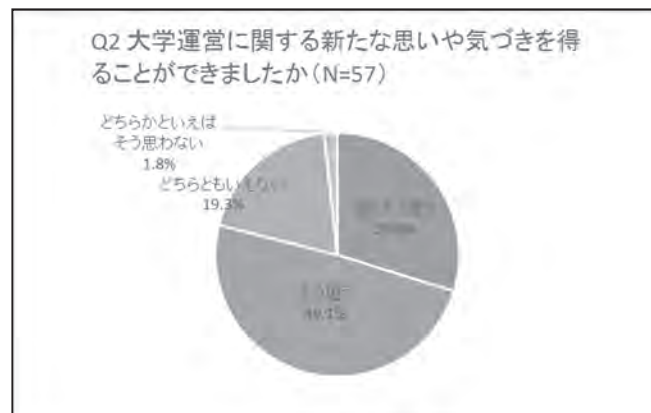
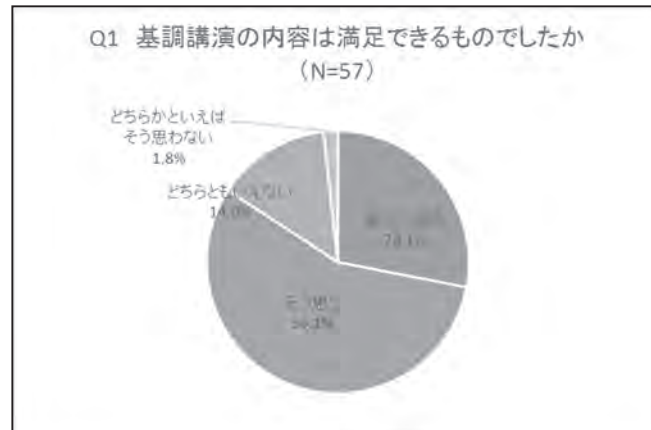
全体集合写真

### 成果及び今後の方向性：

今回の基調講演では、大学マネジメントの経験豊富な講師 2 名を招聘し、大学や大学人の本質、大学における人材育成の意義や価値について、分かりやすく、かつ、説得力あるお話をいただいた。これまでになく、本質論に迫る中味の濃いものとなり、新しい時代の大学マネジメントを考えるにふさわしい内容となった。

参加者アンケートでは、基調講演の満足度が 84.2%（「強くそう思う」「そう思う」）を占め、大学運営に関する新たな思いや気づきを得た参加者が 9 割近く、さらには継続的な開催を望む参加者が同じく 9 割近くを占めた（下表 Q1～Q3 参照）。自由記述において、「若手職員にぜひ参加させたい」という要望が複数あり、若手・中堅職員にもっと参加いただけるように工夫を凝らしていきたい。

「大学リーグやまぐち」が結成されてから 2 年の月日が経つ中で、山口県内の高等教育機関同士、さらには、県外の高等教育機関の関係者との交流を得ながら、大学マネジメントセミナーの更なる充実を図っていきたい。



図表V-6 大学マネジメントセミナー参加者アンケート結果

## 7. 2018 ラーニング・アドバイザー養成講座(第1～2回)

日 時：2019年1月25日(金) 13:30～17:00、2019年2月15日(金) 13:30～17:00

場 所：吉田キャンパス・大学会館2階会議室

対象者：山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関の事務系職員

(学習支援に関わる教員・学生も参加可)【各回定員15名】

### 到達目標：

- (1) 大学における学習支援の重要性について理解し、説明することができる。
- (2) 学習支援者に必要なスキル・態度について修得し、活用することができる。
- (3) 学習支援者としての目標を定め、実践することができる。

### 概 要：「第1回(知識理解編)」

13:30～14:00 開会挨拶・趣旨説明・チェックイン

14:00～14:30 「学習支援の専門職化

～千葉大学アカデミックリンクセンターの取組から～

千葉大学アカデミックリンクセンター特任助教 我妻鉄也

14:30～15:00 「学習支援の実際と効果

～同志社大学ラーニング commons の取組から～

同志社大学 学習支援・教育開発センター准教授 浜島幸司

15:10～16:40 「みんなの学習支援の課題について話してみよう！」

(※所属機関・部署における学習支援に関する課題抽出)

ファシリテーター：

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

コメンテーター：同志社大学 浜島幸司 先生

千葉大学 我妻鉄也 先生

16:40～17:00 クロージングと次回に向けたレポート課題提示

(レポート課題は①自分が携わっている学習支援の取り組み内容、  
②学習支援に関する充実方策提案(組織レベルと個人レベル)で、  
それぞれ1,000字以内でまとめること。)



第1回オリエンテーション 山口大学 林



第1回事例紹介 千葉大学 我妻先生





第1回事例紹介 同志社大学 浜島先生



第1回グループワーク



第1回グループ発表



第1回講師を囲んでの集合写真

「第2回（スキル修得編）」※講師 同志社大学 浜島幸司先生、山口大学 林 透

2019年2月15日（金）13:30～17:00

13:30～14:00 前回の振り返り・アイスブレイキング

14:00～15:30 「学習支援に必要なコミュニケーションスキルを学ぼう！」  
レクチャー及びグループワーク

（休憩）

15:40～16:30 まとめと振り返り・質疑応答

振り返りシート記入、グループ共有、質疑応答

16:30～17:00 チェックアウト・修了式





第2回講師 同志社大学 浜島先生



第2回 アサーショントレーニングの一コマ



第2回 アサーショントレーニングの一コマ



福田副学長から認定証授与

## 内 容：

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援について重要性が増しており、授業内外における教員による学習支援に加え、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、事務職員や学生がその役割の一端を担っている。しかし、近年の学生の多様化に伴い、当該学生への指導助言に苦慮する場面も見受けられる。このため、可能かつ適切な範囲において、柔軟かつ積極的な学習支援ができる人材（「ラーニング・アドバイザー」）が必要となっている。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を昨年度（2017年度）より企画実施しており、昨年度の好評を受け、今年度は対象を山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関に広げ、研修内容を改善充実して実施した。

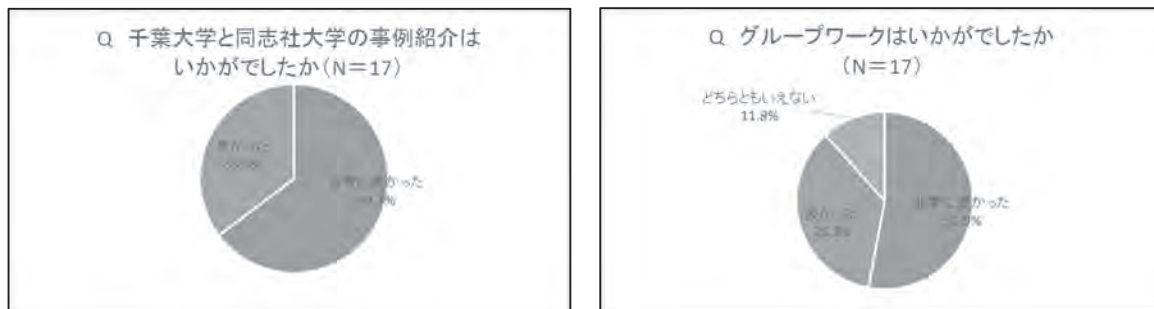
今年度は、2回シリーズとして、山口大学吉田キャンパス共通教育棟2階会議室を会場に、1月25日（金）に開催された第1回（知識理解編）では17名（職員14名、教員3名）、2月15日（金）に開催された第2回（スキル修得編）では14名（職員10名、教員3名、学生1名）、延べ31名の参加があり、山口県立大学、徳山大学からの参加者があった。また、昨年度を超える13名の受講生が修了要件を満たし、「ラーニング・アドバイザー認定証」を授与された。

第1回（知識理解編）では、千葉大学アカデミックリンクセンター 我妻鉄也 特任助

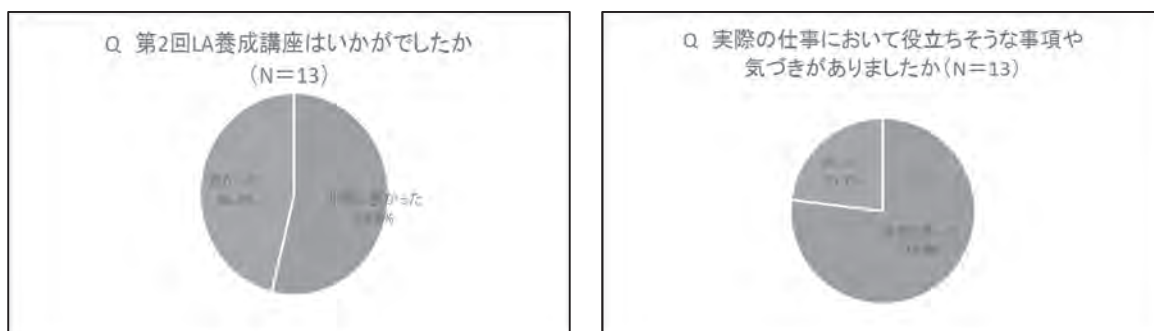
教、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授から学習支援の専門職化やラーニングコモンズにおける学習支援の実際や効果について事例紹介をいただき、先進情報を学んだ。後半のグループワークセッション「みんなの学習支援の課題について話し合ってみよう！」では、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授のファシリテーションのもと、4グループに分かれて、学習支援者としての「今」を見つめ、学習支援者としての「未来」を思い描き、学習支援の「今」と「未来」を比較して組織レベル・個人レベルで足りないもの、必要なものをリストアップして模造紙にまとめる（見える化する）ワークを行い、全体共有・発表を行った。学習支援の専門職の必要性や学生の自主性を引き出すようなコミュニケーションの工夫、学習支援に関わる組織間の連携などの共通の課題が浮き彫りとなった。

第2回（スキル修得編）では、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授のファシリテーションにより、学習支援のために必要なコミュニケーションスキルとして、「リフレーミング」「オープンクエスチョン」「アサーション」の意義を理解しながら、ペアによるロールプレイングを行って、実践的スキルを体得した。特に、最後の「アサーション」の演習では、受講生全体の前でロールプレイングする機会を設けて、良かった点・改善点を確認し合った。

今回のラーニング・アドバイザー養成講座では、新たにレポート課題を課すことで、受講生個々人が学習支援に対してどのように取り組み、どのような課題を抱えているかを自分自身で振り返るとともに、受講生全員で見直す機会を設けることができたことは大きな収穫であった。また、2回それぞれに行った受講者アンケートにおいても満足度が高く、有意義な機会設定ができたように思われる。今年度の実績を踏まえながら、来年度以降の研修内容を更に充実させていきたい。



図表V-7 第1回 LA 養成講座参加者アンケート結果



図表V-8 第2回 LA 養成講座参加者アンケート結果

8. 山口大学 共育ワークショップ 2019「多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは  
～高大接続・社会接続の観点から～」

山口大学・共育ワークショップ 2019

# 多様化社会において 必要とされる コンピテンシーとは

～高大接続・社会接続の観点から～

3/14 2019. 13:30-17:00 木

多様化社会において、大学教育・学校教育は大きく変わろうとしています。アクティブラーニング、探究学習において、どのようなコンピテンシーを鍛え、身に付けるべきなのでしょうか。高大接続・社会接続の観点から、「巻き込む力」「探究する力」に焦点を当て、多様なステークホルダーからのメッセージとともに、参加者みんなで考え、共に育む機会としたいと思います。なお、本イベントは、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業成果交流会の一環として開催いたします。

**会場** 山口大学吉田キャンパス 大学会館 2階会議室

- 対象：大学関係者（教職員・学生）、高等学校関係者（教員・生徒）、企業・行政関係者（ほか（参加無料）
- 主催：山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)

13:30-13:40 開会挨拶・趣旨説明

13:40-14:10 北尾 洋二（株式会社ザメディアジョン・リージョナル代表取締役 / 内閣官房 地域活性化伝道師）

「『巻き込む力』を育むには ～企業家（起業家）からのメッセージ～」

14:10-14:40 溝上 広樹（熊本県立熊本北高等学校 教諭 / アクティブラーニング型授業研究会くまもと 代表）

「『探究する力』を育むには ～高等学校現場からのメッセージ～」

14:40-14:55 林 透（山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授）

「山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) からのメッセージ」

[ 休 憩 ]

15:05-16:50 SDGs カードによるワークショップ

ファシリテーター：中川 耕治（学校法人 広島城北学園 広島城北中・高等学校 教頭）  
越 希美江（Communication Lab. Beyond words 代表）

「2030年多様化社会を見つめ、必要とされるコンピテンシーについて考えてみよう!」

16:50-17:00 クロージング・閉会挨拶

「お申込み方法」  
3月12日(火)までに、YU-APホームページの「案内ページ」よりお申込ください。  
<http://www.yuap.oue.yamaguchi-u.ac.jp/workshop2019>

YAMAGUCHI UNIVERSITY 山口大学

●お問い合わせ  
大学教育機構 大学教育センター (YU-AP 推進室)  
TEL : 083-933-5261 E-mail : [yuap@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:yuap@yamaguchi-u.ac.jp)



## 多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは

～高大接続・社会接続の観点から～

多様化社会において、大学教育・学校教育は大きく変わろうとしています。アクティブラーニング、探究学習において、どのようなコンピテンシーを鍛え、身に付けるべきなのでしょう。

高大接続・社会接続の観点から、「巻き込む力」「探究する力」に焦点を当て、多様なステークホルダーからのメッセージとともに、参加者みんなで考え、共に育む視角としたと思います。

なお、本イベントは、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業成果交流会の一環として開催いたします。

### ●基調講演 (1)

## 「『巻き込む力』を育むには ～企業家 (起業家) からのメッセージ～」

北尾 洋二 (株式会社ザメディアジョン・リージョナル 代表取締役 / 内閣官房 地域活性化伝道師)

21世紀も20年近くが経過し、科学技術の進展により世界的に生活・文化水準が向上し、価値観が多様化したことで、共有や共感といった「分かち合うこと」「互いを理解すること」が複雑になってきています。ある一方では、世代や地域を越えて、インターネットを活用したシェアリングエコノミーといった「シェア」の概念で、それは容易になりました。またある一方では、複雑化により世代間交流が分断され、統一的な(アイドル的な)象徴やムーブメント、共有や共感は得られ難くなりました。この両方を繋ぎ止めることができるのが「巻き込む力」です。「高大接続・社会接続」の観点から、現代社会が希求する「巻き込む力」についてお話させていただきます。



#### プロフィール

ひとづくりからの地域づくりをテーマに、キャリアマネジメントからのアプローチによる創業・スタートアップ支援専門家。また、Jターンにおける、地方に拠点を置く企業やベンチャー企業に対する採用支援、起業支援、資金調達支援も、自治体や地元金融機関と共同して推進。政府・内閣官房より、日本初の地域経済分野における「地域活性化伝道師」に任命される。2017年7月、下関市・唐戸商店街に「創業支援カフェ KAPASTA (カラスト)」を開業し、代表兼インキュベーションマネージャーに就任。2018年9月、下関駅前・グリーンモール商店街に「空き店舗のマッチングステーション GRESTA (グリスタ)」を開業。大分県立芸術文化短期大学 講師 (非常勤)。

### ●基調講演 (2)

## 「『探究する力』を育むには ～高等学校現場からのメッセージ～」

溝上 広樹 (熊本県立熊本北高等学校 教諭 / アクティブラーニング型授業研究会くまもと 代表)

授業づくりや組織づくりの原動力は、生徒達に学ぶことを楽しみながら力を伸ばし、自らを発揮しながらイキイキと生きて欲しいという願いです。そこで、探究学習が果たす役割の大きさを強く感じています。アクティブラーニング (AL) に取り組む前は、ミニ課題研究を行っていました。その後、毎日の習得型の授業において、主体的に学びを深める方法を探る中で、ALに出会い、日々研究と実践を進めてきました。これから高校で探究活動が始まることを歓迎する一方で、円滑な実施については心配もしています。今回の登壇では、SSH校での経験も踏まえ、高校現場の状況をお伝えし、新しい教育を地域から作っていくキッカケになればありがたいです。



#### プロフィール

教員歴10年目で、現任校は2年目。大学院では、植物生理学の研究室において、昆虫学・生理学など複数の観点から昆虫・植物相互作用について独自に研究を行い、博士号 (理学) 取得。5年前にアクティブラーニング型授業研究会くまもとを立ち上げ (代表)、地元や全国の学びの仲間とともに日々授業研究を行っている。この成果は、授業づくりに反映させるとともに、日本生化学会誌など各種雑誌や国際会議 (IAEVC)、研修等で発表。校内ではSSH研究部と高大接続改革検討委員会に所属し、2ヶ月に1度の校内ワークショップを通して、現場における研究実践を進めている。生物部顧問として、生徒の探究活動を支援し、ハイオ甲子園 2018 優秀賞 (2位)、日本植物学会では「特別研究奨励賞」を受賞。

### ●事業成果報告・発信

## 「山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) からのメッセージ」

林 透 (山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授)

2014年度に、文部科学省・大学教育再生加速プログラムに採択されて以降、本事業は5年間の歳月を経てきました。この5年間という月日を通して、大学教育を取り巻く環境は劇的に変化してきました。学内におけるアクティブラーニング型授業の推進を起點とした。学生の「学びの好循環」を創出するだけでは不十分な時代となってきました。学習者の学びを第一に考えたとき、学習者の目が輝き、充実感に満たされるのは、学習した知識・技能が社会との接点で活かされたとき、評価されたときなのでないでしょうか。

今や、大学教育が提供する授業科目やカリキュラムは、高大接続・社会接続の観点から、多様なステークホルダーとの協働を通して育まれる必要が生じています。そんな時代の変化を踏まえながら、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) が目指す方向性や現在の成果を報告・発信します。



### ●SDGs カードによるワークショップ

#### ファシリテーター

中川 耕治 (学校法人 広島城北学園 広島城北中・高等学校 教頭)

カードゲーム「2030 SDGs」は「なぜSDGsが私たちの世界に必要なのか。そして「それが存在することによってどんな変化や可能性があるのか」を体系的に理解するためのゲームです。さまざまな価値観や違う目標を持つ人がいる世界で、我々はどうやって「誰も置き去りにしない」世界を実現していくのでしょうか。

SDGsで描かれる2030年の世界から「今」を考えるとともに、「世界はつながっている」そして「私も起点」ということを感じてみましょう。



#### ファシリテーター

越 希美江 (Communication Lab. Beyond words 代表)

私は以前、市役所に勤務していました。担当していたのは、地域の救急医療施策。地域医療を維持するには、行政・病院・大学、そして市民、多様なステークホルダーとの協働が欠かせません。その時に教えて貰った言葉が、「協働とは、今日、どうって、言葉掛けができる関係性を作っていくことだ。」多様化社会の中、様々な価値観を持つ人々が関係性を築き協働して課題を解決するためには、どんなことが必要でしょうか。2030SDGsカードゲームから体感頂ければと思います。



## VI. 事業成果報告





## 1. チーム AP 合宿 分科会 A

分科会〔A〕報告書

**担当校**

山口大学（大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透）

**登壇者**

- 1 宇都宮大学 基盤教育センター助教 桑島 英理佳  
「学生との協働による大学教育や学生の学びの充実の事例紹介」
- 2 関西国際大学 キャリア支援課長 藤井 学  
「企業インターンシップでのチューニングを通じた事例紹介」
- 3 阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 教授 松本 高志  
「COOP 教育を中心とした企業との協働教育の事例紹介」
- 4 長崎短期大学 国際コミュニケーション学科 講師 園田 靖  
「地域との協働による大学教育の事例紹介」
- 5 広島県立油木高等学校 教頭 池田 文秀  
「大学不在地域における高等学校の取組紹介」

**企画の主旨**

これからの大学教育は、正課教育・正課外教育の垣根を超えて、ステークホルダーとの協働、ステークホルダーからの信頼なくして成り立たないでしょう。そんな多様化する大学教育の現在を見つめ、未来を展望したいと思います。学生、地域、産業界、高等学校との協働に取り組む事例を紹介しながら、ゲーム方式によるミニワークを通して、ステークホルダー協働による大学教育のカタチを参加者みんなで楽しく考えてみたいと思います。

**当日の企画の流れ**

10:00～10:05 オープニング

10:05～10:30 ショートトーク「学生、地域、産業界、高等学校と協働した大学教育の事例紹介」

10:30～11:20 カードを使ったミニワーク「ステークホルダー協働による大学教育のカタチ」

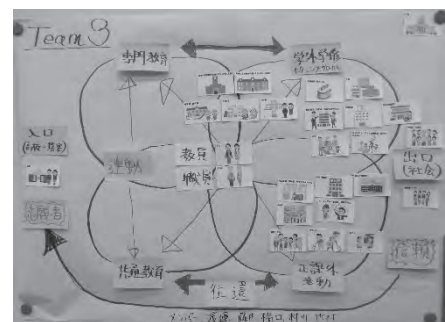
11:20～11:30 クロージング

**グループワーク／ディスカッションの結果（グループワークの成果／主な質問・意見等）**

前半の「学生、地域、産業界、高等学校と協働した事例紹介」を踏まえながら、後半のミニワークでは、参加者が 5 グループに分かれ、ステークホルダーをデザインしたカード 20 数枚を使って、大学教育とステークホルダーとの関係図を描き、その内容を発表しました。ステークホルダーの役割として、大学教育の担い手、大学を信頼するパートナー、大学教育の評価者など、多様な捉え方が披露されました。

**企画を終えての担当のまとめ**

約 1 時間半という限られた時間の中で、5 つのショートトークとミニワークを行うという盛り沢山の内容でしたが、ミニワークでは示唆に富む成果物が生まれ、多くの収穫がありました。



**チームAP合宿2日目  
分科会A**

**ステークホルダー協働による大学教育のカタチ**

～これからの大学教育、どのカードを使ってカタチにしていますか？～

2018.9.11@神石高原ホテル

山口大学、宇都宮大学、関西国際大学、  
阿南工業高等専門学校、長崎短期大学、  
広島県立油木高等学校

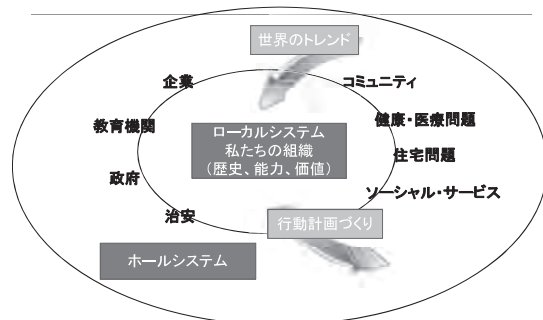
**分科会Aのねらい**

- ①「チームAP合宿」  
基調講演・学長対談 ⇒ グループワーク ⇒ 全体発表  
を通したAP事業テーマを超えた対話・協議に  
役立てていただくこと。
- ②「通」の議論になりがちなAP事業取組と社会との接点を  
意識づけること。
- ③「ステークホルダー協働による大学教育のカタチ」を、  
みんなでデザインし、可視化してみることに。

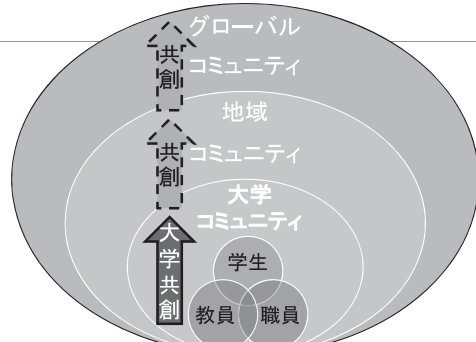
**大学(短大・高専)教育にとっての  
ステークホルダー？**

- 政府、●自治体(都道府県・市町村)、●金融機関(銀行など)
- 企業、●経済団体(同友会・青年会議所など)、●商店街、●カフェ
- 医療機関、●社会福祉施設、●防災機関(消防署・防災センターなど)
- NPO、●ボランティア、●地域コミュニティ・地縁組織(自治会・町会など)
- 住民・市民、●アーティスト(芸術家・音楽家など)
- 卒業生・同窓会、●保護者・PTA
- 学生、●留学生
- 幼稚園・保育園、●小学校、●中学校、●高校
- 国内の高等教育機関(大学・短大・高専) etc.

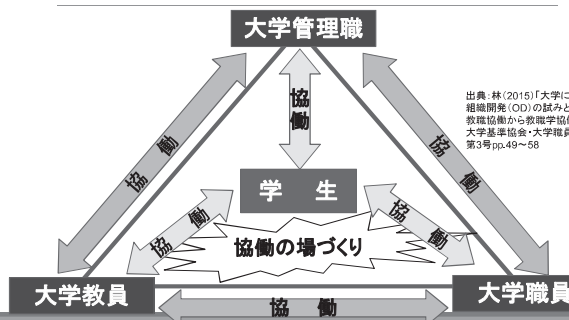
**「みんなで考え、アイデアをかたちにする！」  
ホールシステム・アプローチという概念**



**大学共創⇒地域共創⇒グローバル共創**



**大学組織における教員・職員・学生  
(教職学協働の基本フレーム)**



出典: 林(2015)「大学における  
組織開発(OD)の探みと課題～  
教職協働から教職学協働へ～」  
大学基準協会「大学職員総論」  
第3号pp.49～58

## ステークホルダーと協働した 教育実践の数々・・・

学生発案型授業

チューニング

高校魅力化  
プロジェクト

COOP教育

サービス  
ラーニング

6

## 今日のお題

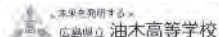
- ①ショートトーク(5事例)を参考にしながら、  
大学(短大・高専)教育のカリキュラムとステークホルダー  
の関係図をデザインしてみよう！
- ②AP事業での取組を関連付けながらデザインしてみよう！
- ③未来思考で、「ここあったらいいな」という理想の関係図を  
デザインしてみよう！
- ④可能な限り、全体的な、包括的な関係図に仕上げてみよう！

7

## ありがとうございました



大学教育再生加速プログラム



Contact me : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp



**AL型授業設計やルーブリック活用等に関するFD**

**★AL型授業設計やルーブリック活用をテーマとしたFD・SDワークショップ**

(1) 第1回FD・SDワークショップ(2017年9月)  
ALベスティチャーによる模擬授業型ワークショップ

(2) 第2回FD・SDワークショップ(2017年11月)  
ルーブリックの作成のコツやモデレーションの意義や方法を学ぶワークショップ

**★学内全部局での教育改善FD研修会(2017年度)**  
テーマは、3つのポリシー改訂後のカリキュラム・マップ及びカリキュラム・フローチャートの見直しに向けた説明とミニワーク

**教学マネジメントや学修支援の強化のためのSD**

**★教学マネジメント強化をテーマとした全学的SD**  
大学リーグやまぐち・山口大学主催  
大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち  
『今、改めて考える“教職協働” ～地方大学の魅力発信と大学間連携～』(2017年12月)  
テーマは、教職協働、地方大学の魅力発信、大学間連携  
県内初の高等教育機関同士によるポスター発表

**★ラーニング・アドバイザー養成講座**  
YU-AP事業が目指す『学びの好循環』を充実させるため、学生の学びによる成長を支えるラーニング・アドバイザーを事務職員を対象に養成。  
(2017年11月～2018年1月)  
今回、8名の事務職員に「ラーニング・アドバイザー認定証」を授与。

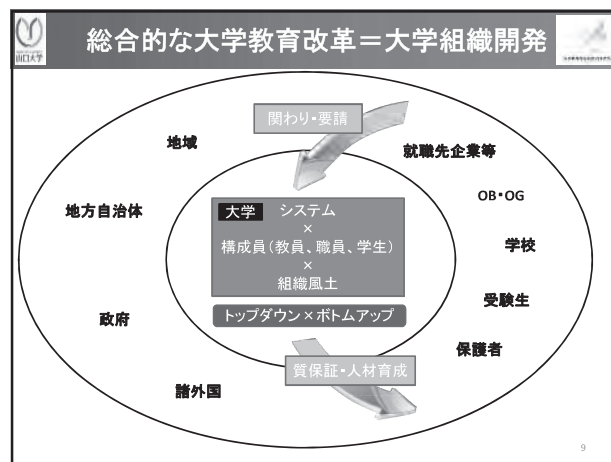
**教職学協働による組織的対話 (OD)**

**共育ワークショップ2018 (2018年3月)**

**学生FDサミット2017春 (2017年3月)**

山口大学 共育ワークショップ  
みんなで教育 互恵について語ろう!  
～大学と高等学校による教育連携～  
3月15日(日) 14:00-17:00

学生FDサミット2017春  
山口大学  
Borderless Campus  
～学びのフィールドはどこにある?～  
17/3/2(木)



**【トピック1】  
YU-AP事業における『3つのEdge』**

10

**【Edgeその1】  
ALポイント認定制度**

11







【ステップ3】  
ALベストティーチャー表彰(2016年度～)

第2回受賞者  
(5科目・14名)

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
基礎ゼミナー	基礎ゼミナー	薬理科学研究所 准教授	井内 貴仁
山口と世界	山口と世界	薬理科学研究所 助教	藤野 寛隆
情報/ナラー-演習	情報/ナラー-演習	大学教育機構 講師	三上 秀樹
真の学び	日本語習得	薬理科学研究所 教授	河原 祥
		薬理科学研究所 教授	仁平 幸恵子
		薬理科学研究所 教授	松澤 聖孝
		薬理科学研究所 教授	横山 和洋
		大学教育機構 教授	黒野 純一
		薬理科学研究所 教授	松野 健二
		薬理科学研究所 教授	芥川 典也
演習・実験・実習	生物実験	薬理科学研究所 教授	伊藤 弘行
		大学教育機構 教授	高橋 智之
		薬理科学研究所 教授	室前 清文

【ステップ4】  
『Teaching & Learning Catalog』(2016年度～)

【ステップ4】  
模擬授業型ワークショップ(2017年度～)

2017年9月、ALベストティーチャーによる模擬授業型ワークショップを初開催し、AL型授業のコツや注意点を体得する機会を提供した。学内外から52名の参加者があり、後半の全体協議では、若手教員や高校教員から実践のための具体的な質問が数多くあった。参加者からは「学習者の興味を呼び起こすための教員の関わり方」、「真の学び」に結び付ける授業設計、配布資料の創意工夫など、AL型授業に活かす気づきを得たとの感想が多く寄せられた。

【Edgeその2】  
コモンルーブリック開発

『山口と世界』コモンルーブリック開発  
ワークショップ(試作⇒開発⇒活用⇒検証・充実)

①試作  
②開発  
③活用  
④検証・充実

『山口と世界』コモンルーブリック

『山口と世界』コモンルーブリック

項目	内容	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
実施する	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。
ほぐす	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。
伸ばす	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。
活かす	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。
検証	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。	山口と世界に関する授業計画を、事前に共有し、授業中にも活用する。

## ルーブリックを活用した学修評価の普及

文部省調査(大学における教育内容等の改革状況調査(H26年度))  
ルーブリック普及率8.4%

★新しい共通教育の検証に関するアンケート調査(2016年11~12月実施:N=449)

【期待される検証結果について、ルーブリックを適用されているか】

ルーブリックの活用状況	期待される検証結果について、ルーブリックを適用されているか
適用している	適用している
適用していない	適用していない
検討中	検討中
検討していない	検討していない

24

# 【Edgeその3】 学生参画(学生協働)

25

## 主体的な学びの場づくりの素地

- おもしろプロジェクト【正課外教育プログラムの先駆け】  
(1996年から20年以上の歴史)  
正課外におけるPBL学習のモデル
- 図書館学生協働活動  
(10年以上の歴史)  
今年度、国立大学図書館協会賞  
山口大学と島根大学で合同で始めた  
「学生協働交流シンポジウム」が地域を超えて全国展開

26

## 教育理念に基づいた学生参画型FD

- 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」  
(現在の山口大の原点は廣中イズムにあり)  
(『廣中レポート』を参照した全国的な学生FDの潮流)
- 共育(共にはぐくむ)の精神  
(前・教育学生担当理事が起草者)

AP事業における先駆的取組として波及

27

## 共育ワークショップという「場」

山口大学 共育ワークショップ2014  
「みんなが山大的教育(共育)について語ろう!」

28

## Our Road

学生FDサミット 2014春 (東洋大学)

学生FDサミット 2014夏 (京都産業大学)

\*See2014 (岡山大学)

関門サミット (九州共立大学)

AP推進フォーラム (横浜国立大学)

学生FDサミット 2015夏 (追手門学院大学)

\*See2015 (岡山大学)

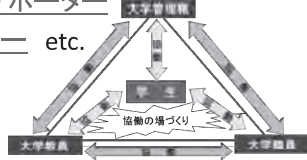
「大学と学生」フォーラム (広島大学)

萌芽期 → 学生参画型FDプロジェクト始動期 → YC.CAM誕生期 (AP採択) → 機能強化期

29

## 主体的な学びの場づくりの 日常的広がり

- おもしろプロジェクト
- 図書館学生協働プロジェクト
- 学生参画型FDプロジェクト
- COC+事業での学生応援団
- 障がい学習支援サポーター
- 大学広報サポーター etc.

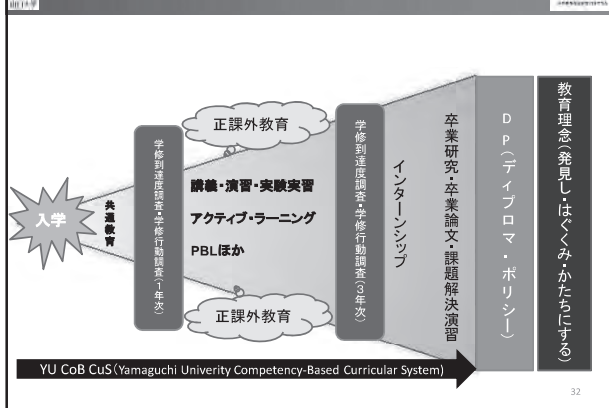


30

## 【トピック2】 テーマⅠ・Ⅱ複合型としての使命 ～テーマⅠとテーマⅡとの架橋～

31

## 山口大学・学士課程教育の質保証概念図



32

## 山口大学生として期待される汎用的能力 (教育理念に依拠した概念整理)

図1 教育マネジメントの循環

Diamond(2008, 148, Figure 13.20)を参照し作成

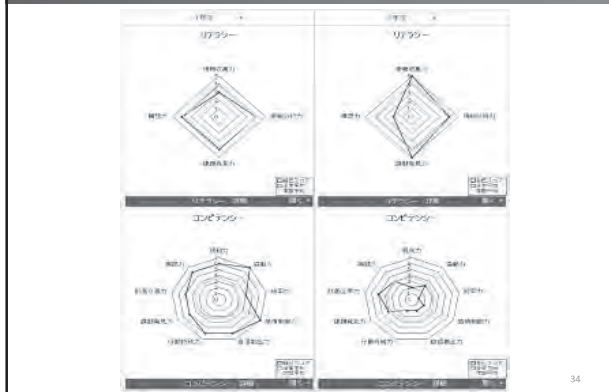
出典:鳥居(2014)『共通教育における質保証のマネジメント』の研究目的・計画・進捗状況について『大学教育学会誌』第36巻第1号, pp.75-77

山口大学・教育理念の整理(2015年5月教育研究評議会了承)

「発見し、はぐくみ、かたちにする 知の広場」の意義	教養教育において 育成される力	専門教育において 育成される力
<b>【寛き】</b> 世界や社会にいつも驚きを感じ、過去・現在・未来に関心を抱き続けたい。 <b>【直性】</b> 他人と競争し、打ち負かすのではなく、自分を発見し、はぐくみ、世界でたったひとつの存在になりたい。 <b>【出会い】</b> 自分のうちに閉じこもらず、自分を超越してひたひたに出会い、出会いをはぐくみ、つながりを築きます。 <b>【夢】</b> 過去を受け継ぎ、現実をみすえながら、夢を発見し、夢をはぐくみ、夢をかたちにします。	<b>【寛き】</b> 驚きを大切に、「自ら」が考え・判断・表現・発言する能力を養います。 <b>【個性】</b> 個性を大切に、心身ともに豊かな人間性と「真」を発見するところをはぐくみます。 <b>【出会いと交流】</b> 出会いと交流の中で、歴史と伝統を重んじつつ、異文化を受け入れることを養い、地域社会と国際社会への責任感や義務感を抱きます。	<b>【チャレンジし、解決する力】</b> あらたな問題や困難にチャレンジし、解決する力を養います。 <b>【自分を活かす力】</b> 専門家としての知識や能力を身につけ、自分を活かす力を養います。 <b>【専門分野を超越して考え行動する力】</b> 専門性を活かし、さらに分野を超越して、人々の幸せや社会・環境全体のあるべき姿について、考え行動する力を養います。 <b>【世界にはばたいて活躍する力】</b> 国を越えた多くの人々と出会い、世界にはばたいて活躍する力をはぐくみます。

33

## eYUSDL (electronic system of Yamaguchi University Self-Directed Learning) による学修成果可視化システム



34

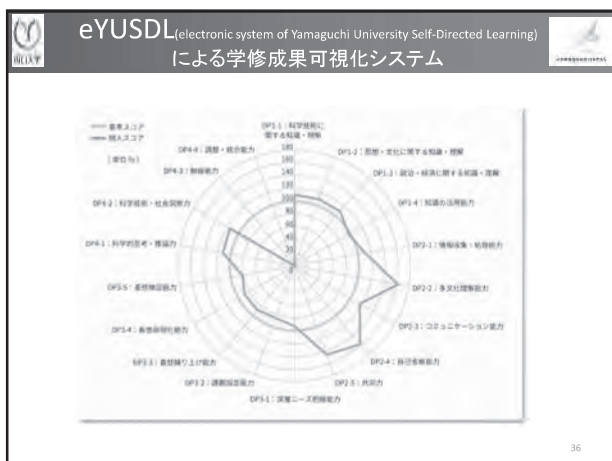
## YU CoB CuS (Competency-based Curricular System) によるDP (Diploma Policy) 達成度可視化

YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) 概念図

※2015年度設置の国際総合科学部での運用方針  
(今後、平成27年度末までに全学展開)

- (1)全ての科目で、それぞれの科目の持つディプロマ・ポリシー(DP)への達成度を数値化する
- (2)当該科目におけるDP項目への達成度(DP達成度)に成績係数(1.4, 可)を乗じて、単位取得により得られるCoB (OB)ポイント算出する
- (3)学生が単位を修得した全ての科目のDP項目別ポイントについて総和をとる
- (4)DP項目の獲得ポイントが修得ポイントを満たし、かつ、卒業要件単位数を満たした場合に課程を終了

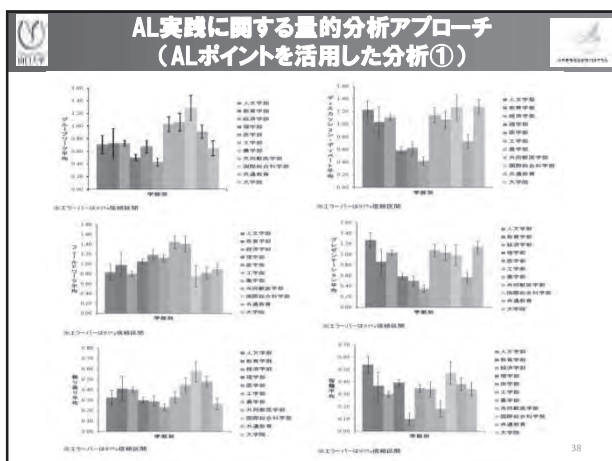
35



**テーマ I とテーマ II との架橋**

直接評価指標	間接評価指標
成績 GPA YU CoB CuSの個人スコア TOEICテストスコア VELCテストスコア (英語プレメントテスト) PROGリテラシーテスト	入学時調査 学修行動調査(1年・3年) 卒業時調査 学生授業評価アンケート PROGコンピテンシーテスト AL(アクティブ・ラーニング)ポイント

37



**AL実践に関する量的分析アプローチ (ALポイントを活用した分析②)**

ALポイントと学生授業評価の相関分析 (2016年度前期・共通教育科目を対象)

	全体 (n=384)	講義 (n=284)	語学 (n=80)	実験・実習 (n=20)
授業時間外学修	.08	.04	.36 **	.02
到達目標達成度	.25 **	.24 **	.15	.23
授業理解度	.30 **	.31 **	.12	.25
授業満足度	.29 **	.28 **	.19	.38

\*\* p < .01, \* p < .05

⇒「授業時間外学修」、「到達目標達成度」、「授業理解度」、「授業満足度」との関係性

39

**学修行動調査×学修到達度調査×ALポイント**

- ★大学における学修習慣の規定要因分析  
⇒ALポイントにおける「宿題」が有効。
- ★学修行動調査における資質・能力の規定要因分析  
⇒ALポイントにおける「フィールドワーク」が有効。

(出典: 山口大学YU-AP推進室(2018)『山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)アニュアルレポート2017』)

各種データの蓄積に伴い、今後、さらなる継続的調査分析を行う予定。

40

**学習支援の把握と強化**

- ★修学指導調査の実施【2017年度】
- ★ラーニング・アドバイザー養成講座【2017年度～】
- ★スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)を中心としたラーニング・スキル開発【2017年度～】  
☞ライティング、プレゼンテーション、情報探索に関するコモンルーブリック開発

41



## 【総括】 おわりに

42

### 高大連携・高大接続への発展

YU-AP事業主催イベントへの山口県内高等学校教員の参加者急増、  
高等学校主催研修会の講師依頼、高大連携イベントの企画実施  
(一部)

- 野田学園高等学校(テーマ:AL型授業)
- 山口県商業教育研究協議会研究調査委員会(テーマ:AL型授業)
- 山口県立下関西高等学校(テーマ:ルーブリック)  
⇒平成30年度スーパーサイエンスハイスクール(SSH)採択に貢献
- 山口県立萩高等学校(テーマ:探究学習とルーブリック)



43

### これまでの事業成果と今後の展望(1)

#### 【事業全体】

- ★事業推進委員会、タスクフォースが連携した事業推進
- ★APアドバイザー等による指導助言を活かした事業推進
- ★FD(Faculty Development)、SD(Staff Development)、教職学協働を活かした事業推進

⇒AP事業終了後の各取組の継続・定着  
(低コストによるパフォーマンス維持)

44

### これまでの事業成果と今後の展望(2)

#### 【テーマⅠ(AL)】

- ★ALポイント認定制度を通して、全学的なAL推進
- ★正課外教育プログラム開発と充実  
⇒AL型授業・正課外教育プログラムの効果検証  
⇒AL型授業実践の総合的整理と学内外共有

#### 【テーマⅡ(学修成果可視化)】

- ★教育理念の整理、3つのポリシーの見直し
- ★学修到達度調査・学修行動調査、YU CoB Cus  
⇒学修成果測定の統合・整理  
⇒学修成果可視化を通じた自律的学習支援体制の充実

45

ご清聴いただきまして  
ありがとうございました

「志」つなぎ 伝える  
二百年



Contact me : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp

### 3. 大学教育学会 2018 年度課題研究集会 ポスターセッション

## ディプロマ・ポリシー (DP) 達成度の可視化と自律的学修に関する一考察 ～山口大学と宮崎国際大学の事例を中心に～

山口大学

宮崎国際大学

林 透 (山口大学)・大関 智史 (宮崎国際大学)
Yamaguchi University, Miyazaki International College

はじめに

DP達成度可視化の契機

「内部質保証」のインパクト

考察

参考文献

山口大学の事例

学士課程教育の質保証体系

数値重み付けカリキュラムマップ

DP達成度の可視化と振り返り

自律的学修に繋ぐ現状と課題

宮崎国際大学の事例

国際教養学部の質保証

DP40項目のカリキュラムへの導入

Eポートフォリオ上での可視化

自律的学修に繋ぐ支援システム



4. SRHE (Society for Research into Higher Education) Newer & Early Career Researchers Conference 2018

**Student Learning Assessment based on three Educational Policies in Japanese Universities: focusing on Assessment Model connected with Curriculum Mapping**



SRHE NR2018@New Port, UK  
2018.12.04  
Toru Hayashi, Yamauchi University, JAPAN

## My Presentation Menu

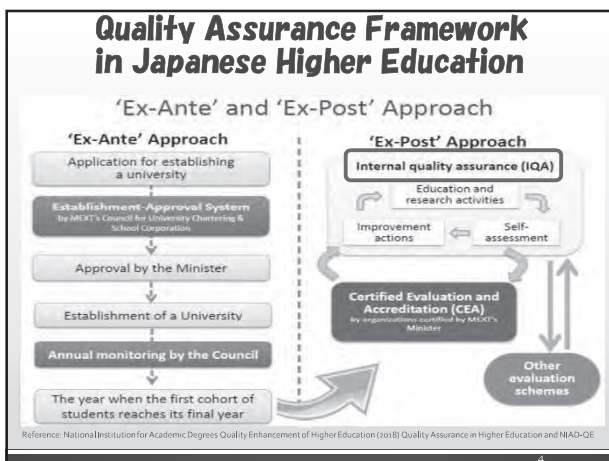
- I Background
- II New Direction
- III Research Approaches
- IV Findings, Perspectives

# Background

## Transition of Quality Assurance System in Japanese Higher Education

- The quality assurance system in Japanese Higher Education has continued its transition.

- ① the establishment of national universities incorporation and the introduction of certified evaluation and accreditation system in 2004
- ② encouragement by Ministry of Education to draw up three Educational Policies; Admission, Curriculum and Diploma policies in 2016
- ③ a requirement that establish and pass an evaluation and accreditation process, ensuring internal quality assurance in 2018



## Strengthening Internal Quality Assurance based on three Educational Policies

In 2017, it became mandatory for Japanese Universities to establish and release three Educational Policies.

Referring to the guideline by Ministry of Education, each Japanese University has to stipulate the diploma policy with the description of the required knowledge and competency, and the curriculum policy with the description of the way to assess student learning gains.

**Guideline by Ministry of Education(2016)**

Diploma Policy ..... the description of the required knowledge and competency that should be accomplished to obtain the academic degree of the academic degree program

Curriculum Policy ..... the description of curriculum design policy and assessment policy for achieving Diploma Policy



### Visualizing the Achievement of Diploma Policy (Individual Score and Standard Score)



12

### Similar Cases in Japanese Universities

Niigata University(national)

Iwate University(national)

Okayama University(national)

Miyazaki International College(private)

increasing recently!!

13

## Research Approaches

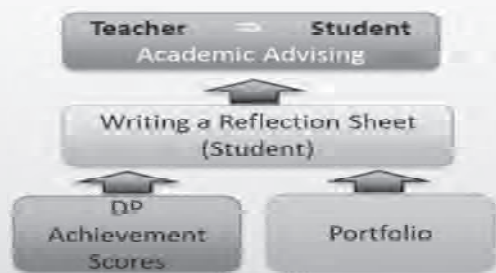
### Values of YU CoB CuS (Scaling DP Achievement)

★YU CoB CuS has a function of measuring the achievement of the required knowledge and competency described in Diploma Policy, and promoting the self-directed learning.

★ Through validating the effectiveness of YU CoB CuS, we will suggest the possibility and limitation of the Assessment Model connected with Curriculum Mapping.

15

### Establishment and Maintaining of Student Learning Assessment System



16

## Findings Perspectives



## VII. アドバイス会議





## 1. 第13回アドバイス会議

日 時：2018年6月6日（水）8：00～9：00

場 所：the Crowne Plaza Atlanta Perimeter at Ravinia, Atlanta, Georgia, USA

出席者：Mary D. Sorcinelli, Co-PI, Undergraduate STEM Education Initiative,  
Association of American Universities (AAU), Senior Scholar, Bay View  
Alliance: Leadership for Learning in Higher Education (BVA)  
Senior Fellow, Institute for Teaching Excellence & Faculty Development,  
University of Massachusetts Amherst（YU-AP 海外アドバイザー）  
Andrea L. Beach, Director, Office of Faculty Development, Western Michigan  
University

林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授

山崎慎一 桜美林大学 グローバル・コミュニケーション学群 助教

内 容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の進捗状況に関する報告

2017年度に、メアリー、ディーン・ソルチネッリ先生とアンドレア・ビーチ先生を招へいして開催した YU-AP 事業・国際シンポジウム開催以降の山口大学における AP 事業の進捗や成果発信の状況について報告を行った。

（2）世界各国における FD に関する情報交換

The International Consortium for Educational Development Conference の参加を通して、英国やドイツなどの取組との情報交換を行い、FD をはじめとした日本の高等教育の取組を相対化して眺める必要性やアジア各国との比較研究を進める必要性について助言をいただいた。

（3）今後の方向性

カリキュラムデザインやカリキュラムマネジメントの重要性が求められる中で、昨年度紹介されたアメリカでの先進事例や専門の研究者（ミシガン大学など）について情報収集を進め、来年度以降の先進事例調査に取り組むこととした。



## 2. 第14回アドバイス会議

日 時：2018年11月22日（木）14:30～16:00

場 所：大学教育センター長室（共通教育棟2階）

出席者：江本 理恵 岩手大学 教育推進機構 准教授

菊政 勲 大学教育機構 大学教育センター長

平尾 元彦 大学教育機構 学生支援センター教授

林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授

岡田 耕一 大学教育機構 大学教育センター講師（教学 IR 部）

上野 秀一 大学教育機構 大学教育センター主事

大学院創成科学研究科（理学系学域）准教授（教学 IR 部）

野村 治宣 学生支援部 教育支援課 教育企画係長

内 容：

（1）学修成果可視化及び教学 IR の取組について（岩手大学の事例を通じた意見交換）

岩手大学 江本先生より資料 1～9 に基づき、岩手大学における 3 つのポリシーの策定のプロセス、2017 年度からの学部改組に伴う新カリキュラムに向けた 3 つのポリシーの見直し・ナンバリング策定・成績評価ガイドライン作成のプロセスについて詳細に説明があった。

さらに、数値の重み付けによるカリキュラム・チェックリストの作成について説明があり、各学科の裁量において数値による重み付けを行い、当該作成プロセスにおいて学部からの反論等はなく、円滑に作業が進んだ旨の説明があった。

各学科における達成量の可視化においては、現状において学年進行による達成量の積み上げ値を明示するに留まり、達成量の目安値（基準値）を設定はしていない。また、学生の学位授与の方針の自己評価と達成量の年次変化を集計・分析し、各学部における FD 活動の際にフィードバックしているとのことであった。

そのほか、岩手大学における教学 IR の体制や取組の紹介、人文社会科学部における学修ポートフォリオによる指導の具体について紹介があった。

岩手大学の事例紹介に沿いながら、意見交換を行った。

（2）学習支援体制について（意見交換）

野村係長より机上配布資料に基づき、本学における学習相談室の提供内容、実施実績、担当講師・TA などの運営体制について説明があり、意見交換を行った。

このほか、AP 事業において行っているライティングスキルやプレゼンテーションスキルを強化するための正課外教育プログラム（SLP（スチューデント・リーダー・プログラム））について紹介した。

## VIII. 各種セミナー等参加報告



## 1. 平成 30 年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会

日 時：平成 30 年 06 月 07 日(木)～08 日(金)

場 所：ホテルメトロポリタン高崎

参加者：岡田 耕一（大学教育機構 大学教育センター 講師）

2 日間に渡り開催され、1 日目の事務協議会と 2 日目の全体会議に出席した。ここで挙げた話題のうち、主に教学 IR と学習成果の可視化について以下にまとめる。

### 1 日目：事務協議会

#### 教学 IR について

横浜国立大学：AP 事業で開発を行い、(春 70 秋 75 問の)学生プロフィール用チェックシート入力システムをカスタマイズ版 DreamCampus で実現した。これへの回答を履修登録要件にする事で、9 割を超える高い回収率を得ている。学生が 24 時間を(通学、サークル、バイト、睡眠等)生活の何に当てているか調査した結果、週に約 11～12 時間授業外学習しており授業が無いと公認会計士や英語学習に時間を当てていた。設問には正しく答えてないと無効判定するダミー問題を含めている。GPA1.0 の学生を洗い出し教務委員長に送付する仕組みを自動化しており人手を要しない不振学生への対応を行っている。

佐賀大学：学長主導の全学的な教職員協働組織として IR 室を組織し経営基盤、教育、学術、社会貢献の 4 つの視点からアプローチしている。IR 室は機能先行主義、多面的な評価、影響機能の重視を特徴とし、専任事務職員 1 名及び兼任教員の計 18 名+拡充メンバー30 名の体制で臨んでいる。影響機能として部局毎に評価反映特別経費を設ける事で、シラバス入力率が 23 年度 79.8%から 25 年度 100%に向上し現在も維持している。教育基礎情報データベースの入力率も 26 年度 91.6%(前年度比+28.6%)を達成した。IR データは毎月、役員や部局長にモニタリングとして報告している。休校率の減少、就職内定調査の不明者ゼロ、ティーチングポートフォリオの入力率向上、FD 出席率の向上などの成果があった。理工学研究科後期日程では、従来個別試験を課していなかったところ 25 年度に個別試験を設定し、実質志願率が 24 年度比で 2～7 倍になった。28 年度からは前期日程に英語も導入した。

#### 学生が就職した企業へのアンケートについて

岩手大学：(株)リアセックに委託し 28 年 1 月 7 日～22 日に 20～23 年度卒業・修了生を対象で実施し 273/1,613(17.3%)の事業所から回答を得た。身に着けている社会人基礎力・学士力、身につけさせるべき社会人基礎力、期待する学士力について質問したところ、統率力、コミュニケーション・スキル、学際的知識、課題探求力の育成が必要であることが判明したため、キャリア教育の充実により対応を図っている。

宇都宮大学：26 年 11 月末～27 年 1 月末に実施し 152/355(42.8%)を回収(うち本社所在地が栃木県の企業数は 72)。卒業生の能力に関する評価及び大学教育の評価や要望を明らかにする目的で、過去 5 年間に 2 名以上採用している企業を対象とした。5 年経過したので再調査を予定中との事であった。

香川大学：18、22、28 年度に実施。企業アンケートで 103/320(32.2%)、240/1,405(17.1%)、224/998(22.4%)、卒業生アンケートで、307/4,627(6.6%)、703/4,558(15.4%)、

314/2,498(12.6%)と推移。教育効果の客観的評価を行い、カリキュラムに反映させる目的。優れた点、改善を要する点を洗い出した。28年度は Google Form による web 入力を実施。アンケート依頼の発送で 12 万 5000 円要した。回収率を上げるために Q&A も添付している。依頼文の URL を入力してもらう方式。URL が長いのが悩み。

## 2 日目：全体会議

### 文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 専門官 多田 典史 氏による講演

最近の高等教育政策の動向について解説された。ここでは今後の高等教育の将来像について昨年 3 月 6 日の諮問が示され、各高等教育機関の機能強化に向けて早急に取り組むべき方策として、教育課程と指導方法の改善、学修成果の可視化と情報公開、教学マネジメントの必要性などを挙げられ、秋頃に答申が出るとの情報が提供された。

### 分科会報告

初修外国語、高年次・大学院の教養教育の重要性、理工系の専門性を核とした教養教育カリキュラムの設定、寄付講座の扱いについてそれぞれの分科会から議論についての報告があった。初修外国語からの報告では、学修成果の可視化について厳しい予算状況ではあるが、短期的な必要性にとらわれない充実した初修外国語教育を維持していく必要があるという意見で一致したという報告があった。

### 協議題「共通教育における授業時間外の学習支援体制について」

東京農工大学：工学部電気電子工学科の学部独自の取り組みとして、平成 23 年に設立された学習支援室の紹介があった。学部全体に対する学習環境の充実のため学科で提供する教育プログラムの一部として提供し、学科の専任教員が常時対応する他、学生も 1 カ月未満の非常勤職員として雇用して対応しており、相談を受けた学生の成績が平均を上回る等の学習効果が見られたとの事であった。

鳥取大学：教養基礎科目の内容がリメディアル教育に当たるが、単位認定がなくなり結果的に学習支援になっている。県との協定で高校教員を非常勤講師として派遣してもらい実施+TA で平日 5 時限に実施しており、受けてよかったという学生も多いが、出席回数と成績には相関はなさそうとの事であった。

佐賀大学：ネット授業や反転授業をやっており、共通教育科目は全教室で自動収録している。学生は欠席やよくわからなかった場合、授業後自由にアクセス可能。利用者は多くないが一定数あり、学生の支援になっている。試験前にアクセスが増加する。英語は入学時点で既に差がついており、習熟度別に ABC の 3 クラスに分割している。下のクラスに TOEIC 形式の試験・演習問題を沢山作っていて、先生の授業とは関係なく取らないといけない単位の 20%を占めている。習熟度別作ると単位取り易いため下のクラスに行く学生がおり、課題をしないと単位が出ないシステムにした。約 5 年やっているが、下のクラスが伸びており、学修成果が出ていると思う。ネット授業に強い大学を 5 校くらい集めて教材を作っており、英語、数学、国語、情報の 4 科目については教材が完璧に出来上がった。学生はプレースメンテストとポストテストを受けてどれだけ成果があったか分かる教材を作っているとの事であった。



## 2. 2018年度大分大学FD研修会（学修ポートフォリオと教育の質保証）

### 「eポートフォリオシステムを活用した看護学教育

#### －システムの概要・教員体制づくりと今後の課題－

日 時：2018年7月24日（火）18:00～19:30

場 所：大分大学挟間キャンパス 看護学科棟 2F 211 講義室

参加者：林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授

#### 概 要：

東京慈恵会医科大学医学部看護学科教授（学習評価システム委員会委員長） 梶井 文子氏より、同学科におけるeポートフォリオシステムの概要、eポートフォリオシステムを活用した看護学教育と評価の実際、教員体制づくり、今後のeポートフォリオシステムの活用に対する課題について基調講演があった。

同学科のeポートフォリオシステム導入の経緯として、2010年度文部科学省大学教育推進プログラム「学生一人ひとりを育てる学習評価システム」の採択を受けて、学生4年間の時間軸での成長を具現化するための学習ポートフォリオを構築したことが大きな契機となっている。具体的には、学部教育で行われている科目横断総合試験による数量的総合結果と演習・実習評価による学生個人への質的評価結果をサーバーで一元管理し、学生一人ひとりの学習ポートフォリオを構築し、学生の成長を時間的な推移として捉え、この結果を学生個人にフィードバックする仕組みづくりである。

eポートフォリオの構成は、「プロフィール画面」「ビジョン・ゴール・リフレクション画面」「学習成果物の蓄積」となっている。2010年度以降のシステムの改善充実を経て、「ビジョン・ゴール・リフレクション画面」では、学生自身のビジョン・ゴール設定のほかに、ディプロマ・ポリシー（DP）の8能力の自己評価設定があり、知識レベル測定に当たる「科目横断試験画面」と技術レベル測定に当たる「臨地実習自己評価画面」「看護技術ステップアップノート画面」と連動している。

2016年度には、1～4年生までがeポートフォリオを活用する環境を整備し、4年生にはeポートフォリオ賞を表彰（5名）することで動機づけを高める工夫をしている。また、卒業時には、病院勤務でのキャリア・ポートフォリオを繋げる目的から、学生時代のeポートフォリオを本人にデータ提供することとしている。

本事例の最大の特徴は、eポートフォリオを用いたリフレクションの時期を、各年次のカリキュラムに埋め込んでいる点である。いわゆる「背骨科目」が各年次に設定されて、当該科目において、学生自身がビジョンとゴールを設定し、リフレクションを行いながら、「自分をみる、他者をみる」（1年次）、「看護の対象をみる」（2年次）、「看護の技術（わざ）をみる」（3年次）、「看護の役割をみる」（4年次）に適う資質・能力を修得していく仕組みづくりが構築されている。

2018年度にeポートフォリオに組み込んだDPに関する自己評価機能では、DPに規定した8つの能力（①主体的学修力、②課題解決能力、③パートナーシップ、④地域医療連携能力、⑤倫理的姿勢、⑥品格を備えた態度、⑦メンバーシップ・リーダーシップ、⑧国際的視野）に関するルーブリックに基づき、4段階での自己評価をチェックするような仕組

みとなっている。同学科では、学生に対して、DPに規定した8つの能力について口にするようにしているほか、各授業科目との関係性についても明示するように努めているということであり、学科内での教員・学生間のDPに関する共通理解が十分に図られている。

1年次から4年次の学生のeポートフォリオシステム活用状況の結果についても報告があり、1年次・2年次の利用頻度が高い反面、病院実習等で多忙となる3年次・4年次にかけて利用頻度が低くなる傾向が見られた。また、eポートフォリオを通じたDPの理解度・認識度は高いが、eポートフォリオシステムそのものの満足度が10点中、平均5.9点に留まっている点に、一定の課題があることが窺えた。

後半の質疑応答では、学生のリフレクションの機会設定や具体的な学生指導のあり方、DPの自己評価に関する動機づけのあり方、学生時代に蓄積したeポートフォリオの看護職就職後の活用のあり方など数多くの質問があり、参加者にとって有意義な研修会となった。

### 3. SRHE (Society for Research into Higher Education) Newer & Early Career Researchers Conference 2018 and SRHE Annual Research Conference 2018

日 時：2018年12月4日(火)【SRHE Newer & Early Career Researchers Conference】

2018年12月5日(水)～7日(金)【SRHE Annual Research Conference 2018】

場 所：Coldra Court, Newport, South Wales, UK (2018年12月4日(火))

Celtic Manor, Newport, South Wales, UK (2018年12月5日(水)～7日(金))

参加者：林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授

内 容：

#### 【SRHE Newer & Early Career Researchers Conference】

(1) 10年後の学生像について話し合い、イラストアイデア化するアイスブレイク

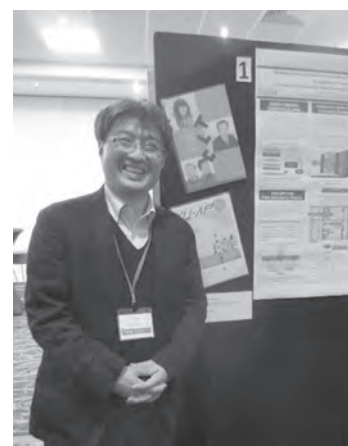
冒頭のアイスブレイクの時間において、10年後の学生像について、グループテーブルメンバーで話し合い、イラストアイデア化するワークが行われた。「頭・・・知識理解、心臓・・・価値、手・・・スキルやコンピテンシー、足・・・移動性やトランスファーラブル・スキル」に見立て、模造紙にイラストアイデア化するワークは、創造性に富んだ成果物ができた。ただし、将来に向けて必要とされる学力観について、国籍の違いを超えて、共通理解を得られるものであった。



(2) 成果発表(オーラル・ポスター)、基調講演及び研究発表・意見交換

午前の基調講演では、英国サリー大学 Rachel Brooks 教授から”Higher education mobilities : a cross-national European comparison”と題し、欧州圏における学生移動の現状と課題について講演があった。学生移動に係る社会的・文化的・経済的ナリソースの問題点、各種政策との関連付けなど、欧州6か国のデータ分析を交えながら問題提起を行った。

午後の研究発表では、山口大学 林 透が、”Student Learning Assessment based on three Educational Policies in Japanese Universities : focusing on Assessment Model connected with Curriculum Mapping” と題し、日本の高等教育における3つのポリシーに基づく内部質保証に関する政策動向や仕組みを紹介するとともに、その具体的な事例として、山口大学における AP 事業を中心とした取組を取り上げ、学修成果可視化に関する成果等について口頭発表した。質疑応答では、カリキュラムと各授業科目の教育学修目標の整合性や日本の高等教育におけるグランドデザインの作成過程の具体について意見交換を行った。なお、本口頭発表と同時にポスター発表も行い、参加者との意見交換を行った。



そのほかの研究発表では、英国特有の制度である Widening Participation (WP) と学生の就職活動の関係性に関する調査研究、大学教員の教授法に対する学生から見た捉え方に関する質的調査研究、東アジア地域における高等教育システム連携(キャンパスアジア)に関する調査研究など、英国研究者(大学院生を含む)を中心とした口頭発表・質疑応答を通して、必要な情報収集・情報交換を行った。

## 【SRHE Annual Research Conference 2018】

### (3) 基調講演及び研究発表・意見交換

今回の学会のメインテーマは、“The Changing Shape of Higher Education”であった。冒頭の基調講演では、ポーランド・ポズナン大学 Marek Kwiek 教授から“Social Stratification in Higher Education : What It Means at the Micro-Level of Individual Academics”と題し、高等教育の多様化に伴い、大学教授職の多様化も進む中で、グローバル化の波を受けながら、欧州圏における大学教授職の階層化の現状についてデータを提示しながら、今後に向けた課題や方向性について問題提起を行った。

その後の研究発表では、今年度は、Quality Assurance for University Teaching の枠組が英国に導入されて四半世紀が経ち、当該テーマに関するハンドブックが SRHE から刊行されたこと、Teaching Excellence Framework という仕組みが近年導入されたことに伴い、大学教員の教授法をテーマとした質的・量的な調査研究に関する口頭発表が多い印象を受けた。日本でも帝京大学や芝浦工業大学などで積極的に導入している学生による授業観察法に関する英国大学での事例研究も見られ、日本の高等教育の現状と比較対照しながら、意見交換を行うことができた。そのほか、新しい時代ニーズにあったカリキュラム設計という点では、人工知能 (AI) やアントレプレナーシップをテーマにした教育効果やその意義を議論するセッションに参加することができた。

また、大学経営や教学マネジメントに関する事項として、“Metrics”という評価測定ツールを活用して、マクロ・メゾ・ミクロレベルでの質保証を効率的かつ効果的に行う事例研究を集めたシンポジウムセッションも有意義であった。

日本の高等教育業界では、中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会において、教学マネジメントに係る指針策定に向けた議論が進んでいるが、今回の学会参加を通して得た英国を中心とした大学教育の質保証に関する動向を参考に、本学での教育改革のあり方に活かしていきたい。

### 【その他】

SRHE は、英国高等教育界では最も伝統があり、研究者メンバー規模が大きな学会である。同学会では、英国内に留まらず、他国の研究者との交流を積極的に進めており、『SRHE News Issue31・January 2018』では、山口大学 林 透が、“A new approach to the assessment of learning outcomes in Japanese Universities”と題し、本学の AP 事業取組等を同ニュースレター 16-17 頁に記事掲載いただいた（なお、右の掲載文は、その一部抜粋である）。

今後とも、SRHE メンバーとの交流を通して、英国をはじめとした欧州圏の高等教育改革、教育質保証、学修支援等の情報収集・情報交流を続けていく予定である。

A new approach to the assessment of learning outcomes in Japanese Universities by  
*Toru Hayashi*



In recent years Japanese universities have faced unprecedented demands for developing student learning and have rapidly reformed courses to introduce active learning and practical internships. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan (MEXT) states that: 'Amid the rapidly changing circumstances at home and abroad surrounding universities, expectations and demands towards universities, such as the development of cultured human resources with deeply specialized knowledge, and contributions to solution of various kinds of social issues, have become enlarged and diverse.' Universities have a responsibility to assess student learning and to make student achievement more explicit through visualisation of learning outcomes. Assessing key competencies and student engagement will become more and more important, which has led most Japanese universities to establish learning outcomes analysis.

In 2014 the Ministry (MEXT) introduced a higher education rebuilding programme, the "Acceleration Programme for University Education Rebuilding" (AP). Yamaguchi University won Japanese government funding support for a 6-year project, Acceleration Program of Education Rebuilding, from 2015 to 2020. Our main objective is to provide maximum support for the improvement of active learning and the visualisation of learning outcomes. We have tried to measure the competency gain related to the experience of active learning, and the effectiveness of student self-directed learning in helping students achieve diploma qualifications. A series of case studies has led us to suggest that an assessment model which combines direct and indirect measures works best as authentic assessment for student learning.



#### 4. 早稲田ボランティアプロジェクト成果報告シンポジウム「のめり込む学生の育て方～学生の情熱×現場×教員の専門性～」

日 時：2019年1月18日（金）18:15～19:45

場 所：早稲田大学大隈記念講堂 小講堂

参加者：高林 友美 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

2002年に設立された早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）は『『体験的な知』と『学術的な知』をつなぐ』を目標に、授業やスタディーツアーを行っているが、学生と教員の最も深いコミットがあるのが「早稲田ボランティアプロジェクト」である。特徴的なのは、豊かなフィールドワークの地に複数恵まれているだけでなく、専門の合致した教員が傍にいてのことである。現実世界に行動を起こそうとするのを大学が後押しするという先駆的にセンターとして行ってきた。学生の課外活動が、1大学の取り組みに限られず、大学の枠・学生の枠を超えて現実世界で役立つことに、大学が強く関わるといふ点で WAVOC の強みがある。本シンポジウムはその早稲田の伝統としての社会的視座と行動力を活かしたプロジェクトのこの2年間の成果について、特に学生の成長に焦点をあてて報告がなされた。

シンポジウムは2部に分かれており、第1部では、4組の学生と教員のペアが実際の早稲田ボランティアプロジェクトにおける成果と、課外学修のリフレクションについて発表した。学生の変容には、各教員の専門知が影響しているため、ペアでの発表が行われた。第2部では、WAVOCにおける体験の言語化について、「マジでヤバイ」という表現からスタートする学生が、自分の言葉で体験を語り、教員の支援によってリフレクションと当事者性を深める過程についてパネルディスカッションが行われた。特に問いかけの手法について、WAVOC へのアドバイスを設立当初から行っている立命館大学の河合准教授をファシリテーターとし、全報告者が登壇した。以下にまず、第1部の4件の報告の発表概要を示す。

##### 第1部：プロジェクト成果報告

##### テーマ：世界が違って見えるようになった

(1) 狩り部 岩瀬詩由（環境エネルギー研究科 M1年）岩井雪乃（WAVOC 准教授）

このプロジェクトでは、猟師免許も持つ岩井准教授が指導しながら、20頭の害獣を千葉県鴨川で駆除しており、文化祭では捕まえた猪や鹿の提供や、活動報告を行っている。

獣害問題に関心を持っていた修士1年の岩瀬さんは、実際に活動を始める際の家族との対立の体験を発表した。動物愛護を訴える母が活動を反対する理由について、価値観の違いを「種の命と個の命」という異なる価値観によるものであることを考えた。彼女が立場の多様性を理解するようになり、獣害問題の対策への考え方が変わるプロセスは、二項対立から多様な価値観への移行という近年の環境社会学における重要な概念を体験を通して理解することにつながった。

こうした言語化と成果の裏には、岩井氏による「ネガティブな声を正直に学生に伝える」という援助方針がある。現実にはぶつかり合う多様な正義にどのように対応するかについて、

狩り部活動に対する家族との対立を、自身でよく考えさせることと、反対意見にもじっくりと向き合わせることによって学ぶ機会を与えている。岩井氏の研究フィールドは元々はタンザニアであるが、鴨川という、故意に「知りすぎていない」フィールドを選んでプロジェクトを行っているという工夫もある。ヒエラルキーを作ったり、教えすぎたりしないために、「教員自身もまだ深く知らないフィールドで活動を行う」という方略は、大変新しいものであると感じた。

## (2) パラリンピック・リーダープロジェクト

岩倉渉太（社会科学部4年）兵藤智佳（WAVOC 准教授）

興味本位でプロジェクトに入った社会科学部4年の岩倉さんは、実際に障害者であるトップアスリートと合宿で触れ合い、プロフェッショナルなアスリートとしての面と、自分と変わらない面を知ることで、意識が変わり始めたことを発表した。合宿中の感覚的なふれあいから得たことについて、印象的な場面を語り合う振り返りを通して、本プロジェクトについて「凸凹に出会い、変われる、スポーツの力」という自分なりのコンセプトをつけるという言語化を行った。役に立ちたいという思いで参加した2年目の合宿の後、普段の生活でも、車椅子に乗っている人に気づくようになり、得意不得意、できるできないという考え方を自らの言語化による「凸凹」という考え方で捉えることができるようになった。

しかし、最後には特別支援学校の見学から、自分の考えていた凸凹の枠を超えた重度の障害を目の当たりにして、得られた価値観に再度ゆらぎが生じていることが発表された。現在も続く成長のプロセスに対して、プロジェクト担当教員の兵藤氏は、自身のマイノリティ支援という専門を活かした支援を行っている。マイノリティ支援の分野においては、こうしたゆらぎにこそ価値があるため、ゆらぎを自分で追求するよう見守っている。

合宿で共に入浴してもらえようコーディネートしたのも、当事者のイメージとギャップ、力関係が崩れる瞬間をつかみ、ひっかかりを言語化するために行ったものと言う。学びの場作りでは、当事者にあえて強い言葉で指導してもらえようような仕組みを作ることもあるそうだ。こうしたコンセプトを練り上げる支援を行っている。「彼らの問題からぼくの問題にする」ために、学生自身に戸惑いを起こさせる仕掛けを作ることが重要な工夫であると結んだ兵藤氏だったが、発表中の様子も含めて、マイノリティ支援に対する強い情熱が感じられ、こうした熱量もまた、学生の深い学びへ向かおうとする姿勢を後押ししている大きな工夫であるのではないかと考えた。

## (3) タイもりびとプロジェクト 米伶太（教育学部2年）二文字屋脩（WAVOC 講師）

タイの狩猟採集生活をする人々「ムラブリ」の現地での生活支援を行うプロジェクトにリーダーとして参加している教育学部2年の米さんは、活動当初のムラブリへの嫌悪感を率直に発表した。中高の部活動の経験から、目標に向けて努力することが第一で、向上心を是としていた彼にとって、ムラブリの家族中心で依頼心の強い価値観は受け入れ難かった。しかし、帰国後の振り返りで、自らの幸せに対する価値観が自分の属する社会の価値観でしかないことに気づき、多様性に対する理解を深めることができた。肉を食べたい、という要望を彼らの夢や目標として受け止め、寄り添うことと、その願いを自分の価値観で批判することの違いを自覚した彼は、来月再びタイに赴き、ムラブリの価値観を再度学んでくるという。



文化人類学を専門とする二文字屋教授は、異文化を通して自分について考えることを「欲望の共訳不可能性」というキーワードを示しながら説明した。米さんの学んだことは、まさに文化人類学の課題となっている、社会背景による欲望の違いを背景としている。この課題に際して、どのような支援が良いのかを教えるから現地に行くのではなく、学生たちのネガティブな感想を受け止め、そこを起点として自分を見つめ直すことを促す振り返りを行うことで学びを深めさせている。ただし、ここで行われる対話は、ムラブリを深く知る二文字屋講師の「文化の通訳」があってこそ可能になっている。学生の気づきを育て、それを人生哲学にまで至るように寄り添う専門家としての姿勢が発表に見られた。

#### (4) 海士ブータンプロジェクト 櫛部紗永（法学部3年）平山雄大（WAVOC 講師）

このプロジェクトでは、島根県の離島海士町における地域創生の就労体験を通して、過疎問題の解決方法を学んだ後、平山氏の地域研究という専門のフィールドであるブータンの地方が抱える問題とリンクさせている。これまで外部からの貢献を受ける側であった海士町を、学びの場として設定した点が新しく、学生は海外での自由度の高いプロジェクトのために就労体験で積極的に学ばざるを得ない仕組みができています。

両フィールドに3度行っている法学部3年生の櫛部さんは、ボランティアの在り方について学んだことを発表した。渡航してブータンの都市と農村の行き来から、地域活性化のための問題解決法を自身の目で探し続けた彼女は、農村部の当事者へのインタビューで「今くらいがちょうどいい」と、開発の必要を否定されたことがショックだったと言う。しかし、この戸惑いから、農村部には足りないものがあるという自分の偏見に気づき、自分に出来ることを捉え直した。徹底した問い直しから、ブータンにおける幸せに対する価値観が独特で貴重なものであることを理解し、ボランティアの形を変えることにした。不足するものを補うためのボランティアから、ブータンの価値観を広めるスタディーツアーを計画し、ブータンの観光産業に協力しつつ、新しい価値観をツアーに参加する学生に広めるというプロジェクトを発足させた。

こうしたプロジェクトの転換は、指導した平山氏の最初の想定にはなかった。平山氏は下地として、場作りを行うことに専念してきた。先進国と途上国の比較を自分で行わせた上で、生の声を聞くことが出来る人間関係づくりをホームステイ・インタビューと言う形で準備し、教員による「揺さぶり」をかける振り返りの時間を毎日設定した。意図していなかった変容に対しては、活動中の揺さぶりの効果としてうけとめながら、より良い取り組みにつながったとプラスに捉えるようにしている。あえて何も決めないところからスタートして、考えるフィールドとヒントは提供するが、その後は学生自身に悩ませて、生まれた違和感やショックをすくいあげて次の活動を共に模索する。この仕組みが必ずしも「のめり込む学生を育てる」とは言えないが、しかし学生が積極的になるための仕掛けとして非常に興味深い。

## 第2部パネルディスカッション

テーマ：「のめり込む学生の育て方」を言語化する

ファシリテーター：河井亨（立命館大学 准教授）

第2部のパネルディスカッションについては、第1部が延長されたこともあり、ファシリテーターからのコメントと短い応答が2件となったが、それぞれの実践を踏まえた内容の濃い応酬がなされていた。

1つ目の議題は「口出ししたいときに、どう自分を止めるのか？」である。パネルごとに具体的な回答を簡単にまとめる。

平山：何もないところから活動を始めたい。先生についていこうという向きしか生まれないのでは、学生の考えるチャンスを失ってしまう。旅程も講師側が設定するのではなく、どうやって行くのか、というところから、一緒に悩みながら決めることを重視することを常に意識している。問いかけやヒントは出しても、答えは言わない。

二文字屋：自身の専門と長年のフィールドワークから、相手にくっつかないこと、距離の余白をもつことを大切にするタイのムラブリ文化に染まっているので、口出ししたいと思わないが、やれる人がやるという社会の体現者としての存在でいるようにしている。

兵藤：言いたくなかったことを問いに変換する。言いたい欲望をクエスチョンにして、これをしなさい・動きなさいというのではなく、こんな貴重なときにじっとしていいの？とあくまで問いかける姿勢を保つ。

岩井：口出しや正解を与えてしまう、と悩む場面もあるからこそ、あまり知らないフィールドを選ぶようにしている。この工夫こそ学生の学びを深めているかもしれない。

これらのパネルの意見より、学生に考えさせる時間を担保するためには、相当に待つ姿勢が必要になることが分かった。指導と考えさせる時間とを半々や6割程度で考えているのでは、WAVOCのプロジェクトに相当するだけの学びは提供できないだろう。

2つ目の議題は「学生に残る問いかけ」として、発表した学生が答えた。

岩倉：当事者と会った時に、まずはどうしたら良いかわからないし、隣の友達と喋ってしまう。そういった場面でも、これをしなさいとは言われず、貴重な機会なんだからよく考えなさい、とだけ言われたことはよく覚えているし、考えさせられた。

岩瀬：身近に感じられるような、先生の何気ない言葉が印象に残っている。一緒にやりに行く、とか、私も行こうかな、私も勉強したい、といった言葉を投げかけてくれるため、友達のような、仲間のような感覚で学びを得ることができる

米：個々の発言というよりも、毎晩のミーティングで、自分の矛盾点を圧倒的に説明される間に、自分が成長しているように感じる。自分では言葉にならないことを、重箱の隅のようなところでもつかかれながら2,3時間話すことで、学生が逃げないように、思ったことの先に行こうという働きかけがあると感じられた。

櫛部：自分も問いかけではないが、思ったことを書かされたということが印象に残っている。相手が大切にしているものを大切にしろ、という言葉から、異文化理解が始まった。

このような実際に体験した学生からの声を拾うことは貴重である。具体的な発言は、プロジェクト全体を通しての学生との関係や体験の文脈によるため、全く同じ声かけが有効であるとはいえないが、こうした問いかけを学び、今後の学修支援に積極的に活用する必要があるだろう。

学びと成長の視点から述べられたファシリテーターのコメントは、以下の 2 点にまとめられる。

まず、大学としてこのような学生が戸惑いながら進むようなプロジェクトを持っていることの価値についてである。正しいものがあると思いきや途中で気づいたときに、色々あるよね、では終わらせられないような関係性のところで、高等教育で追求しなければならぬところである。こうした専門知と体験が交差する部分で、学生を社会につないでいくことで大学が生きていくのだと考えられる。発表されたプロジェクトからは、その成長のポテンシャルを見ることが出来たと述べられた。

次に、教員の資質についてである。教員がのめり込んでいるから、学生がのめり込むのかもしれない。教員の信念をもってやっていることが、学生に伝わるのが重要である。更に、教員が自分の体験や学生との向き合い方について、シンポジウムに向けて話し合い、それを社会に開く形でおこなうことが、新しい FD であり、大学が育つきっかけになるのではないだろうか。教員の成長があるのがこうしたプロジェクトであり、発表の場であるシンポジウムであると述べていた。こうした新しい FD 観は、特に山口大学に今後必要な視点だろう。

最後に、課外活動に近いからこそ、やらされるから始まるのではなく、自分でスイッチを入れることができるプロジェクトという仕組み自体の価値について言及していた。氏の言葉通り、シンポジウムを通して更に深い議論が学生や教員の間で生まれており、今後のますますの発展が期待された。

最後に、総合司会を学生が務めていたことも印象的であった。ブータンプロジェクトの報告をした 3 年生であり、WAVOC の運営の学生参画及び学生の主体性が伺えるしかりとした進行であった。4 団体の報告に対する感想を即興で言語化しながら、会場準備の場をつなぐ場面に驚いた。これまでの海士町とブータンの就労体験で、非常に実践的な学びを得てきたということが良く分かった。

本シンポジウムにあたって、早稲田大学の佐々木理事は、専門性の高い教員とタッグを組んだ学生の活躍を報告しながらも、今後は学生のボランティア活動の枠を超えた、学生による組織的な国際協力が可能であるはずだと展望を示していた。「微力だが無力ではない」という学生の力に対する強い期待と自信から、山口大学における学生にもある「伸びしろ」について考えさせられた。

しかし、その際に難所となるのは、課外活動自体の成果と学修成果のバランスだろう。戸惑いやぶつかり合いからのめり込むようになるが、その場で学生の求められる働きを果たせないときに、どのような対応をするべきかについて、長期的視点と短期的視点の難しさを感じた。正課の学びや、実際に地域のニュースになるような大々的な効果を出すためには、教員主導のプロジェクトが適していると考えられる。しかし学生の学びについて考えるならば、課外のプロジェクトでは、専門知による援助の形に工夫が必要であり、学生自身が問いを解決してゆくために、短期的な効果を追わずに学生の変容を受け止める姿勢と、その包容力に勝るプロジェクト対象への情熱が必要であると感じた。長い目で見ながら、様々な体験から学ばせることにより、司会の学生のような総合力を伴う成長が実現すると考える。

## 5. 産業能率大学 教育開発研究所主催 第4回公開FD研修会 「高大連携・接続の現状課題と今後の展望」

日 時：2019年2月8日（金）14:00～16:30

場 所：産業能率大学自由が丘キャンパス 2号館2階2201教室

参加者：林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授

### 概 要：

基調講演1「高大連携・接続を意識した研究と授業デザイン」と題して、立命館宇治高等学校教諭 酒井淳平氏より、同校における探究学習の取組について紹介があり、フロアの参加者同士の対話を含みながら、アクティブ・ラーニング型で講演が進んだ。同校はIB認定校、SGH指定校であるだけでなく、2018年度からは文部科学省・研究開発指定校（探究）を受けており、コア探究（3年間5単位）を組み入れた新カリキュラムを進めていることが紹介された。生徒を「お客様」と捉えず、「生産者」になるように教育しており、生徒には「問い」を立てる練習を徹底した成長を目指し、教員には他教科との連携を通じたチーム作りを目指している。さらには、高大連携・接続を入試以外の方法で取り組みことの大切さを力説し、コア探究を通じた学習そのものの高大接続のほか、一般受験以外で進学する生徒が半数を越える現実を認識し、高校3年後半の時期を大学との接続を意識した学習活動を設定することの有効性を提案された。

基調講演2「高大連携・接続における現状と課題・展望」と題して、リクルート『キャリアガイダンス』編集顧問 角田浩子氏より、高大接続答申や新学習指導要領のポイントや目指している事項が解説され、新学習指導要領の答申文書の中で使用されている言葉の頻出度合いが「主体的・対話的で深い学び」56回に対して、「探究」163回や「資質・能力」559回となっており、「探究」や「資質・能力」というキーワードが如何に重視されているかが示された。2019年度から「総合的な探究の時間」や「特別活動」を先行実施しなければならない状況にある中で、リクルート進学総研「高校教育改革に関する報告2018」の概要が紹介され、「生徒に育みたい資質・能力」の策定が37%程度であること、カリキュラム・マネジメントの課題取組が端緒に着いた状況にあることなど課題が多い反面、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善が9割を超える状況にあるほか、ポートフォリオの導入も7割程度であるとのことであった。高等学校改革に大学の知見を活かし、共に進める段階に来ており、最近では、高等学校と大学がカリキュラムを一緒に作る事例が生まれているとのことであった。

実践成果報告「主体的・協働的学習者育成プログラム」と題して、産業能率大学 AP 高大連携ユニットリーダー 松岡俊氏より、同大学が開発する「主体的」学習者育成プログラムと「協働的」学習者育成プログラムの概要が紹介されたほか、受講している高校生のプログラム受講前後の変容について、主体的学習者診断テストを通じた結果が紹介された。受講前から興味・関心が高い傾向にある中で、探究心や自己肯定感の伸びをねらいとしているところであるが、現在の実施校では概ねその効果が表れている。また、自由記述による生徒の感想においても、メタ認知的に、自分の学びを振り返る姿が見られ、その成果に手応えを感じているとのことであった。

最後に、フロアとの質疑応答では、「高大接続・連携というテーマが大学教員にとってモチベティブであるにはどうしたらよいのか」「高等学校教育改革・大学入試改革を通して、今後、大学教育はどのような備えをすべきなのか」などの質問があり、高等学校と大学という「異文化」同士がお互いを知る機会をもっと設けるべきであり、大学側からすれば、高等学校の授業を見学するなど、もっと現状を知るべきであるとのコメントがあった。

フロアには、大学教職員、高等学校教員だけではなく高校生も参加するなど、大勢の参加者があり、大変盛況かつ有意義な研修会であった。



## 6. 大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学 AP 合同フォーラム「今、あらためて学修成果とは何かを問う：第3期認証評価の先のFDを目指して」

日 時：2019年2月9日（土）13:00～17:30

場 所：関西大学梅田キャンパス

参加者：高林 友美 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

本フォーラムは、認証評価を受けるだけで終わりにするのではなく、評価の本来の目的である学生の学びの質の向上につなげるための議論のために開かれた。はじめに、ただでさえ大変な大学業務に加えるのか、と言われるようなパフォーマンス評価ではなく、大学の発展のために必要なパフォーマンス評価について、認証評価の先を見通しながら検討する必要があると述べられた。開会の言葉のとおり、松下氏の講演や、関西でも先進的な取組を持つ3校の実践を通して、学生の生き生きとした将来のためのFDを考える貴重な機会であった。フォーラムの進行に従い、基調講演、事例紹介、パネルディスカッションについての記録を報告する。

### 第1部：基調講演

テーマ：学習成果とは何か—その評価と教育・学習改善への活かし方—

登壇者：松下佳代氏（京都大学 教授）

松下氏の講演では、学習（学修）成果の意味と分類、そして評価の方法について議論が行われた。学習成果には、目的としての側面と結果としての側面がある。単に結果だけを見るのではなく、目的としての学習成果をはじめにきちんと設定しておくことが重要である。特に、学習の中でも知識・技能・態度を「統合する」機会については、学年を問わず複数回設定しておく必要がある。

評価については、3つの軸が紹介された。直接間接、量的質的という軸はこれまでも示されてきたが、今後課題となるのは「科目レベル・プログラムレベル・機関レベル」という異なるレベルでの評価であると氏は述べていた。このとき日本で問題になるのは、科目レベルとプログラムレベルの評価のギャップである。科目レベルでは、質的で直接的な評価方法がほとんど用いられていない。これは、リソースの不足だけでなく、評価負担の大きさや信頼性と妥当性の担保の難しさが原因だと考えられる。卒業論文やポートフォリオによる試みもあるが、氏は問題の原因から、「重要科目での埋め込み型パフォーマンス評価(PEPA)」を推進する。プログラム全体の目標に直結するような科目で、科目とプログラムの同時の評価を行うことで、実際に新潟大学の歯学部では各学年において実施されている。

本講演で PEPA の実践例と、学生のポジティブな感想を見て、ぜひこのような直接・質的学習評価を取り入れたいと考えた。学習評価は、その後の教授方法の改善と学生の学習改善に役立てられるものでなくてはならない。現在山口大学では、プログラムレベルの評価については各課程に任されている部分が多いが、今後は PEPA のような方法があることも示しながら、AP の一環でコンピテンシー育成の機会と FD の PDCA を加速させるための活動を行っていければと思う。



## 第2部：事例紹介

### (1) 関西大学（教育推進部准教授 岩崎千晶氏、特別任命助教 多田泰紘氏）

一例目の関西大学では、内部質保証システムとルーブリックによる支援・学習改善についての試みが特に強調されていた。関西大学では、マクロ・ミドル・ミクロのいわゆる3つのレベルにおけるPDCAが行われており、内部質保証システムが重層化されている。その全てのチェック段階について、アセスメントプランが立てられており、直接間接・質量の評価が全て設定されている。この計画の一環である、3つのポリシー及びキーコンピテンシーに基づくルーブリックの取組は、アセスメントリストと合わせて非常に充実していた。

ルーブリックは先生に良いな、と思ってもらわないと輝かない、という言葉に示されていたとおり、意義を丁寧に説明するセミナーと、教員と学生が魅力的に思えるようなガイドを準備していると言う点に驚いた。実際に紹介された学部は4つだったが、それぞれの学部の学生と教員が役に立つと感じて使っていることは、教育推進部の尽力の現れであると感じた。単に導入を迫るのではなく、より良い学修のために必要であることを説得し続ける必要を感じ、今後のAP事業の進め方の参考になった。

### (2) 大阪府立大学（副学長 高橋哲也氏、高等教育開発センター准教授 畑野快氏）

2例目の大阪府立大学でもやはり内部質保証システムの重層化が重視されており、これに従った制度が目立った。中でも先進的な取り組みとして、ミドルレベルへのアプローチであるスタートアップ支援制度が報告されていた。来年度から実施を始めるスタートアップ支援制度は、各学部の教育の質保証について、執行部主導ではなくボトムアップ型での議論を目指すものである。各学部の教員が質保証システムについて理解を深めるだけでなく、学部ごとの教員に適した学修成果の可視化を支援するために、教育プログラムにおける質の保証や向上に資する部局での優れた取組に対して経費支援を行う。高等教育開発センターや執行部はあくまでサポート役とし、「手を挙げてくれたらヘルプしますよ」という体制を整えた。これについて高橋氏は、これまでの部局行脚なども踏まえた上で、それぞれの先生が主体的に動いてくれることが重要であると強調していた。畑野氏が報告した教育学部のmeaQs（学生が自ら問いを作る事を目的としたアクティブ・ラーニング支援ツール）などの取組は、学部の教員が主体的に活動をした顕著な例であり、山口大学にもこうした内部からのボトムアップの動きと、それを支援するサポート体制の必要性を強く感じた。

### (3) 大阪市立大学（大学教育研究センター准教授 西垣順子氏、特任助教 佐々木洋子氏）

最後に紹介された大阪市立大学の取組では、YU-Cob Cusに強く関係すると考えられるOCU指標が話題の中心であった。履修支援ツールとしてのOCU指標は、ナンバリングによって整えられた各科目のディプロマ・ポリシー対応とGPを組み合わせることにより、多様な学修成果を視覚化している。全学的に実施するにあたり障壁となっていたGPでの評価については「所属する学部での学修や希望するキャリアによって、理想となる6角形は多様」であることを強調することでクリアしている。地道な教員調査や学生インタビューにより内部の声を拾いあげてきた結果として指標が受け入れられたことは、特筆に価する。より尖った学生を育てるためにも履修支援ツールが必要であるとする指摘は、本学でも参考にしたい。

### 第3部：パネルディスカッション

ファシリテーター：森朋子氏（関西大学 教育推進部 教授）

パネリスト：岡田忠克氏（関西大学 学長補佐） 高橋哲也氏（大阪府立大学 副学長）

飯吉弘子氏（大阪市立大学 大学教育研究センター 教授） 松下佳代氏（京都大学 教授）

パネルディスカッションでは、大きく3つの視点から議論がなされた。

まず、第3期認証評価を控えての各大学の取り組みが話し合われた。大阪府立大学では、市立大学との統合の前に2022年度の認証に向けて、自己点検評価を進めている。認証評価までの時間的余裕から、課題を抽出するための自己点検として、ネガティブな状況も正直に報告を受ける体制づくりをしている。大阪市立でも同時期の認証が予定されているため、大学実態と文化及び学生の特性を確かめている。内部質保証の実態調査として、どのような取り組みが学部ごとに行われているのかをデータ収集している段階だが、まず全部局の理解を得るために各部局への個別説明とニーズの聞き取りを行っている。関西大学では前回2年間で準備したことを踏まえ、戦略を立てている段階である。認証評価のためのワーキンググループが2年間でデータ収集をする一方で、教育改革のワーキンググループも並行して動いており、4月に3つのポリシーを公開することができた。各学部の動きと全学の動きの双方を充実させるために、今年度の3月まで各部局からのPDCAの実践を収集して、来年度の全学の方向性と取り組みの参考にしたいと考えている。

続いて、共通教育が議題になった。京都大学の場合、教養共通教育に関して独立性の高い国際高等教育院が担っている。学士課程教育における連携性については、1・2年生の専門基礎科目とのつながりが強い。関西大学の場合は大学外のNPOなどとの連携も含めて、高度な教養を身につけるプログラムに取り組んでいる。共通教養が全学に開かれているため、改革の足がかりに適していると考えられている。大阪市立大学の場合は、OCA指標がそれぞれのクラスの成果だけでなく、4年間の学修成果を確認できるため、全学共通のものをベースにしながら専門科目を進めることがシステム内部に組み込まれている。大阪府立大学はDPの中に明示されている共通科目の役割を果たすことを共通教育の基本としているが、部局ごとに、機構の科目が果たすものと学部の科目が果たすものの分担が確認できていないため、1つ1つの科目のDPに対する役割を確認していく必要があると考えている。

最後に、IR推進を担う部局と、自分たちで質保証ができていると考えて干渉を拒否する部局の対立について意見交換がなされた。大阪府立大学のスタートアップ支援制度の取り組みや大阪市立大学の認証評価のための内部調査、関西大学の提案型IRのように、現在できていることについて部局から報告を受けた上で、気づきを促進して不足を補う活動が対策として挙げられた。また、京都大学では教育担当理事・大学評価委員長・アセスメント室担当者が全部局を行脚し、グッドプラクティスを全学的に共有することを行った。また、京都大学特色入試において、その学生の追跡調査により手間をかけて選抜しただけの意味があることを示した。

フロアから直接の質疑応答は行われず、関西大学においてアクティブ・ラーニング型授業で活用されている情報共有ツール“padlet”上に寄せられた質疑を元にパネルディスカッションが進んだ。ゲストWi-Fiの準備から事後アンケートに至るまで、関西大学の情報設備の高さと実際の活用が伺えるフォーラム会場であった。

## 7. テーマⅡ・Ⅴ採択校共催シンポジウム「社会が求める高等教育の質保証を考えるー学修成果の可視化・卒業時の質保証ー」

日 時：2019年2月20日（水）13:00～16:30

場 所：大阪工業大学梅田キャンパス

参加者：高林 友美 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

このシンポジウムは、AP事業の最終段階に向けて、大学に対する社会からの要請を再考し、テーマⅡとⅤの成果の共有を促すために開催された。AP委員会委員長河田氏の開会の辞によれば、日本の大学教育を最も大きく変えたグッドプラクティスに続く制度としてAPが始まったことを踏まえて、今後はAPの成果を社会のあらゆるセクターに対して見えるように発表することが重要である。特に中間評価Sの14校にかかる期待は大きく、東京理科大学のAP取り組みや、山形大学・東京都市大学、金沢工業大学の取り組みは経団連や河合塾から言及され広報されていることを踏まえ、本シンポジウムのような大規模な報告会がより一層求められている。最終局面に向けて、APの成果をどのようにアピールするかはAP委員及び文部科学省でも重要な課題とされており、APが日本の大学の今後の質保証を支える土台になりうることを示すべき来年度のために有意義なシンポジウムであった。先進的な事例が多く、山口大学APに対する多くの示唆があった本シンポジウムについて、その進行に従い、基調講演、事例報告、調査報告、そしてパネルディスカッションの概要を報告する。

### 第1部：基調講演

テーマ：内部質保証システムと学修成果の可視化による教育の質保証に向けて

登壇者：川嶋太津夫氏（大阪大学 高等教育・入試研究開発センター センター長 教授）

川嶋氏の講演では、現在の大学が置かれている状況を踏まえて、今求められる教学マネジメントについて、主に内部質保証システムとアセスメントの点から論じられた。

質に関しては、卓越したものが高品質であるという考え方もあれば、目的適合であれば高品質であるという考え方もある。付加価値や成長感、もしくは一定の基準値など、様々な質の捉え方がある。高等教育では法について議論が行われた。学習成果には、目的としての側面と結果としての側面がある。高等教育審議会の指す「質」がどのような定義を用いているのかは現在のところ不鮮明であるが、海外の知見を借りれば、成果物の管理とプロセスの管理を行うことが大学教育で保証すべきものをカバーすると考えられる。そのために重要になるのが内部質保証である。

内部質保証は、ヨーロッパの教育水準のガイドラインによれば、3ポリシーや情報管理、外部評価など様々な要素が含まれているものである。日本の第3期認証評価では内部質保証システムが特に重視されており、そのためPDCAが回っていることが基準協会の示す最も重要な質保証の要素であると考えられる。そのため鍵となるのがアセスメントである。中教審のワーキンググループが述べているように、学修成果の可視化と、教育の質に関する情報公開の双方について、量的指標を用いてより詳しく示すことが、PDCAを促進する。山口大学でもこの提言を重く受け止め、AP終了後も独自指標の公開を続ける必要があるだろう。

## 第2部：事例報告

### (1)新潟工科大学（工学部 工学科 教授 飯野秋成氏）

「企業がつくったものづくり大学」というキャッチフレーズのある新潟工科大学 (NIIT) は、本シンポジウムのテーマである社会の要請に応えるという使命を重視してきた大学である。1 学年 150 人のうち、県内生が 8 割、就職先も 8 割が県内就職という地元志向の高い大学であるため、NIIT 達成度自己評価システムの設計のフィロソフィー「常に身近でサポート」「担当教員による助言指導に活用できる」「保護者も確認できる」の根幹にも、地元に対するミッションの意識が存在している。

カリキュラムマップにもディプロマ・ポリシーへの対応が明記されており、授業ごとにディプロマ・ポリシーへの紐付けがなされている。そのため、自己評価システムや 1~3 年全員の参加する企業との対話会においても、身に付けてきた力を示すことが可能になった。特に就職に繋がる、大学を訪れる企業との対話においても学修成果の可視化が役立てられるという視点は、山口大学ではまだ議論が不足している部分であり、小規模単科大学と国立大学の違いはあるものの、好例として参考になる事例であった。

### (2)日本福祉大学（AP 事業推進委員長 教授 中村信次氏）

日本福祉大学は、テーマⅤの幹事校として、採択校のディプロマサプリメントの状況について報告を行った。学生ごとの 4 年間の学習成果と到達度を提示する書類であるディプロマサプリメントについて、EU での書式を参考にしつつ AP 事業を通して日本版として活用できるようになったものが増えてきている。基本的な表示項目は、学籍と学位、履修状況、正課外活動情報、能力獲得状況（コンピテンシー等）であるが、特徴的なディプロマサプリメントの中には、東京都市大学のような定性情報による学生のアピールを含んでいたり、東海大学短期大学部のように毎期の面談に活用し、面談結果をさらにフィードバックして使ったりしている例も紹介された。

今後の課題として示されていた教員の負担感と信頼性の担保については、まだディプロマサプリメントの活用には至っていない本学にはより大きな課題として今後考える必要があるだろう。テーマⅤのアウトカムを参考にしながら、同じ課題を乗り越えてゆけるよう努力したい。

## 第3部：調査報告

### 登壇者：松村直樹氏（株式会社 リアセック 代表取締役 CEO）

調査報告では、リアセックを通して企業に対してディプロマサプリメントの調査を行った複数大学の調査の概況が示された。ディプロマサプリメントをぜひ活用したいと考えている企業は 2~3 割程度であり、既にあるエントリーシートベースの就職活動にすぐにインパクトを与えるものではないことが分かった。しかし、ポートフォリオの項目や標準化されたコンピテンシーなどについては、これまでエントリーシートでは学生の自己申告に頼らざるを得なかった学生の多様な側面を示すものとして、企業の利用機会につながるはずである。高等教育機関において統一され、かつ客観的根拠の示すことのできるディプロマサプリメントの重要性が議論された。本学が目指すべきディプロマサプリメントは、専門職特化型よりはこちらに近い可能性が高く、氏の議論は参考になった。



#### 第4部：パネルディスカッション

コーディネーター：椋平淳氏（大阪工業大学 教育センター長 教授）

パネリスト：川嶋太津夫氏（大阪大学 高等教育・入試研究開発センター長 教授）

河本達毅氏（文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 改革支援第2係長）

松村直樹氏（株式会社 リアセック 代表取締役 CEO）

飯野秋成氏（新潟工科大学 工学部 工学科 教授）

中村信次氏（日本福祉大学 AP 事業推進委員長 教授）

パネルディスカッションでは、キーワードとして「社会を維持・変革するための高等教育」について広く議論され、課題及び今後の挑戦について大きく2つの視点が共有された。

まず、AP事業のような高等教育改革について社会がどのように受け止めているのかについて議論された。松村氏のように大学ではない第3者が企業から声を集めると、教育側が出せる情報と企業が採用時に欲しい情報のギャップが明らかになっている。多様な学生を集めるためにも、客観性があり、コンピテンシーのエビデンスを明らかに示せるような形式で大学が学生の学修成果について情報公開する必要があると考えられる。これまでテーマVの大学の実践を多く見ている中村氏からは、その知見を通して、学内でも個別のディプロマサプリメントが求められるが、専門職の領域ごとの明示する項目の違いを考慮して、専門職企業との密接なつながりを持ちながら用意することで、社会でも役立てられるものに出るのではないかと提案があった。特に新潟工科大学は、産学交流を盛んに行えることを活かして、どのような能力が必要であるかを企業に聞いてカリキュラム化に役立てることと、学外に向けて学修成果をオープンにして採用活動に役立ててもらおうことを既に始めている。実際に就職率100%を達成している大学によるこの取り組みは今後の示唆として重要であると考えられる。

次に、高等教育以外からの社会への働きかけについて意見交換がされた。APの成果は、文部科学省によって産業界に共有されている。しかし、データサイエンスのような科目内容については産業界の関心があるにも関わらず、大学での学修評価については、成績評価に対する信頼が薄く、質保証の取り組みが伝わっていない状態である。川嶋氏は、この対策として、個人の学修成果だけでなく、プログラムの質保証及び機関レベルの学修成果可視化を促進し、社会に発信することを提案した。氏によれば、高等教育セクターとしての改革はまだ発展途上であり、個々の大学の改善が社会に届いていない。授業外学修時間を指標として示すことに関しても、日本全体でのデータは横ばいであり、改革の成果を示すことができていない。学生の伸びをセクター全体で公表するためにも、トータルで相殺されているような大学の状況を考えていく必要があるだろう。

最後に提示されたセクターとしての動きは、川嶋氏によれば高大接続についても同様の挑戦を抱えているとのことだった。しかし、山口大学の取り組みは多くの面で山口県内の大学及び全国に向けてAPの成果を共有するための働きかけを行っている。こうした取り組みは山口大学だけのことを考えるならば高コストであるが、重要かつ今後も継続してゆくべきことであることが確認できた。また、この取り組みが最終的に社会の要請に応える学修成果の可視化につなげられるように、来月の共有ワークショップなどの企業・高校・大学の連携をより強くしたいと考えた。

## 8. 金沢工業大学・京都市立京都工学院高等学校第2回高大連携教育改革シンポジウム 「学習者中心の教育への転換」

日 時：2019年2月22日（金）13:00～16:40

場 所：京都市立京都工学院高等学校 中央棟ホール

参加者：高林 友美 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

このシンポジウムは、答申の進む2040年高等教育グランドデザインまでを見越した効果的な高大連携を探る会であった。京都工芸高校にて開催され、現役の高校生も登壇するシンポジウムは高大連携のひとつの理想的形が示しており、山口大学の今後のために参考になるシンポジウムであった。会の進行に従い、4件の報告・発表についての記録を報告する。

### 高等学校学習指導要領の改定と工業教育

登壇者：持田雄一氏（国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官・文部科学省 初等中等教育局 参事官（高等学校担当）付産業教育振興室 教科調査官）

持田氏の講演では、これまでも中心に置かれていた学習者について、一層の注目を持って授業を進めるために理解しておくべき新しい学習指導要領について説明が行われた。中教審でも指導要領の改定のために長い時間を書けて議論してきているが、どのような活動ベースであっても様々な力を身に付けさせ、客観的に学力の成長を示すことは今後も課題である。この問題を常に考えることが教員の役割であるとの氏の考えに深く賛同する。

何が出来るようになるか、どのように学ぶかが工業教育でも重視され、その上に職業人としての専門性を重ねていくことが今後より一層重視される。このことは、ものづくりを通して社会に貢献する学生を育てるために「何が出来るか」「どのように学ぶか」を示した各教科の目標にも表されている。知識技術だけでなく、思考力や学びに向かう力など、新学習指導要領に対応した指導項目が増えていることが説明された。

「工業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して」という教科の目標の文言には、実習を総授業の半分以上と定めている工業教育において、実習や資格取得、もしくは多くの学校が参加し始めている競技会などが、目的化することのないようにという提言が盛り込まれている。これはアクティブ・ラーニングの実践についても同様であり、AP事業において促進すべきアクティブ・ラーニングの導入において、この教育方法によって学ぶ力を高めることを常に言い添えるべきであると考えた。

### 「プロジェクトゼミ」を核とした新しい工学系高校の挑戦

登壇者：砂田浩彰氏（京都市立京都工学院高等学校 校長）

次に、開催校京都工学院の校長である砂田氏と、同校の現役高校生による発表が行われた。

まず高校3年生グループ、2年生グループから「プロジェクトゼミ」の最終発表の再現が行われた。龍谷短期大学の学生と協働したワークショップ、地域でのフィールドワークを経て各学生グループが作成した非常時マップや断震住宅設計の成果が高校生たちによって発表された。教員で満杯の会議室で堂々と発表する学生たちの姿は大学生以上に見えた。

その後、校長より全く新しいプロジェクトゼミを持つ京都工学院について説明が行われ



た。発表した高校生たちのプロジェクトがここまで形になったのは、1年次のJAXAに課題を与えてもらい、最終プレゼンを講評してもらった経験と、開校年前から続く金沢工業大学によるプロジェクトデザイン教育の教員研修の影響が大きい。2,3年次のプロジェクトは大学進学を目指すフロンティア理数科と工業のものづくり科の混合グループで、教員も学生もひとつになって協働することも大きな特徴であり、工学院の目標としてきた「関わる・学ぶ・伝える・見つめる」の4つの力の育成の全学的要となっている。こうした学びを統合するプロジェクト学修からは、多くの大学や大学生が好影響を得られると考える。山口大生の学びの活性化の参考にしたい。

### 「社会に開かれた教育課程」の実現を目指して

登壇者：清水 雅己氏（埼玉県立川越工業高等学校 校長）

社会との接続を実現している工業高校の別例として、川越工業高校の校長である清水氏が登壇した。氏は普通の工業高校を活性化させるために、校長着任後の4年間で改革を行った。メディア活用を掲げ、普通高校と異なることをしていることをプレスリリースとして新聞社に流すようにしたところ、全国紙を含めて年間60紙面に掲載されるようになった。また、教え込むべき知識技能と、ヒントだけを与えて答えを教えないようにする課題研究（探求活動）の区別を校長が明示することで、待つ・聞く・見るの姿勢を教員全体に浸透させた。加えて専門学校志望層を大学進学にシフトさせる指導も、継続中の課題である。

パナソニックのエボルタ電車のプロジェクトは、電車好きの一教員が企業にこの子達でも出来ますと電話したことから始まった。技術的支援は受けず、地域企業の技術支援を受けながら、失敗するリスクを高校と企業で負うことを確認して、無事にパナソニックと協力関係を築き、ギネス記録にまでつながった。産学連携のきっかけは、やはり学生の出来ることをよく知っている教員による関係づくりが不可欠なのであると感じ、山口大学におけるフィールドワーク・正課外学修をより活性化させるための示唆が得られた。

氏の発表ではフロアからの質問があがり、プロジェクトの失敗した場合の学生の評価について議論が行われた。教員として、成果物のみで評価するのではなく、過程や失敗作に対する省察まで含めて評価することが必要であるとの熱弁にフロアも同意しており、この課題は現在の大学でも重視されている形成的評価と総括的評価のバランスの問題に対して教員としてひとつの答えを得たと考える。

### アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化

登壇者：森本喜隆氏（金沢工業大学 教務部長・教授）

最後の講演については、学長の大澤氏の欠席により教務部長・教授の森本氏が登壇した。

金沢工業大学は高大連携については、主に高校の教員研修においてプロジェクトデザインの科目によって得られてきた成果を共有することで協働を図っている。AP事業として参考にしたいのは、学修成果の可視化の過程において、学生も入力するポートフォリオを特別奨学生の継続ポイントと連携させているという取組であった。アクティブ・ラーニングの成果に対しては量的直接評価だけでなく、間接評価も重要である上、正課外の取組を把握できる利点は大きい。こうした学生が入力する動機づけについて、山口大学でも今後検討できると学修成果の可視化が更に促進されるのではないだろうか。更に情報を集めてゆきたい。

## 9. 創価大学第9回学士課程教育機構FD・SDセミナー「2018年度AP事業報告会」、 創価大学ラーニングcommons“SPACE”開館5周年記念シンポジウム

日 時：2019年2月23日（水）12:50～17:30

場 所：大阪工業大学梅田キャンパス

参加者：高林 友美 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

このシンポジウムは、AP事業のテーマI・II複合型の大学の中でも先進的な取り組みを続けている創価大学におけるFSDSセミナーとして、大学のあるべき姿を問う深い議論と、ラーニングcommonsでの具体的な取組の報告が組み合わせられたものであった。大学での大きなビジョンをともにし、かつ始めの一步としての行動のヒントも得られるという点で、意義深いセミナー及びシンポジウムであった。全体の進行に従い、それぞれの発表内容を以下に報告する。

### 第1部：創価大学AP事業取り組み報告

登壇者：関田一彦氏（創価大学 教職大学院 教授）

氏の講演では、創価大学におけるAP事業の進捗について、当日午前に行われた外部評価委員からの講評まで含めて最新の状況が共有された。

アクティブ・ラーニングが目的ではなく手段であることを踏まえ、初等中等教育でも理解度、クラスの目標に対する達成度だけでなく、能動的な学修の機会が十分に確保されていたかを全授業アンケートで聞いている。良質なアクティブ・ラーニング確保がテーマIの重要な取り組み課題になっている。

可視化についても、これが目的ではなく可視化した結果をどうするのかを考えておかなければ評価倒れになってしまう。学生が何を学び成長しているのかについて、学びを振り返り次につなげることができてこそ主体的な学びである。可視化した自身の学びについて、何が出来て何が足りないのかを把握するだけでなく、具体的な行動変容までつなげてゆく必要がある。様々なアセスメントツールを用意しているが、それを次につなげるところまでを範疇としていることが創価大学の特徴であると言える。4年間で最低3回はアセスメント科目を通して互いの学修成果の評価を行い、振り返り、自己成長記録を更新してまとめる機会を提供している。

入試に関してもアクティブ・ラーニングの取組を敷衍している。PASCAL入試によって基礎的知識のテストではなく、アクティブ・ラーニングの経験を評価するペーパーベースではない試験を推進している。この入試のフォローアップとして、どの学生もスムーズに大学の授業を充実させる流れに乗れるように、入学前プログラムや入学前プレースメントテスト、計画的な学習習慣の確立・具体的なレポートの書き方・そして様々なタイプの子どもたちに対応する対人関係力の向上を目指す初年次教育科目の設定が学長直属の初年次教育推進室によって整備されている。

主な数値目標については、概ね目標を達成しているが、アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合が大きく下がっている。これはスーパーグローバル大学事業の一環で英語授業科目の整備を行っていることに由来するものであり、独自指標の「良質なアク

ティブ・ラーニングの割合」が上昇していることから、成果の交替は意味しないことが説明された。また、この点については外部評価委員からも、そもそも6年間で指標の目標値が変わらないことこそ問題であるとの指摘を受けており、今後の持続も見通した母数を使って正直な値を講評してゆくことを方針とすることになった。

5名の外部評価委員のうち、久留米大学教授安永氏より、良質なアクティブ・ラーニングのストーリーがしっかりと説明できるようになっていることに高い評価が示された。高大連携にまで広がり、単なる接続ではなく長い一連のつながりが論理的であることが特徴的である。今後は中身の濃い取り組みの記録を残し、学内外に共有することが求められると述べた。また、実践的な自己評価・相互評価の仕組みづくりについても順調であるため、こうした振り返りの授業が学生全員に成果が担保されるよう、パフォーマンスだけにならないための工夫を他大学のためにも明示していくことを期待されている。これだけの綿密な事業推進にもさらなる期待がかかることを知り、山口大学でも加速させるための活動を行っていかねばと思う。

## 第2部：講演「AI時代の大学での学び」

登壇者：飯吉透氏（高等教育研究開発推進センター長・教授）

個別対応化のパラダイム転換において、箱物のひとつである高等教育は「加算的バージョンアップ」が求められている。空間的な面では、オープンエデュケーションを活用した新たな高等教育モデルの模索が必要になるだろう。このとき、AIを含む新しいツールはどのように活かされるべきか議論が必要になる。

教育イノベーションは、便利なツールなどの技術的リソースだけでは十分でなく、精神的所産までを含まなければ何も起きない。体罰の価値観が残ったまま教育にロボットが導入されれば、叩くためだけの機械が使われても不思議ではない。技術と共存するためには人間でなければ出来ないことが何かを考えながら、本当に学びたいもの同士が積極的に学ぶコミュニティとしての大学を整備していくべきだろう。自動採点などのAIが代替することができるものについては、その意味はさておき、実用化する流れは避けられない。しかし、大学で学ぼうとする「知の食欲」を刺激し、コミュニティを築くことは人間が行うしかない。

本来見なければいけないにも関わらず避けてきたものを見せられたかもしれないが、技術が言語や国の壁を破ったように、大学の壁を破る必要があると感じたと言うフロアの感想が印象的であった。技術革新による大きな変化については、この感想の以前に、まず部局によってサイロ化している大学内の壁を取り払う必要があると考える。創価大学は規模にも関わらず教育学部・経営学部の連携を元に全学的な教育改革が進んでおり、山口大学も参考にしたい。

## 創価大学ラーニングコモンズ“SPACe”開館5周年記念シンポジウム

ファシリテーター：関田一彦氏（創価大学 教職大学院 教授）

パネリスト：山崎めぐみ氏（創価大学学士課程教育機構 准教授）

斉藤幸一氏（広島修道大学 学習支援センター 学習アドバイザー）

木原宏子氏（同志社大学 学習支援・教育開発センター アカデミック・インストラクター）

嶋田みのり氏（東北学院大学 ラーニングコモンズ 特任助教）

図書館中心ではなく、元々この場所に建っていた野外ステージを模した席のある、創価大学の学修支援の中心地として作られたラーニングコモンズ「SPACE」において、これまでのSPACEの5年間の記録について、現在全国の各機関で働く歴代の担当者が振り返ったのが本シンポジウムである。

SPACEはグループで話し合うスペース、外国語学修スペース、個別の席は「シーゾーン」という静寂スペースなどを設けている。クラスでの学修が脳を司るならば、ラーニングコモンズは酸素を供給するポンプの心臓として働いている。特に言語学修については、卒業生アンケートや入学後の英語力の低下の問題を解決するというミッションを負ってこの場所が建てられた。現在SPACEの副センター長も勤める山崎氏によれば、2007年まではFDと学修支援の両方を担っていたセンターが、GP事業を活用しながらスタディーリーダー（学生ボランティア）やレポート支援を行うものになった。

シンポジウムでは、元助教たちがそれぞれの思い出を振り返る場面が中心であったが、途中で示された学修支援の相談状況の統計が興味深かった。本学LA講座で示されていた同志社の人文系のラーニングコモンズをより極端にしたような状況で、4月に固まりその後は相談数が激減する。特に秋学期の履修相談に呼び込むことが今後の課題であるとのことだった。これまでの学修支援セミナーとして開かれてきたプログラムには、本学SLPのようなライティング講座が多かったが、グループワークがまた、ランチタイムのブラウンバックFD研修も、複数のGP事業による潤沢な資金が前提となるものの、より多くの参加者を巻き込む方法として今後の参考としたい。

## 10. 日本福祉大学（美浜キャンパス）訪問調査

日 時：2019年3月1日（金）10:20～11:50

場 所：日本福祉大学美浜キャンパス・研究本館2階会議室

対応者：日本福祉大学教務部長・全学教育センター長 中村 信次 教授  
日本福祉大学全学教育センター・学修アドバイザー 村川 弘城 助教  
日本福祉大学学務部 大口 将 部長  
日本福祉大学教育開発課 榎本 綾

訪問者：山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授  
大阪府立大学 高等教育推進機構 高等教育開発センター 深野 政之 准教授  
宮崎国際大学 AP アセスメント・オフィサー 大関 智史 助教

### 質問事項：

#### (1) 日本福祉大学における AP 事業のねらいと現在の進捗状況、成果と課題

日本福祉大学における AP 事業の中心は、統合学生カルテや学修到達レポートに関するシステム開発・運用、さらには、学修アドバイザー（3名（うち1名は基礎リテラシー養成、2名はキャリア・専門職養成を担当し、後者は資格予備校出身者を採用））による基礎リテラシー養成プログラムやキャリア・専門職養成プログラムの開発・運用である。統合学生カルテについては、社会福祉学部・子ども発達学部では運用が始まっているが、2019年度から看護学部を除く5学部においても運用が始まる。特に、健康科学部リハビリテーション学科では関心が高い。なお、看護学部では、当該学部での既存の仕組みを運用している。

基礎リテラシー養成プログラムは1年次ゼミ科目（通年・4単位（社会福祉学部））でパイロット的に試行し、教員向けの動画コンテンツを作成している。

今後の課題としては、AP事業終了後の学修アドバイザーの維持継続、特任教員や非常勤講師を含めたFD・SD参加率の向上などである。

#### (2) アセスメントポリシーの内容と策定プロセス、各学部（学科）における各年次段階でのアセスメントの内容

2017年度に日本福祉大学アセスメントポリシー（マクロ・メゾ・ミクロ）を策定した。他大学の事例を参考にするというよりは、教育課程全体の評価指標の明確化の観点から、AP事業での取組と関連付け、トップダウン形式でとりまとめた。実質的な運用はこれからである。

#### (3) 正課内外の学びを集約するポートフォリオシステム「統合学生カルテ」の構成内容と具体的運用方法（教職員による修学指導や学生による振り返りの機会設定や工夫など）

統合学生カルテについては、各学部の運用に応じて変更可能な可変性の高いシステムを導入している。学生は、学年ごとに当該年度の目標等を記入するとともに、年度末には、全学 DP 評価ルーブリックの観点に基づき自己評価し、指導教員が同じく全学 DP 評価ルーブリックを観点に「S、A、B、C」の評点とコメントを付す。また、4年次には指導教員は総評を行う。



統合学生カルテに関する説明や入力機会について、社会福祉学部・子ども発達学部ともに、1年次は「情報処理演習」（1年前期、1クラス40名程度）において行い、2年次以降は各学部のゼミ単位で指導を行っている。学生の入力率は、1年次において9割程度、2年次以降において7割程度である。

(4) 3つのポリシーにおける内部質保証の実質性、特に、ディプロマポリシーに基づき、カリキュラム・マネジメントは機能しているのか。

3つのポリシーの公表義務化の時期において、3つのポリシーを見直し、カリキュラムマップを整備した。カリキュラムマップに即して、各授業科目シラバスが記載されているか、各学部教務委員がチェックする仕組みを強化した。また、学生授業評価アンケート実施率がほぼ100%であり、当該授業の到達目標達成度などをチェックする指標となっている。

今後は、学生のDP達成度に関するデータを参照材料にして、カリキュラムマップの整合性などをチェックしていく予定である。

なお、日本福祉大学におけるDP達成度の可視化の仕組みは、当該学生の単位取得科目に寄与するDP項目について、成績区分（S（4）、A（3）、B（2）、C（1））に応じて加算し、学修到達レポートにおいてレーダーチャート化している。

大学である以上、建学の精神に基づく教育を行うことが大切であり、その点が専門学校との違いである。そういう意味において、資格系学部でも、日本福祉大学スタンダードに規定された汎用的能力の育成の大切さを認識して教育に当たる必要がある。

学生へのDPの周知については、全学教育センターが行うオリエンテーションの機会において、授業科目の位置付け等を含め、説明を行っている。

(5) 学修到達レポート活用におけるステークホルダーとの接続（チューニング、意見交換の有無など）

毎年度開催される外部評価の機会において、ステークホルダーとの意見交換を行っており、学修到達レポートをはじめとしたAP事業内容を話題としている。

就職先インタビュー調査を通して、学修到達レポートの記載項目の要望等を意見聴取している。卒業生追跡調査では、卒業して半年～約1年経過した卒業生を対象に、日本福祉大学スタンダードで定めた25項目について、卒業時に獲得しておく必要があると現在感じている割合を聴取している。



## 11. 大学コンソーシアム京都第 24 回 FD フォーラム「大学におけるダイバーシティ」

日 時：2019 年 3 月 2 日（土）13:00～17:00, 3 日（日）10:00～15:00

場 所：立命館大学衣笠キャンパス

参加者：高林 友美 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

現代の大学においては、異なる人々が互いに協力する社会を築くために、様々な人々と出会い学ぶ場をデザインすることが求められる。新しい知を築くという開催校のスローガンと重なるテーマでもある「多様性」に関連した最新事情と、AP 事業でも複数行う FD についての基礎を学ばされたシンポジウムと分科会について、その記録を報告する。

### 1 日目：シンポジウム

テーマ：大学に集う人々の多様性にいかに向き合うか

コーディネーター：山田 創平氏（京都精華大学 人文学部 准教授）

大学にいる学生・教員・職員はもちろん、地域住民や公開講座受講生には様々な背景が存在することが増えた。これまでの当たり前を通せば、問題が起きることは想像に難くない。留学した学生が人種差別的発言をしてしまい帰国せざるをえなくなった、人権に対する配慮が足りないキャンパスでセクシャルハラスメントの問題が起きた、などの事例は枚挙に暇がない。本シンポジウムは、世界基準の対応をするために今後大学に必要なことは何か、各分野の専門家からの提言をもとに議論したものである。

パネリストに共通する提言は、松波氏の紹介した“Nothing about us, without us”の言葉に尽きると感じた。人種差別の問題から生まれたと言われる、障害者のアクティビストたちによって広げられたこのスローガンについて、大学の運営にも取り入れる必要を感じた。学修支援を考える YU・AP においては、授業を実際に行っている教員や、学生自身の声を傾聴するのはもちろん、弱められたり困ったりしている一部の人がいないかどうかについて配慮していくことが重要だろう。その配慮について、具体的な参考事例となるものがパネリストの各発表に見られたため、それぞれ発表順に紹介する。

#### (1) ウスビサコ氏（京都精華大学 学長）

サコ氏は特に異文化コミュニケーションの視点から、マリ出身で中国と日本の学校に通った自身の異文化交流の経験から発表を行った。空気を読むという日本のコミュニケーションの独特な点について、違いを無視することの問題が指摘されていた。

グローバル化については近代以降の「多文化強制」の歴史を踏まえる必要がある。分離と差別構造が根強く残っており、多様性と多文化主義の違いが理解されていない。人間尊重と自由自治を重んじる京都精華大学では、学生一人ひとりが自分の地図を描くことこそがカリキュラムを組むことであると考えている。ダイバーシティ宣言を 2018 年に発布し、ダイバーシティ推進センターと学修支援センターの学生相談室が個別の悩みに対応する制度を整えた。多様性を認めて学び合う精神を涵養するために、「違いと共に成長する」ことを全学的に支援している。既にヒジャブワークショップや学食のハラール対応、多目的トイレの設置など短期間で多くの成果を残したが、今後は大学が行うのではなく、学生が主体

となってイベントを企画することを目指している。プロトタイプとして、既に学生たちの団体により、留学生との交流を積極的に進めるだけでなく、セクシャリティのワークショップまで自主開催されている。

既に来ている留学生をどれだけ巻き込み、留学生たちから学ぶと言う経験を学生に確保させるかが肝要である。ダイバーシティを否定する社会は存続できないという氏の発言は、国立私立に関係なく、今後の大学の生き残り戦略に直接関わる重要なものだと考える。

### (2) 日高康晴氏（宝塚大学看護学部 教授）

日高氏からはLGBTsの自己肯定感に関する研究の知見と、エイズ対策・薬物対策の最前線の現場での調査の経験から話題提供がされた。性的指向と性自認について、日本では啓発活動が中心であり、具体的な国の動きはほとんど無かったと氏は言う。2015年の初等中等教育局の通知以来、毎年人権担当の研修など行政説明が行われるようになった。この動きに従いようやく学校現場における取り組みが始まっているが、まだ理解が進まない現場が多い。現在LGBTsについてはインターネット調査では人口規模の6~8%、また日高氏の行った行動ベースの調査では4.3%など、様々な調査で存在が顕在化してきた。この調査の結果の中でも重要なのは、いじめや自傷行為という問題について、全年代を通して、マイノリティたちが他の群と比べて格段に高いリスクを負っていることが分かったことである。データから見てもケアが必要なのは明らかである。

ヘイトクライムはアメリカでは人種、宗教の次に性的指向・性自認が原因になっている。日本のメディアでも、政治家の無理解な発言やバラエティ番組での差別的表現が流されており、マイノリティの子どもたちの自己肯定感が健全に育つような状況ではない。同様に、FDでLGBTsのことを伝えてもせせら笑うような反応を受けることも多いと言う。日高氏のようなデータに基づく情報をより広く発信していくと共に、意識改革が必要である。

### (3) 松波めぐみ氏（立命館大学生存学研究センター 研究員）

松波氏は、障害学の視点から、主に障害の考え方と障害者差別解消法についての議論を紹介した。250回以上の研修を行っている氏は、特に大学における障害の見えにくさについて指摘している。日本では15%の人が障害者手帳を持っているにも関わらず、多くの場合そのような認識のある教員は少ない。これは、障害の責任を個人に帰属させる「障害の医療モデル」による、障害や少数者に対する無配慮と社会構造への気付きの不足による現象である。

障害者とは、援助すべき相手ではなく、環境に目を向けた「障害の社会モデル」に従って見れば、社会の方に障壁と不公平な制度・設備があるために権利を奪われている者たちである。不当な差別的取り扱いを行わないことはもちろん、日本学生支援機構などが公開している受験から卒業指導までの具体的対応策をまとめた『解決事例集』などに見られるような「学びの場の調整」を行うことが求められている。既にある事例を参考にしながら、その場と人に応じた調整をしていくことこそが障害者差別解消法の本当の意味である。「転ばぬ先の杖でも、魔法の杖でもない」と述べられたとおり、合理的配慮とは地道な話し合いと、当事者と関わることによる開発的プロセスである。あらゆる学生と教員が多様性から学ぶ機会という大きな教育資源は、障害者の権利が守られることによって豊かになることを踏まえ、多様な人と場を共にして事業を進めることが重要である。

#### (4) あかたちかこ氏（大阪市立阿武山学園 専門講師）

児童自立支援施設（中学生の少年院にあたる施設）の性教育・個人性教育・職員のスーパーバイズなどを兼業する講師としての経験から、対人支援やマイノリティ対応から多様性の意味について問いかける講演が行なわれた。「炭鉱のカナリア」でもある児童自立支援施設において、発達障害やLGBTsの問題は早くから議論がされている。先行事例として分かることは、画一的な対応は不可能であり、対話を続けて個別具体的な対応策を築き続けることだという。そのような対話において重要なこととして、氏は「背景を想像すること」「なるべく対等に対話すること」を挙げていた。これは児童自立支援施設に限られず、大学での特別な支援を必要とする学生の対応や、普段の窓口対応にも敷衍できるコミュニケーションの基本であるだろう。

多様性を担保することは、少数派のためでなく、関わる人々全てにとっての恩恵に繋がる。色々な立場に置かれた人がいる中で、限界もあるものの、共に社会を築くことが重要である。特に学問の場である大学においては、誰かの口を封じることは本来の目的の阻害になりかねないというあかた氏の語りには、人間関係から理想の組織を築く考え方が感じられた。

シンポジスト全員で質問シートを元にパネルディスカッションが行われ、1) マイノリティ個人に責任を負わせることの問題、2) 制度・マニュアルによる普遍的対応と対話による個別対応のバランスの問題、3) 対話のための仕組みの問題、という3点が話し合われた。

サコ氏より、組織の理想と個人の職分のギャップについて、対等な対話や歩み寄る姿勢が大事であることが指摘された。話し合いながらシステムを動かし、失敗したら改善することが重要である。特に学長でありながら、責任を取る・採算を取るという点に躊躇する教員の代わりに機構やセンターを自ら率いてきた氏の指摘は重く感じられた。

日高氏より、マニュアルと制度を用意するのも、その枠にはまらない対応をするのも、どちらもコストがかかるものであることを踏まえて、合意形成のためには自分の大学の中と外の事情をよく理解して発言を続けることと、仲間を作りながら行動を進めることで本当に公正なことができるのではないだろうか、との提案があったのが印象的であった。

あかた氏は、システムが必ずしも個人理解のあとにあるのではないと述べていた。同時に、対応する人・対応される人の双方が幸せになれる形での解決を目指し、お互いの好き嫌いを超えて、相手と自分を大切にしている関係の中で解決していくことの必要を訴えており、多様性を考えるための基本的なスタンスを学ぶことができた。今後の本学での取り組み、特にFDSOにおいて、こうした姿勢をAPが率先して見せることが望ましいだろう。

## 2日目：分科会「特別支援学校教員養成における主体的な学修と地域連携の在り方」

2日目は、大学における多様性について様々な分科会がおこなわれた。今回参加したのは特別支援に関わる分科会であり、基本的には京都教育大学、関西学院大学、日本福祉大学、及び京都ノートルダム大学における教員養成の実態についての報告が主であった。その中でAPに関係する地域連携と主体的学修について言及があった部分について報告する。

第1報告者の小谷裕実氏（京都教育大学 教育学部 教授）によると、課題のひとつに学生の特性に配慮することと実習との兼ね合いがある。大学教員だけでなく付属校の校長でもある氏にとって、他者から触られることでパニックを起こすなど、特別な配慮を要す

る学生の教育実習は大きな課題である。効果的な解決方法は模索中ながら、質問をすると高校時点のキャリア教育において、学生の特性と将来についてきちんと考えて対応しておくべきであるとの答えを得た。この問題を考えると、高大連携の意義はこのようなミスマッチを産まないことにあるはずであり、AP 事業ができることもあるのかもしれない。

第 2 報告者の丹羽登氏（関西学院大学 教育学部 教授）においても、個別性と実習についての問題は報告されていた。発達障害を持つ学生が教育実習に行くことで、本人は自覚がないまま、実習先に多大な負担を与えてしまう場合がある。張り付くことのできる院生のサポートなどの十分なフォローと、普段の授業を持つ教授陣の綿密な面接指導が不可欠である。本学の地域連携型の授業では、グループワークの効果により個人の特性の違いは大きな問題になっていないと考える。しかし今後、教育実習に近い個人のワークを地域と協働して行う場合には、アクティブ・ラーニングの点からだけでなく、こうした事例を踏まえて慎重に授業を組み立てる必要があるだろう。

第 3 報告者の金森克浩氏（日本福祉大学 スポーツ科学部 教授）の報告では、卒業生ネットワークの活用と、スポーツ科学部ならではの体を動かす授業の実践が特に目を引いた。座学・実習・キャリア形成のどの時点でも学生の特性上の課題が大きいのが、福祉大が積み重ねてきた全国で活躍する卒業生と、新しい学部における授業デザインの工夫によって、上記の学校と共通する悩みを少しずつ解決できるのではないかと考えた。また教員養成に限られず、山口大学の地域連携型のアクティブ・ラーニングのためにも、長期的視点と短期的視点の双方が重要であり、まだ活かすことのできていない資源について振り返りたいと考えた。特に京都ノートルダムと 30 年以上の交流によって構築された卒業生を中心とした現職特別支援教員・教職課程学生・当事者の NetCommons を利用した SNS は象徴的な教育資産であり、このような長期的にも短期的にも活用できるネットワークの仕組みづくりが急がれるだろう。

## 12. 千葉大学教育学部 AP 事業訪問調査

日 時：2019 年 3 月 4 日（月）14:00～15:10

場 所：千葉大学教育学部 2 階会議室

対応者：千葉大学 次世代才能支援室長 工藤 一浩 教授

千葉大学 教育学部 飯塚 正明 教授

千葉大学 教育学部 川名 正信 副事務長

訪問者：山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授

### 質問事項：

(1) 千葉大学の AP 事業（高大接続事業）における運営体制、事業のねらい、今後の方向性についてご教示願います。

千葉大学の AP 事業は、中高生を対象に、教育学部が中心に行ってきた、JST 事業委嘱「未来の科学者養成講座」、「次世代科学者育成プログラム」などの実績が基礎となっているほか、理学部・工学部が中心に行ってきた「先進科学プログラム」などの取組が活かされている。

基礎力養成講座（夏休みや日曜日開講）には、千葉県内の高校生のほか東京都内の高校生が受講している。当該講座受講中に、高校生には取り組んでみたい課題を聞く。

G-スキッパー養成コースは、大学教員による面接を経て、半年間程度の課題探究を実施する。生徒の希望テーマに応じて、人文社会科学系・自然科学系を問わず、関連する大学教員の協力を依頼する。課題研究の時間確保などから高校 2 年生が主流である。

グローバル教育支援は、平成 24 年度「大学の世界展開力強化事業『ツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）』」での取組を基礎に、東南アジアの高等教育機関と連携して、海外の大学生・大学教員と日本の高校生による合同の研究発表会を行っている。また、千葉大学留学生が高等学校派遣され、ポスター発表の指導等を行っている。

次世代才能育成支援室は、14～15 名の委員で構成された委員会形式で運営されている。AP 事業では事務補佐員 3 名を採用しているほか、実験等に必要な消耗品費の支出がメインである。

(2) 高大連携カリキュラム研究や高大協働教育の具体的内容や成果、学生・生徒の感想などについてご教示願います。高大連携（高大協働）の運営体制の仕掛けづくりについてご教示願います。

基礎力養成講座、G-スキッパー養成コースが高大連携カリキュラム研究の一環に位置付けられる。グローバル教育支援は、高大協働教育の一環に位置付けられる。

高大接続推進委員会、理学教育高度化推進委員会などを通して、大学教員と高校教員が協議を行っている。そのほか、長年の高校訪問等の積み重ねにより、現在の信頼関係を確立している。



(3) AP 事業における千葉大学教員、高校教員の関わり方の詳細について、ご教示願います。千葉県全域での SSH 化の具体についてご教示願います。

千葉県内の高等学校同士が、SSH 校をグットプラクティスとして、他の高等学校への普及を図っている。AP 事業における連携高校は 39 校（千葉県、東京都）。

(4) 学生・生徒の学修成果の測定（評価）について、どのように行なわれているのか、ご教示願います。

各講座・コースでの参加者アンケート等を通して、当該プログラムの改善充実に活かしている。

(5) AP 事業の取組を通して、大学入学試験、大学における初年次教育への具体的な影響や効果などについてご教示願います。

AP 事業で行っている各種講座・コース受講が大学入学試験の要件に活かされることが期待される。例えば、園芸学部では、AO 入試と関連付けて、基礎力養成講座を企画実施している。

また、基礎力養成講座の受講をもって、大学入学後の既修得単位として認定することを目指したい。

## IX. 活動日誌・編集後記



## 活動日誌

(2018年4月1日～2019年3月31日)

年月日	記事
2018年5月15日	テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第15回会議
2018年5月15日	<p>第3回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)【キャリア開発】 『ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事～大学職員の先輩に聞いてみよう～』 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 概要：【開会挨拶・趣旨説明】16:10～16:20 【第一部 話題提供】16:20～17:00 「ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事」 江口 貴理(総務企画部地域連携課地域連携係) 松原 花梨(情報環境部学術情報課情報サービス係) 【第二部 ダイアログ】17:00～17:35 【クロージング・閉会挨拶】17:35～17:40 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2018年6月6日	第13回アドバイス会議
2018年6月18日	第1回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会(YU-AP委員会)
2018年7月4日 5日	<p>第9回・第10回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)【ラーニング・スキル開発】『ライティング入門講座 ～レポートの書き方の基本的な作法とコツをつかめ！～』 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 共通教育棟2階26番教室 概要：①レポートの書き方の基本的な作法 ②レポートの書き方のコツの伝授 ③実際のレポートの事例を通じた演習 守本 瞬(金沢大学附属図書館係長) (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2018年7月30日	第1回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会・小委員会
2018年8月24日	第2回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会・小委員会
2018年10月2日	第2回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会(YU-AP委員会)
2018年10月22日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) 『アクティブ・ラーニング(AL) ベストティーチャー表彰記念FD・SD ワーク ショップ～第2回AL ベストティーチャーによる模擬授業～』 場所：共通教育棟1階16番教室 概要：【開会挨拶・趣旨説明】16:10～16:15 【模擬授業 Part1】16:15～16:55 「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり ～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～」</p>

	<p>辻 多聞（山口大学大学教育機構学生支援センター講師）</p> <p><b>【模擬授業 Part2】 16:55～17:35</b></p> <p>「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング ～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～」</p> <p>仁平 千香子（山口大学国際総合科学部助教）</p> <p><b>【質疑応答・対話】 17:35～17:55</b></p> <p><b>【クロージング・閉会挨拶】 17:55～18:00</b></p> <p>（総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2018年10月31日 11月5日	<p>第11回・第12回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP)【ラーニング・スキル開発】『プレゼンテーション入門講座 ～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ！～』</p> <p>場所：総合図書館アカデミック・フォレスト</p> <p>概要：①プレゼンテーションの基本的な作法 ②プレゼンテーションのコツの伝授 ③プレゼンテーション実践ミニワーク</p> <p>大野 圭司（株式会社ジブンのオト代表取締役）</p> <p>（総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2018年11月22日	<p>テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第16回会議</p>
2018年11月22日	<p>第14回アドバイス会議</p>
2018年11月22日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）FD・SD ワークショップ 『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは ～今、改めて学修成果の可視化について考える～』</p> <p>場所：共通教育棟1階15番教室</p> <p>概要：【開会挨拶・趣旨説明】 16:20～16:25</p> <p><b>【事例紹介&amp;話題提供】 16:25～17:35</b></p> <p>「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」</p> <p>江本 理恵（岩手大学教育推進機構准教授）</p> <p>「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」</p> <p>鷹岡 亮（山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授）</p> <p><b>【質疑応答・全体共有】 17:35～17:55</b></p> <p><b>【クロージング・閉会挨拶】 17:55～18:00</b></p> <p>（総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2018年12月17日	<p>大学マネジメントセミナー2018 in やまぐち 『地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2 ～新しい時代における大学マネジメント～』</p> <p>場所：山口大学会館2階会議室</p> <p>概要：【受付】 14:00～</p> <p><b>【開会挨拶・趣旨説明】 14:30～14:40</b></p> <p><b>【基調講演】 14:40～15:50</b></p>



	<p>①「輝け大学、輝け！大学人」 高梨 桂治（沖縄科学技術大学院大学副学長（財務担当））</p> <p>②「大学人としての『生きがい』『やりがい』とは」 各務 正（梅光学院大学副学長）</p> <p>【シンク・ペア・シェア（意見交換・全体共有）】 15:50～16:25 【クロージング・閉会の挨拶】 16:25～16:30 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2019年1月8日	第3回ALベストティーチャー表彰式
2019年1月25日	2018年度「ラーニング・アドバイザー養成講座」①
2019年2月15日	2018年度「ラーニング・アドバイザー養成講座」②
2019年2月21日	テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第17回会議
2019年3月5日	第3回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP委員会）
2019年3月11日	自己点検・評価タスクフォース第5回会議
2019年3月14日	<p>山口大学 共育ワークショップ 2019 『多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは ～高大接続・社会接続の観点から～』 場所：山口大学会館2階会議室 概要：13：30～13：40 開会挨拶・趣旨説明 13：40～14：10 『「巻き込む力」を育むには～企業家（起業家）からのメッセージ～』 北尾 洋二（株式会社ザメディアジョン・リージョナル代表取締役 ／内閣官房地域活性化伝道師） 14：10～14：40 『「探求する力」を育むには～高等学校現場からのメッセージ～』 溝上 広樹（熊本県立熊本北高等学校教諭 ／アクティブ・ラーニング型授業研究会くまもと代表） 14：40～14：55 「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）からの メッセージ」 林 透（山口大学大学教育機構大学教育センター准教授） [休憩] 15：05～16：50 SDGsカードによるワークショップ 「2030年多様化社会を見つめ、 必要とされるコンピテンシーについて考えてみよう！」 中川 耕治（学校法人広島城北学園広島城北中・高等学校教頭） 越 希美江（Communication Lab. Beyond words 代表） 16：50～17：00 クロージング・閉会挨拶</p>

2019年3月25日	第5回外部評価委員会 (外部評価委員：高橋 哲也 大阪府立大学副学長、秦 敬治 岡山理科大学副学長、栗林 正和 山口県立山口高等学校校長)
------------	--

## 編集後記

2018年度は、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）（テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・テーマⅡ（学修成果の可視化）複合型）にとって、前年度の中間評価での「S評価」という高い評価を受けて、一層気を引き締めて取り組んだ1年間であった。この1年間で特筆すべき取組は、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の運営指導や高等学校の探究活動に関する研修支援をはじめとした「高大連携（接続）」の取組が一層進展したこと、テーマⅠ・Ⅱ複合型の幹事校（京都光華女子大学短期大学部）と協力して「チームAP」の取組に参画したことの2点が挙げられる。AP事業5年間の取組の中で育まれた山口県内高等学校やAP採択校同士の情報交流を根気強く行ってきた結果と言えよう。

テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）では、学士課程教育におけるアクティブ・ラーニング（AL）の促進は順調であり、ALベストティーチャー表彰制度も3年目を迎え、5科目14名の教員が第三回表彰を受けた。ALベストティーチャーによる模擬授業型ワークショップも大学教員・高等学校教員から好評であり、大勢の参加者を集めることができた。今後は、本学におけるALの体系的整理を手掛けていきたい。

テーマⅡ（学修成果の可視化）では、学修支援に力点を置き、正課外教育プログラム（SLP：スチューデント・リーダー・プログラム）によるラーニング・スキル支援のほか、2年目を迎えたラーニング・アドバイザー養成講座では前年度を超える13名の受講生が認定証を手にした。さらに、直接評価と間接評価を活用した学修成果の分析作業も一層進みつつある。

いよいよ来年度はAP事業の最終年度に当たる。これまで築き上げてきた取組を総括するとともに、AP事業終了後の継続性を視野に邁進していきたい。今後とも、各方面からのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

---

山口大学のAPもいよいよ終盤に入りました。

事業を通して分かったこと・分からなかったこと、出来たこと・出来なかったことが、このアニュアルレポートに示されていると思います。多くの方々のご尽力により素晴らしい成果を残してきたこの事業を、助成終了後に向けてソフトランディングさせるべく精一杯努めなくてはならないと、改めて確認させられました。

教育活動の改善は、学生をはじめとする大学に関わる全ての人のより良い学びを築くために行われます。学生が主体的にいきいきと学べるようになることは勿論、学内外の多くの方々にとって意義深いものになるように、これまでの成果を活かしたいと思います。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

大学教育機構 大学教育センター助教（特命） 高林 友美

## 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アニュアルレポート 2018

---

発行 : 山口大学  
大学教育機構大学教育センター (YU-AP 推進室)  
〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1  
TEL. 083-933-5261  
2019年3月 発行

---

